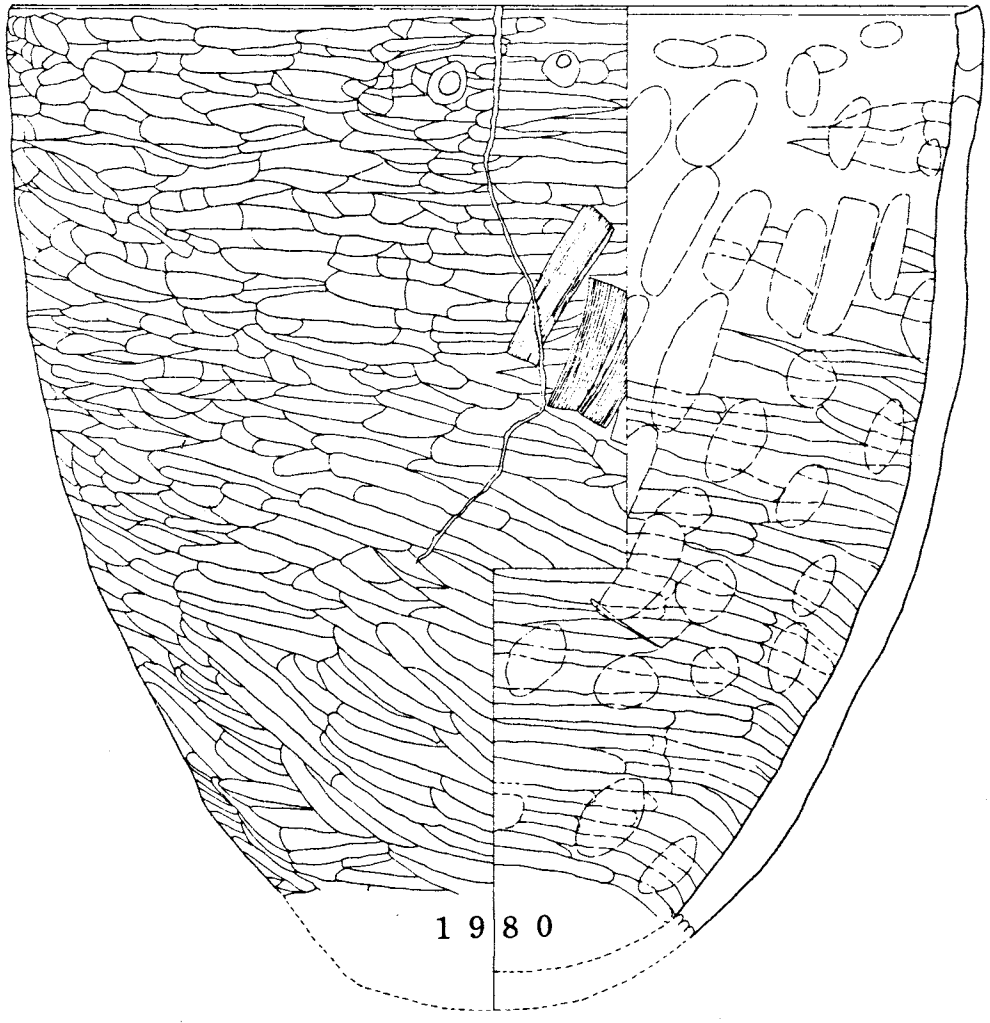
大分県二日市洞穴

発掘調査報告書



1980

別府大学付属博物館

はじめに

大分県玖珠郡九重町に所在する二日市洞穴の発掘調査は九重町教育委員会の要請を受け、別府大学考古学研究室が実施した調査である。このごろ数多く見受けられる緊急調査とは異なり、「玖珠川流域における縄文時代の研究」という問題意識に立って計画された。同時に、九重町地域住民の文化財、特に埋蔵文化財に対する関心、意識の高揚を目的として行なわれた。

この発掘調査の報告書も当然上の二つの目的により近づくことを意図して作成されたものである。すなわち、玖珠川流域の縄文時代研究の基礎的な資料として充分活用できることと、地域住民の郷土に対する一層の関心をよびおこす一つの機会になることを願っているのである。この具体的な方法としてできるだけ多くの資料を図・写真であらわすことにして、理解しやすいように努めた。

二日市洞穴の調査

発見と調査の経過

九重町松木に所在する洞穴で、地元の小学生が土器片を採集しているとの知らせを受けた別府大学考古学研究室では早速九重町教育委員会の嶋田裕雄社会教育課長（当時）と連絡をとり、昭和50年１月、賀川光夫・橘昌信の両名が現地踏査を実施したのである。教育委員会に収集されていた二日市洞穴の遺物を実見したところ縄文時代早期の押型文土器・無文土器、前期の隆帯文土器、石器類などの好資料が認められた。ただちに洞穴に向かい、立地および土層の堆積状況の観察に基づき、縄文時代の有望な洞穴遺跡であるとの判断を下し、教育委員会と発掘調査の必要性を協議したのである。その後も町と洞穴の保存と活用について数回にわたる協議を重ねた結果、教育委員会の要請を受けて別府大学考古学研究室で学術調査を実施することになった。

第１次調査

昭和50年３月22日より31日までの10日間実施した第１次調査は、まず、洞穴の測量を行ない、これに基づき２㎡を一つの調査単位とするグリッドを設定し、洞穴の奥部から開口部に向かって、すなわち西から東へ１・２・３～10、南北は北からＡ・Ｂ・Ｃ～Ｅと命名した。洞穴の中央部は３回におよぶ水道管埋設工事で「Ｖ」字状にかなり深くまで掘り起こされているため、この撹乱土の除去から開始した。

第１次調査では洞穴の開口部よりのグリッドに作業を集中して進めた結果、縄文時代早期を主体とする遺物包含層を確認することができ、特に早期の押型文土器の包含層は堆積が厚く、焼土・灰などがレンズ状に数多く認められ生活の痕跡を窺うのに充分であった。

第２次調査

50年の夏、７月28日より８月11日までの15日間、第２次調査が実施された。今回の調査は洞穴の中央部のグリッドを中心に進められ、その結果、第１次調査において開口部で確認されていた縄文時代早期の包含層が一段と良好な状態で存在することが明らかにされた。洞穴南側のＣ・Ｄグリッドでは土器・石器と共に大きな河原石による炉址と考えられる集石遺構が検出され、縄文時代早期・前期の生活面が把握された。一方、洞穴北側のＡ・Ｂグリッドではやはり早期・前期の埋葬人骨が発見され、洞穴北側が墓地として利用されていたことが明らかにされたのである。特に早期の埋葬人骨は小さな土坑墓に３身体が二次的な状況で埋葬されており、当時の葬制を考察する上での貴重な資料である。なお、人骨の調査では長崎大学医学部の協力を得た。

第３次調査

51年10月４日より18日までの15日間実施した第３次調査は、第２次調査に引き続き、洞穴中央部の下層への掘り下げが行なわれ、押型文土器の包含層の下に無文土器の文化層が厚く堆積していることが明確にされ、さらに下層により古い時期の文化層が予想された。

洞穴中央の南側調査区では縄文時代早期中頃の文化層が集石遺構を伴なって認められ、また、北側では早期の埋葬遺構が発見され、一つの土坑墓に４身体以上の遺骸が同時に埋葬されるとい

う特殊な状況が観察された。人骨の調査では前回と同様、長崎大学医学部の手を煩わせた。第3次調査では発掘調査と併行して、遺跡周辺の地形測量を実施した。

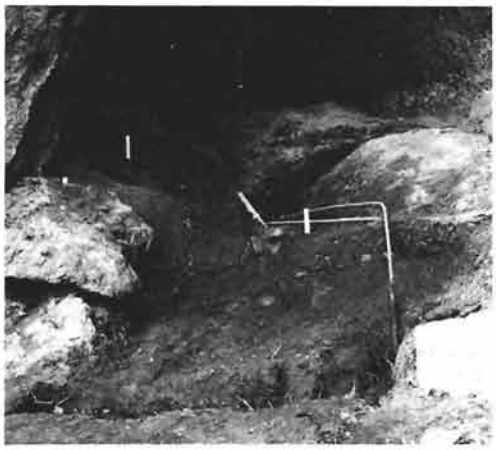
第4次調査

51年8月18日より9月6日までの20日間行なわれた。第4次調査は、別府大学考古学研究室のメンバーの他、前回と同様に九州大学の考古学研究室から2名の参加を得た。第3次調査に引き続き、洞穴南側の開口部および中央部の下層への掘り下げを中心に実施された。作業の進行状況が進んでいた開口部のグリッドで無文土器の文化層よりさらに下層に条痕文土器の良好な包含層が認められ、それらの土器と共に「有舌尖頭器」と考えられる石器が発見された。これによって二日市洞穴の最下層の文化層が縄文時代早期の初頭までさかのぼることがより明確にされたのである。一方、洞穴北側は早期中頃までの文化層まで確認でき、それより下は洞穴のバイラン土の堆積となり地山の岩盤へと続いている。

第5次調査

最終調査である第5次調査は53年8月18日より31日まで14日間実施された。調査の主体は第4次で確認された南側開口部よりの条痕文土器を主体とする文化層の洞穴中央部への拡がりと生活面の把握を目的に発掘を行なった。その結果、やはり良好な文化層が認められ、条痕文土器の他、石鏃・スクレイパーそれに4次調査で最大の関心事であった有舌尖頭器を発見することができた。さらに前回までの調査においても散発的に出土していたシカ・イノシシなどの獣骨が洞穴の南壁近くにおいて比較的まとまって出土し、当時の狩猟生活の一端が具体的な資料で示された。

開口部よりの調査区の一部を掘り下げたが、バイラン土の堆積が厚く、しかも壁よりで急激に傾斜しているため岩盤を確認するまでに到らなかった。また洞穴の奥部よりのグリッドは他の調査区で認められた最下層の文化層の確認は将来に残すことを余儀なくされた。



第1次調査開始時（昭和50．3）

第5次調査終了時（昭和53．8）

二日市洞穴の位置

図1　二日市洞穴の位置

筑後川の上流である玖珠川とその支流である松木川が合流する地点の東側約1kmに二日市洞穴が所在する。標高は海抜 363mである。

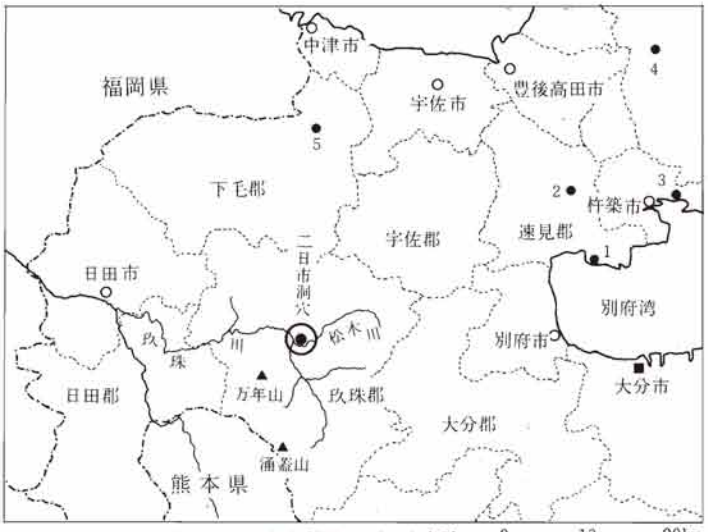


図2　大分県内の縄文時代早期の主要遺跡

1 早水台遺跡　2 川原田洞穴　3 稲荷山遺跡　4 成仏岩陰　5 枌洞穴

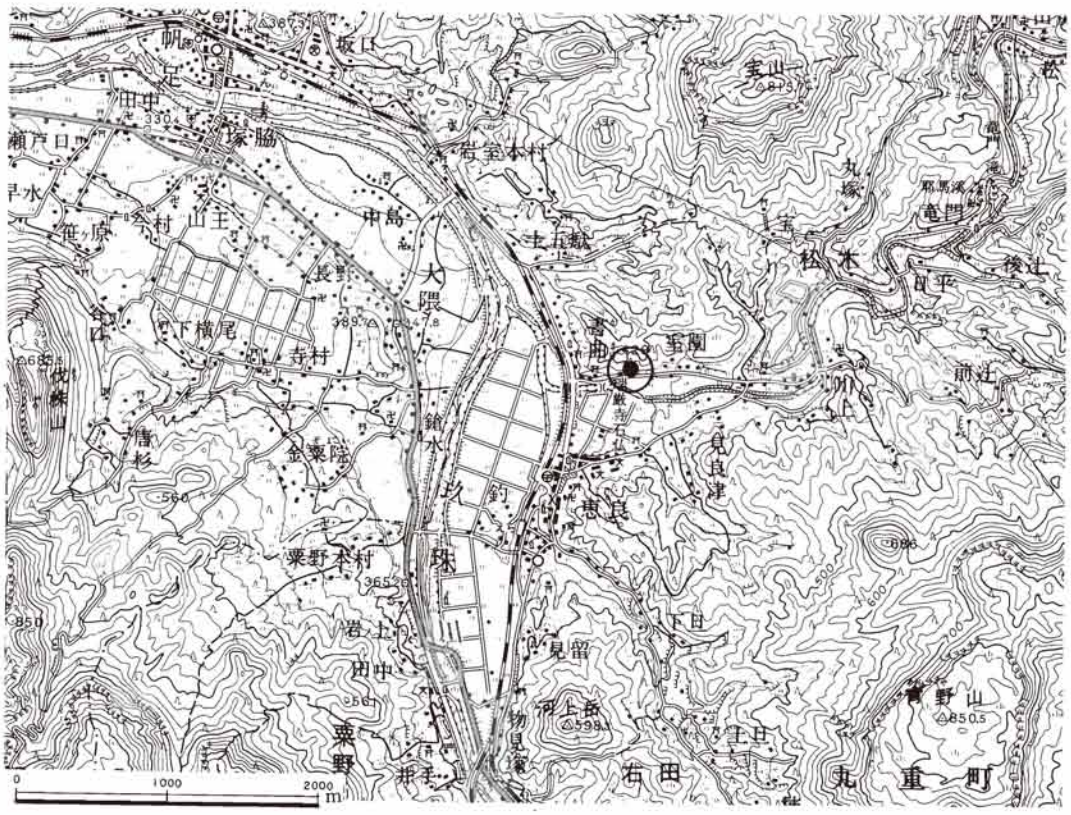
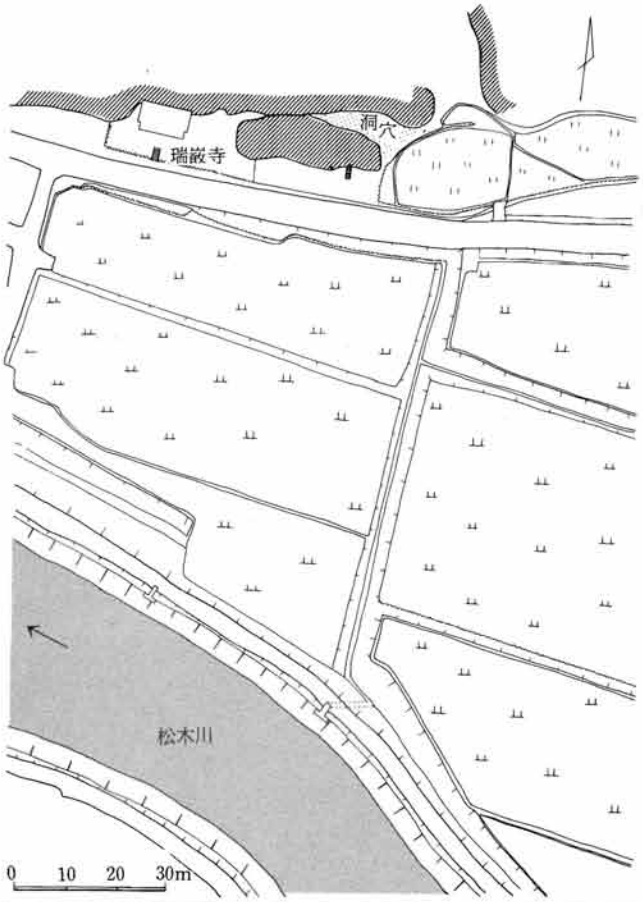


図3　洞穴周辺の地形　　⊙洞穴の位置

松木川の浸蝕によって形成された洞穴



二日市洞穴は耶馬溪溶結凝灰岩が松木川の侵蝕によって二つの巨岩に分離され形成されている。その時期については明らかでないが数万年前と推定される。

現在の松木川と洞穴までの直線距離は約 100mで、河床面との比高は9mを測ることができる。

洞穴で生活していた縄文人も、また野山に生息して動物にとっても、松木川の水は生きていく上での重要な役割を果たしていたものと考えられる。

洞穴の西側には県指定の文化財である瑞厳寺の磨崖仏が溶結凝灰岩に刻まれている。

図4　洞穴前面の地形

松木川より洞穴を望む

洞穴の形と調査個所

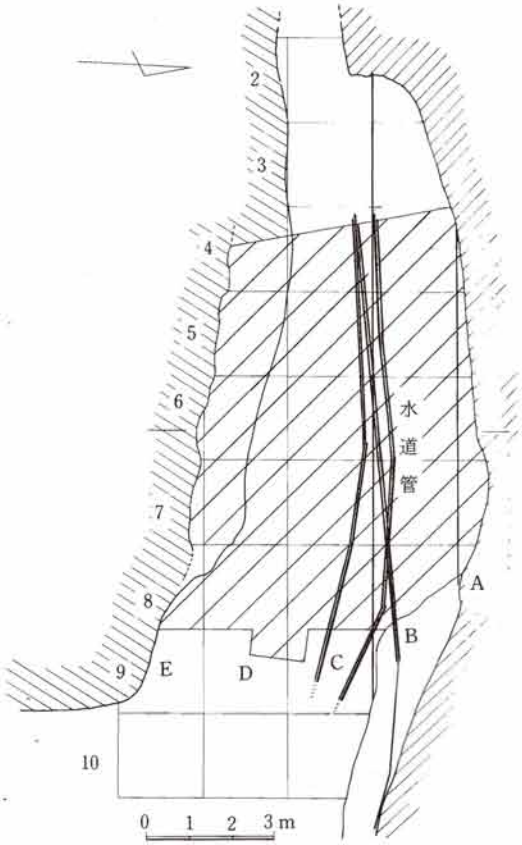


図5　洞穴の平面と調査個所（斜線）

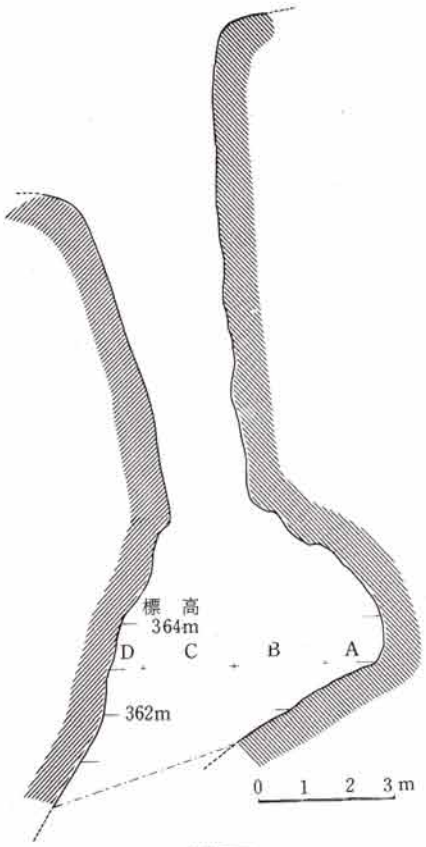
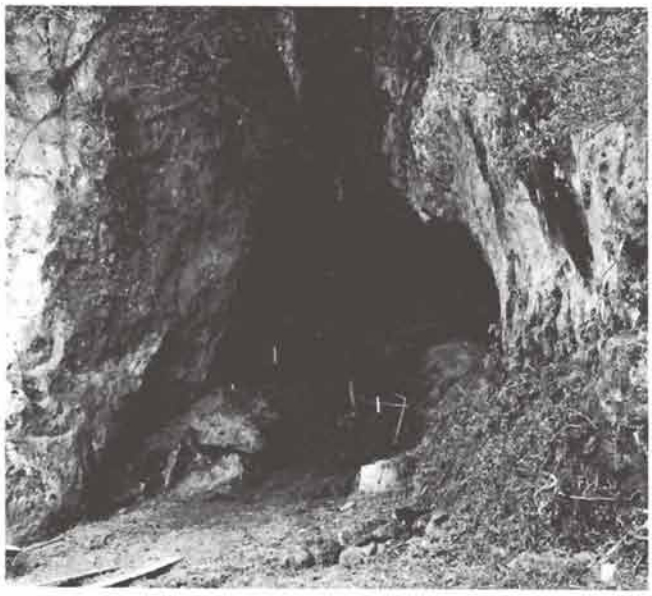


図6　洞穴中央の横断面



洞穴は東に向かって開口し、開口部の幅は約6m、現状の奥行きは約20mの細長い形状を呈している。北と南の二つの巨岩に挟まれているが、天井の一部は細長く吹き抜けになっており、同様に奥の方も巨岩どうしが接してなく厚い土の堆積がみられる。

洞穴を形成している南側の壁は、天井から地山までほぼ直線に傾斜しているのに対して、北側の壁は、下部で大きく湾曲し洞穴の空間を広げながら岩盤へと続いている。

土層の堆積

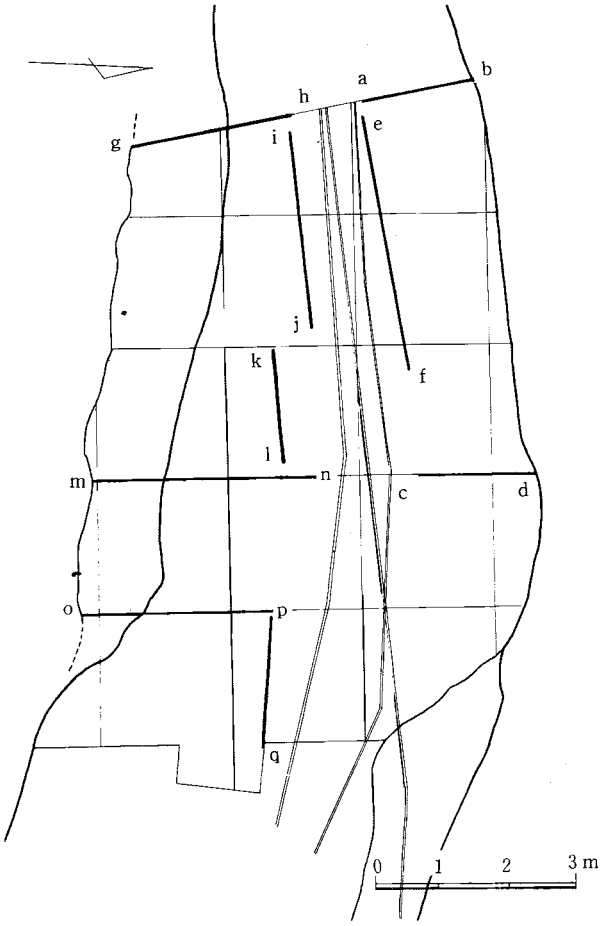


図7　土層断面の観察位置

天井で二つの巨岩が接してなく吹き抜けであるという事は当洞穴の土壌の推積と流出および遺構・遺物の遺存状態の上で大きな影響をおよぼしているものと考えられる。すなわち、土壌の推積・流出という状況が一般の洞穴に比較して大規模にしかも頻繁に行なわれたであろうが、結果的には堆積が勝り生活面（文化層）の上に落石や岩の風化した土壌などの無遺物の間層が堆積して遺物・遺構などの遺存状態を良好なものにしているのである。

それでいて、なおかつ洞穴の土層の堆積は開地遺跡のそれと異なり、全般的に複雑な様相を呈している。これは洞穴という限られた空間で生活が営まれているため、その時点その時点での不断の撹乱をはじめ、洞穴内でのある時期における生活が終結した以後も自然的な要因やあるいは次の居住者による平担な生活面の確保によって二次的な堆積が当然想定されるのである。

そのような洞穴の土層の堆積をより正確に把握し、文化層からさらに一歩進めて生活面の広がりを抽出すべく、調査グリッドごとに土層断面を設定した。洞穴中央部の水道管埋設工事の「V」字状の掘り込みや大きな落石その他の事情で必ずしもすべてが満足できる結果とはなり得なかったが、文化層の堆積と広がりを明確にすることができた。

当洞穴における全体的な土層の堆積状況は北側のA・Bグリットと南側のC・Dグリッドでは著しく異なっている。これは二日市洞穴を形成している北と南の二つの大きな巨岩のあり方によって規定されているのである。すなわち北壁が大きく湾曲しているため、土壌の厚い堆積が見られず、洞穴を形成している凝灰岩のバイラン土壌になりそのまま岩盤に達するのである。それに対して、南壁は地山に向って斜めに落ち込んでいるため厚い土層の堆積が認められるのである。結局、洞穴内の土層は北から南へ向って傾斜し、南壁近くが最も厚いことになり北側では第4文化層までを、一方の南側は第9文化層までの堆積を認めることができる。

洞穴内の土層堆積状況

土層の断面

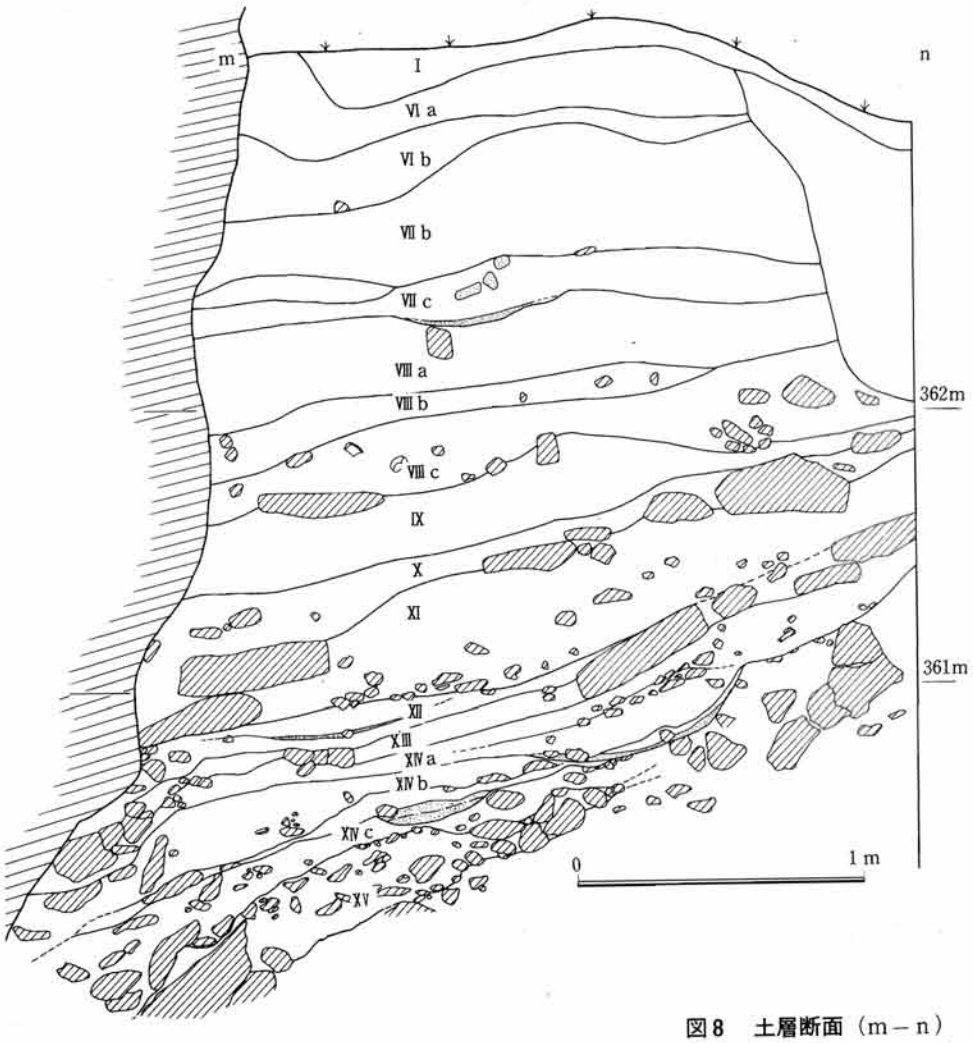
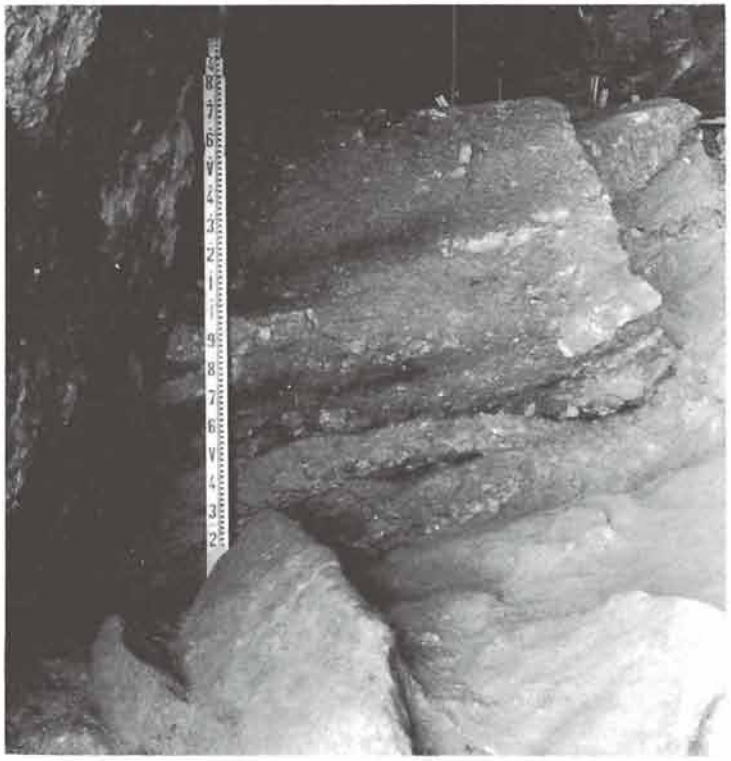


図8　土層断面（m－n）

水道管の埋設によって洞穴内のすべての断面が観察される個所は残念ながら認められなかったが、当洞穴の主体をなす土層断面は南側C・D調査区のm－nにおいて把握できたのでこれを基本層序とする。

Ⅰ～Ⅳ層…茶褐色砂質土層。大部分は後世の撹乱を受けている
Ⅴ層…灰と焼土を含む黄褐色～赤褐色土層
Ⅵa層…灰褐色砂質土層
Ⅵb層…黄褐色砂質土層
Ⅶa層…赤褐色砂質土層
Ⅶb層…暗褐色砂質土層
Ⅶc層…明褐色～黄褐色砂質土層
Ⅷa層…暗褐色砂質土層
Ⅷb層…黒褐色砂質土層
Ⅷc層…暗褐色砂質土層
Ⅸ層…暗灰白色の粒子の粗い砂質土層
Ⅹ層…黒褐色～暗褐色砂質土層
Ⅺ層…灰白色砂質土層で落石を多く含む
Ⅻ層…褐色土層
XIII層…灰白色砂質土層で落石を多く含む
XIV層…黒褐色～褐色砂質土層。色調の濃淡によってXIVa・b・cと区別が可能である
XV層…灰白色砂質土層。大小の礫を含む

これらの自然層のうち、大別するとⅤ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅹ・Ⅻ・XIVの各層を中心に、遺物・遺構の出土が認められる。



m－n断面

表土層（Ⅰ層）の直下から縄文時代早期の遺物包含層となる。

Ⅸ層まではほぼ水平な堆積が認められるが、それ以下の層においては南へ次第に傾斜を増している。

Ⅻ層以下の土層の堆積は南壁よりにほとんど集中しており、当洞穴における初期の利用が南壁近くにあったことが、この土層断面に示されている。

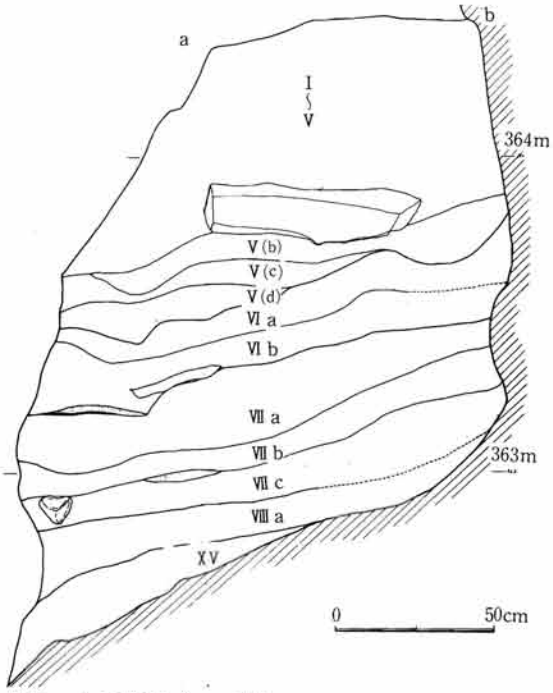


図9　土層断面（a－b）

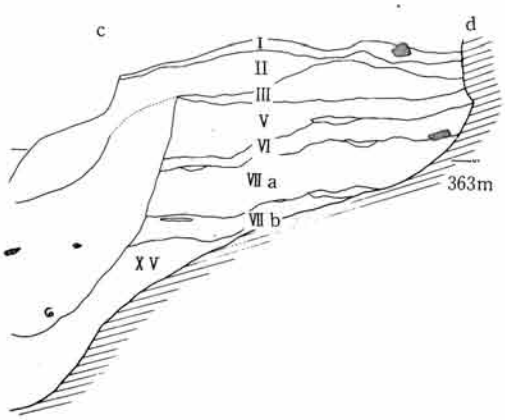


図10　土層断面（c－d）

a－b断面

B－4グリッド西壁の断面。本調査での最も奥部にあたる断面である。表面近くの大部分は数10年前に撹乱をうけ、さらにその後の短期間による堆積の土層である。南側は水道管理設工事による掘り方がみられる。

c－d断面

A・B－7グリッド西壁の断面。開口部よりの土層断面で、奥壁よりの土層に比較して、土層の堆積は発達してなく、Ⅶc層・Ⅷa層が認められない。AB調査区の南側において岩盤が急激に落ち込んでいることが南北の断面で明瞭である。

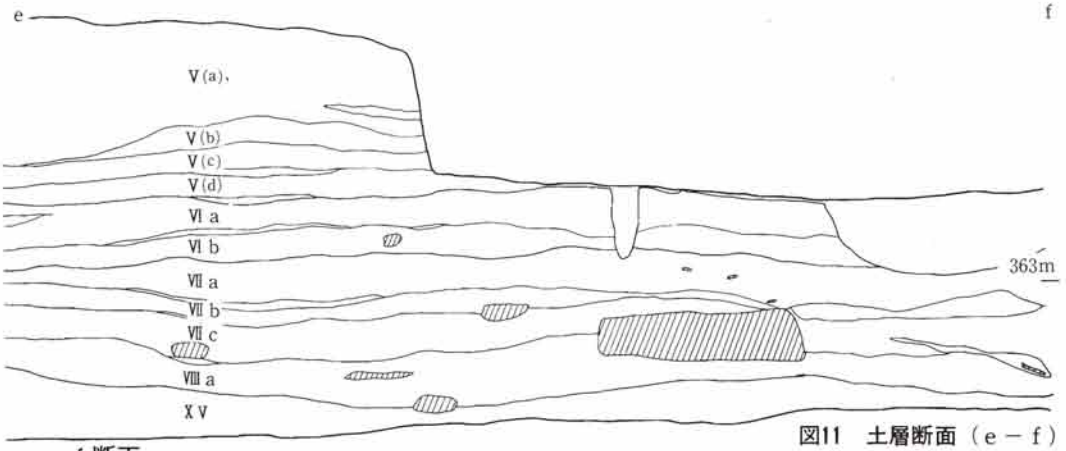


図11　土層断面（e－f）

e－f断面

B－4・5・6の東西の断面であるが、遺構および水道管埋設による掘り込みのため完全な土層断面となっていない。

I～V a層とした土層は古銭などが出土し新しい時期の堆積と判断されるものの、二次堆積の土層中から発見される縄文時代後期の土器片などは本来この層のどこかに存在したものと推測される。

V層（b～d）はA・B調査区で確認できた前期の遺物包含層で、第2文化層として把握した。焼土・灰のレンズ状の堆積が見られ、縄文時代前期の生活面が示唆されている。

VI a・VI b層は早期末の遺物包含層であり、洞穴の南側のC・D調査区の土層断面にも見ることができる。開口部よりでは薄い堆積となっている。

VII a・VII b層も焼土・灰などのレンズ状の堆積を含む安定した土層が広がっている。第4文化層として把握した縄文時代早期中葉～後葉にかけての遺物、ならびに埋葬遺構が発見されている。

VII c層は洞穴の西側において薄く堆積している。

XV層のパイラン土壌の上に堆積しているVIII a層の出土遺物は少ない。

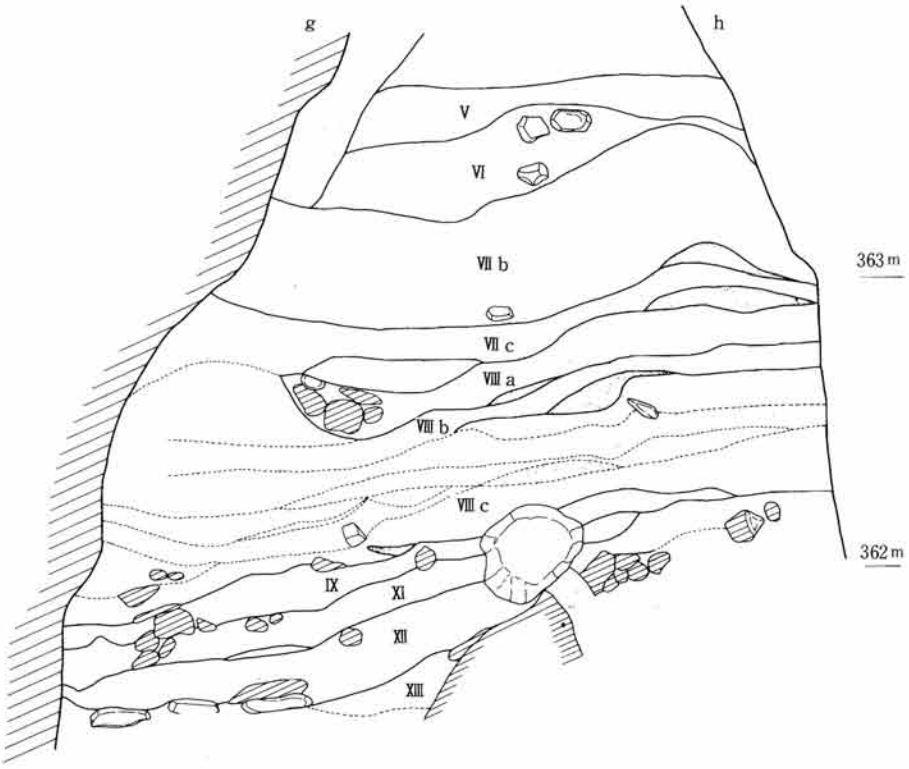


図12　土層断面（g－h）

C・D－4グリッド西側の土層断面。a－b断面と同様、本調査での最も奥部である。第V層よりXIII層の一部まで確認したが、以下は未調査のため不明。焼土・灰のレンズ状の堆積が認られるものの、南壁よりでの土層区分は困難をきわめる。

o－p断面

C・D－8グリッドの西壁。本調査での最も開口部に近い土層断面である。洞穴の開口部に接するグリッドおよびその断面にあたるため、上部の土層は後世の利用によって削平を受けており、ごく最近の堆積土を除くとすぐにⅧa層となる。

当洞穴の最下層の文化層であるⅩⅣ層以下を局部的に掘り下げたが、洞穴を形成している凝灰岩のバイラン土壌と落石が2mほど続き、ⅩⅤ(f)層で水が湧き出した。下層になるにつれ、北から南へと堆積の傾斜は強くなる。

なお、o－pの断面に認められる遺物包含層は開口部よりの東側では落石によってほとんど認めることはできなかった。

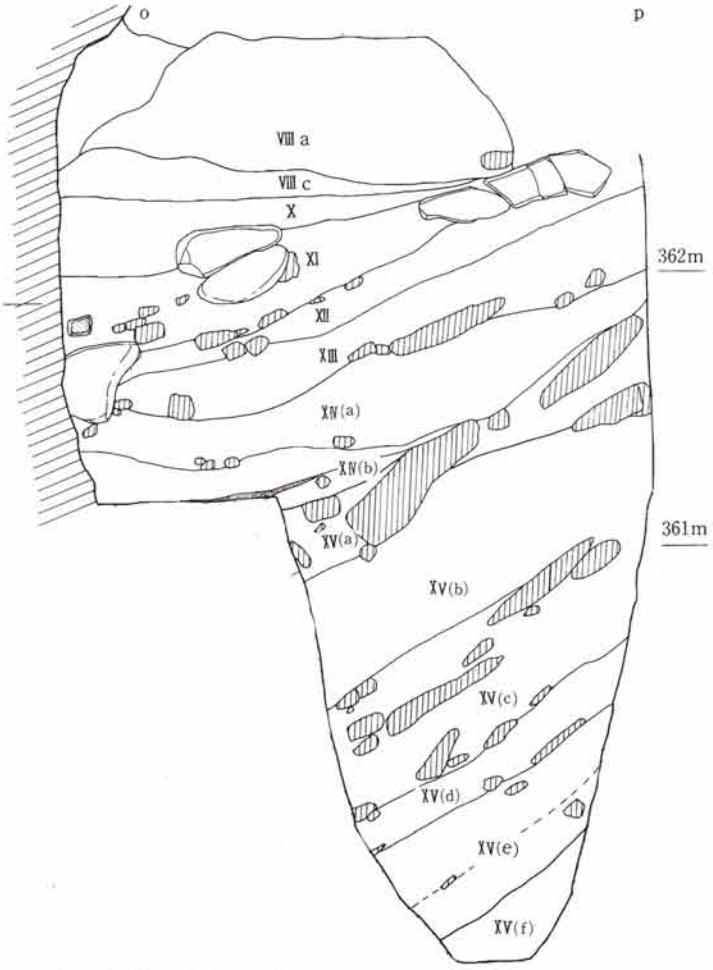


図13　土層断面（o－p）

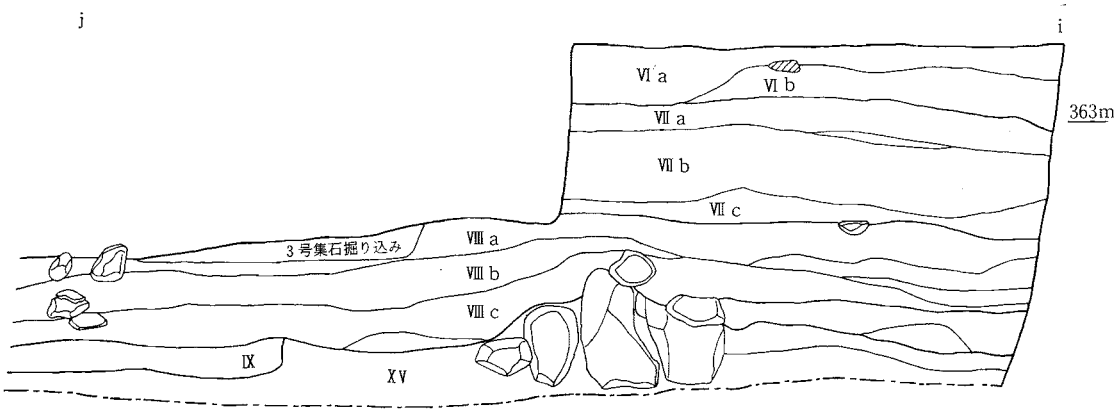


図14　土層断面（ｉ－ｊ）

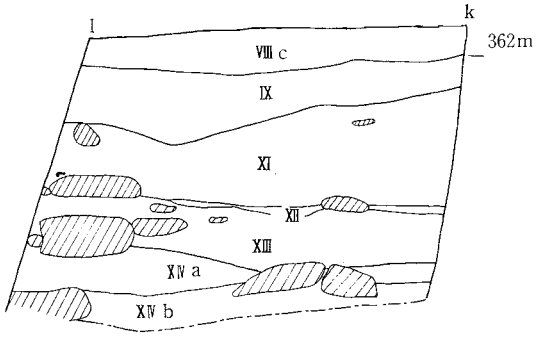


図15　土層断面（ｋ－ｌ）

ｉ－ｊ断面およびｋ－ｌ断面

ｃ－４～６グリッドの東西、すなわち奥から開口部へ向かう土層の一部である。洞穴のほぼ中央に位置しているが、洞穴北側を形成する巨岩の基盤がコンケーブして南側に張り出しているため土壌の堆積は比較的薄い。そのためｉ－ｊ断面でみられる様にⅨ層の下にはバイラン土壌のⅩⅤ層なり、そのまま基盤へと続いている。

文化層と自然層序との対比

第１文化層…本調査において明確な文化層は把握できなかったが、本来はⅡ～Ⅳ層に存在したものと考えられる。

第２文化層…Ａ・Ｂ調査区においては土層の色調、焼土および灰層によって細分されるが、基本的にはⅤ層としてとらえられる。

第３文化層…Ⅵａ層とⅥｂ層と自然層序を二つに区分したその中間に遺物の集中がみられる。

第４文化層…Ⅶ層がこれにあたり、遺物および遺構の出土状況からⅦａ・Ⅶｂ層に第４文化層（上）、Ⅶｃ層に第４文化層（下）と二つに分離することができる。

第５文化層…自然層序のⅧａ層。

第６文化層…Ⅷｂ・Ⅷｃ層からⅨ層上面までの厚い堆積で把握される。

第７文化層…Ⅹ層がその主体を占めるが、間層とされるⅨ層下面およびⅪ層の上面が含まれる。

第８文化層…Ⅻ層がこれに相当し、一部Ⅺ層と落石の多いⅩⅢ層の上面までおよんでいる。

第９文化層…ⅩⅣ層が中心的な土層であるが、間層であるⅩⅢ層の下面も含まれる。なおⅩⅣ層はグリッドによってはａ・ｂ・ｃと区分されうる。

集石遺構と埋葬遺構の場所

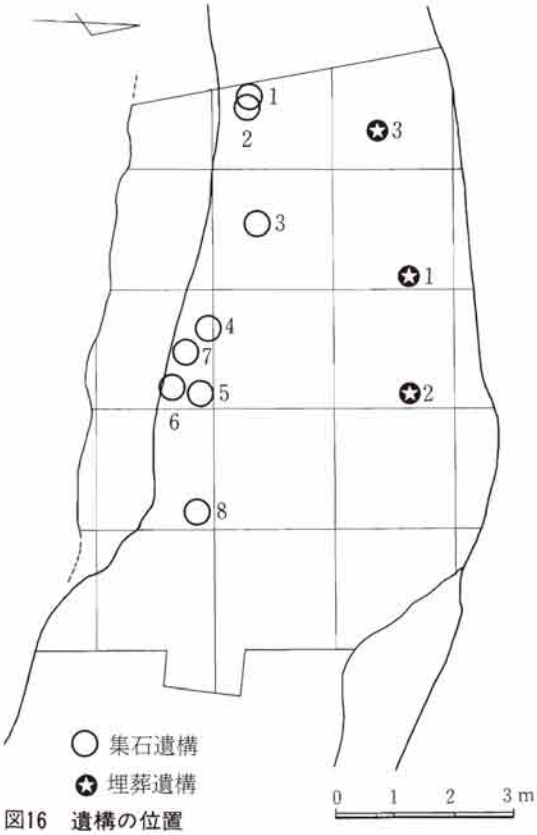
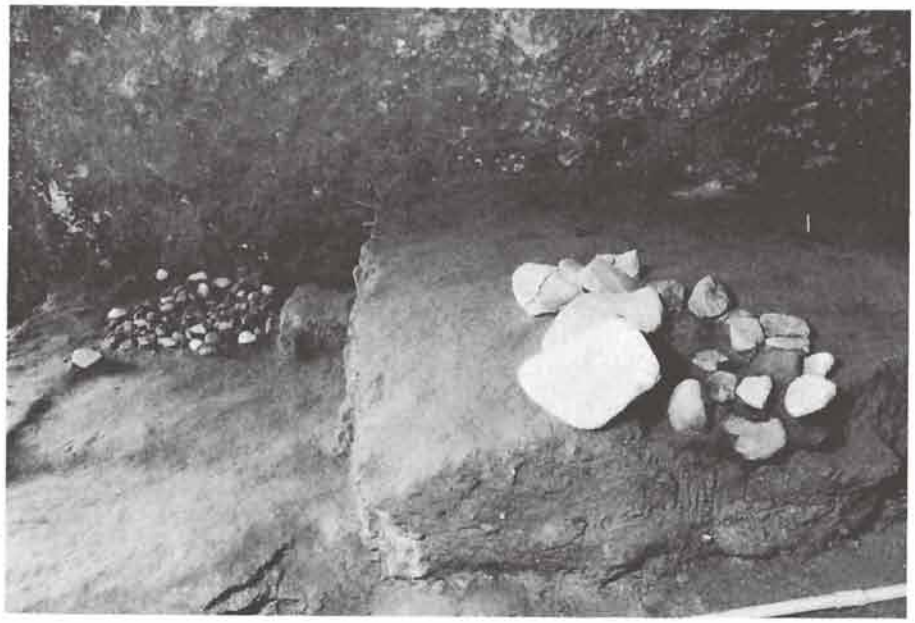


図16　遺構の位置

洞穴南側のC・D調査区において8基の集石遺構が発見された。7号集石遺構についてはその性格が明確でないが、残り7基は炉址と判断される。炉址と考えられる集石遺構が洞穴の中央から奥部にかけて存在することは、当洞穴の天井および奥壁が開口していることによるものであろう。なお、集石遺構の1・2号は第2文化層、4・5号は第3文化層、3・6号は第4文化層(上)、7・8号は第5文化層の所産である。

一方、洞穴北側のA・B調査区では3基の埋葬遺構が認められ、1は第2文化層、2・3号は第4文化層（上）にあたる。

縄文時代の前期および早期の後半の時期では洞穴内の南側と北側とがそれぞれ生活の場と墓地とに使い分けられていたことが推測される。



集石遺構
右…3号
左…7号

文化層別の出土遺物

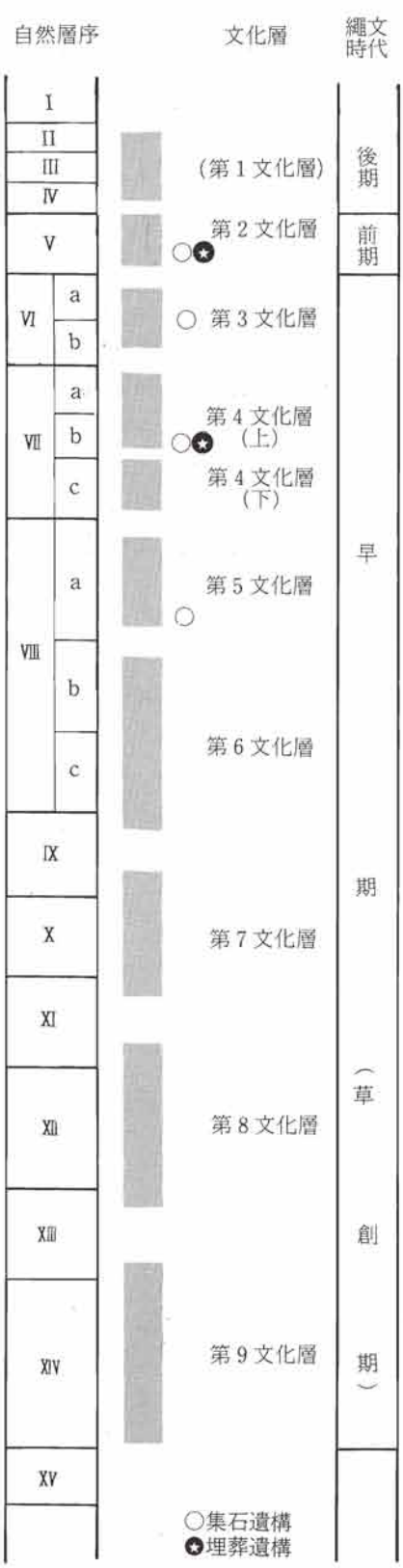


図17　自然層序と文化層の関係

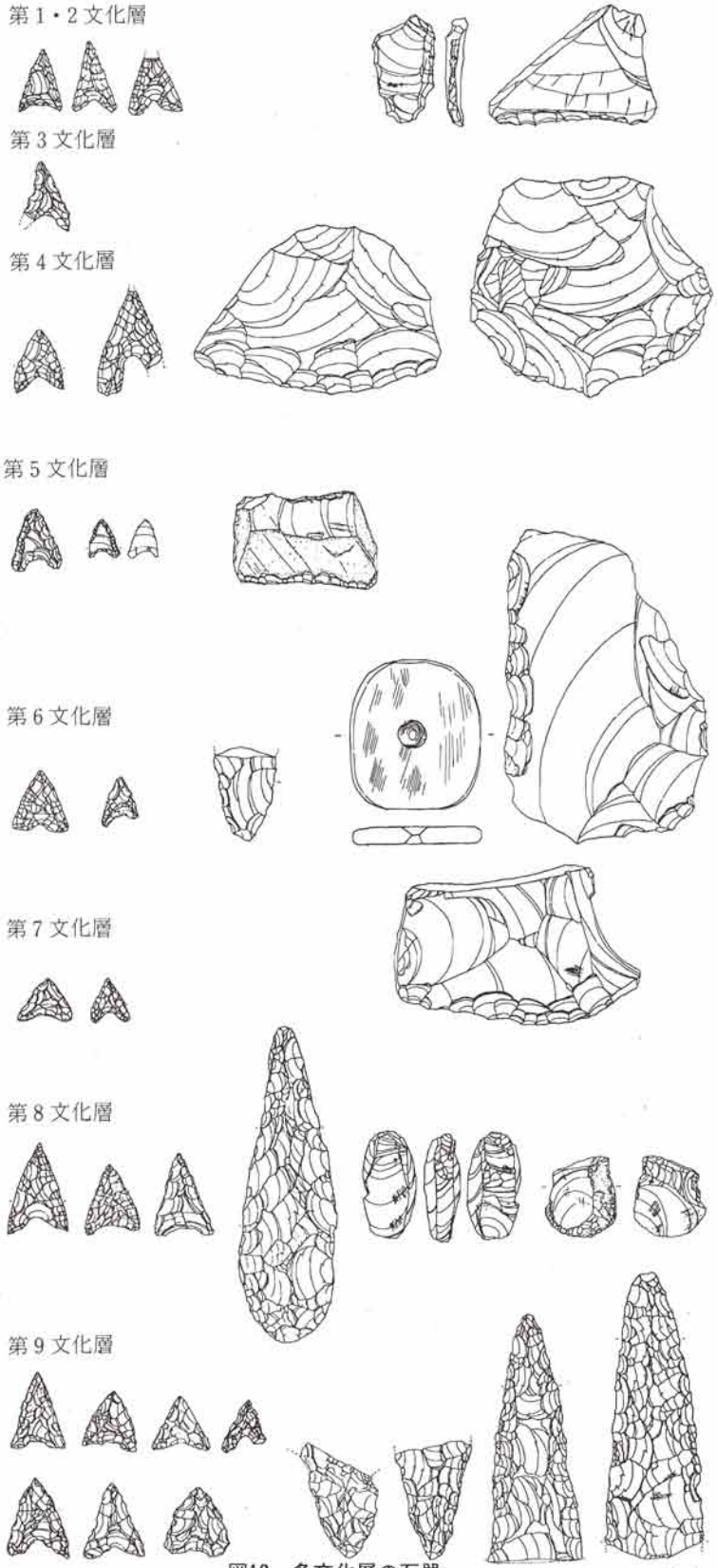


図18　各文化層の石器

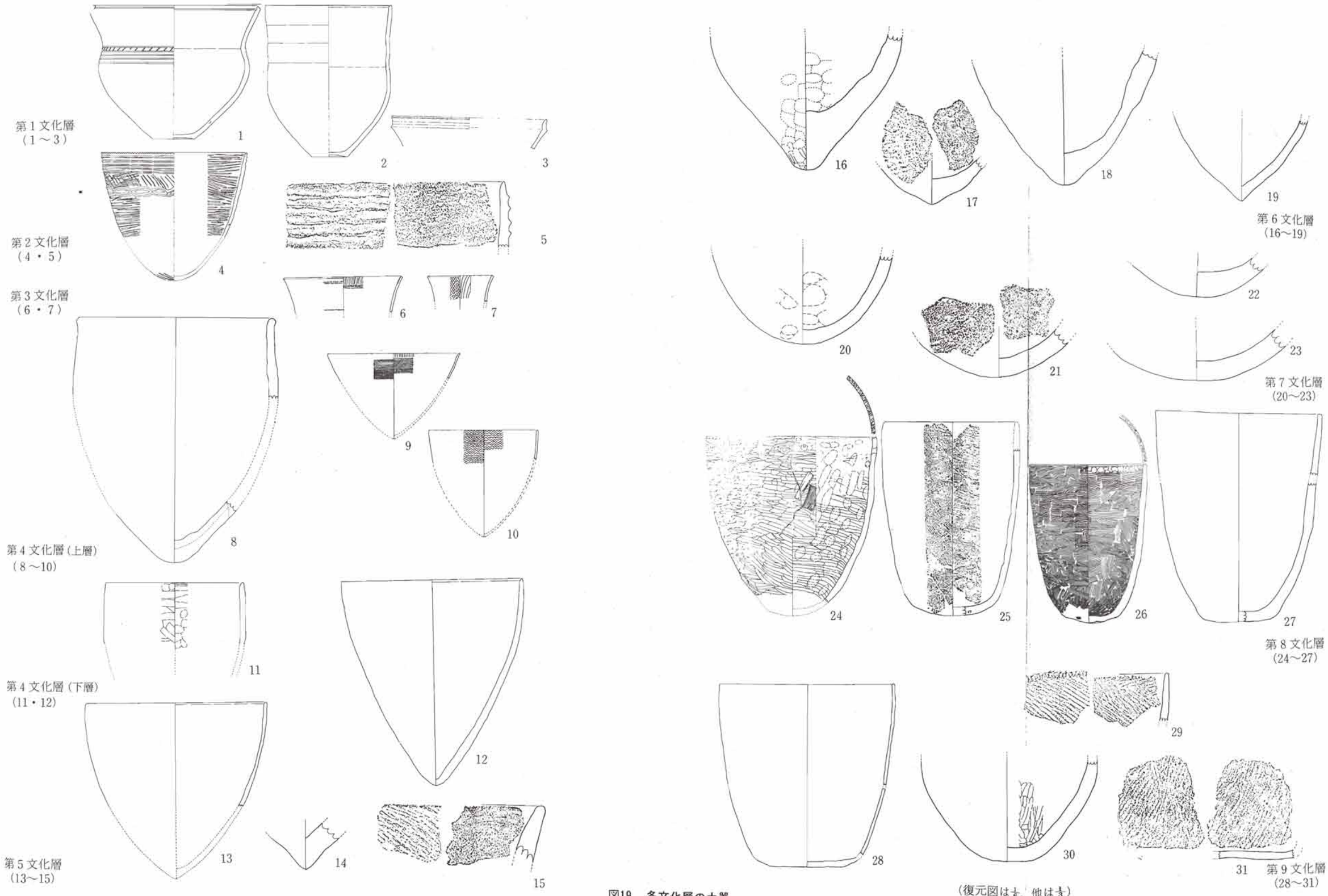


図19　各文化層の土器

（復元図は$\frac{1}{8}$、他は$\frac{1}{3}$）

第1文化層

遺　物

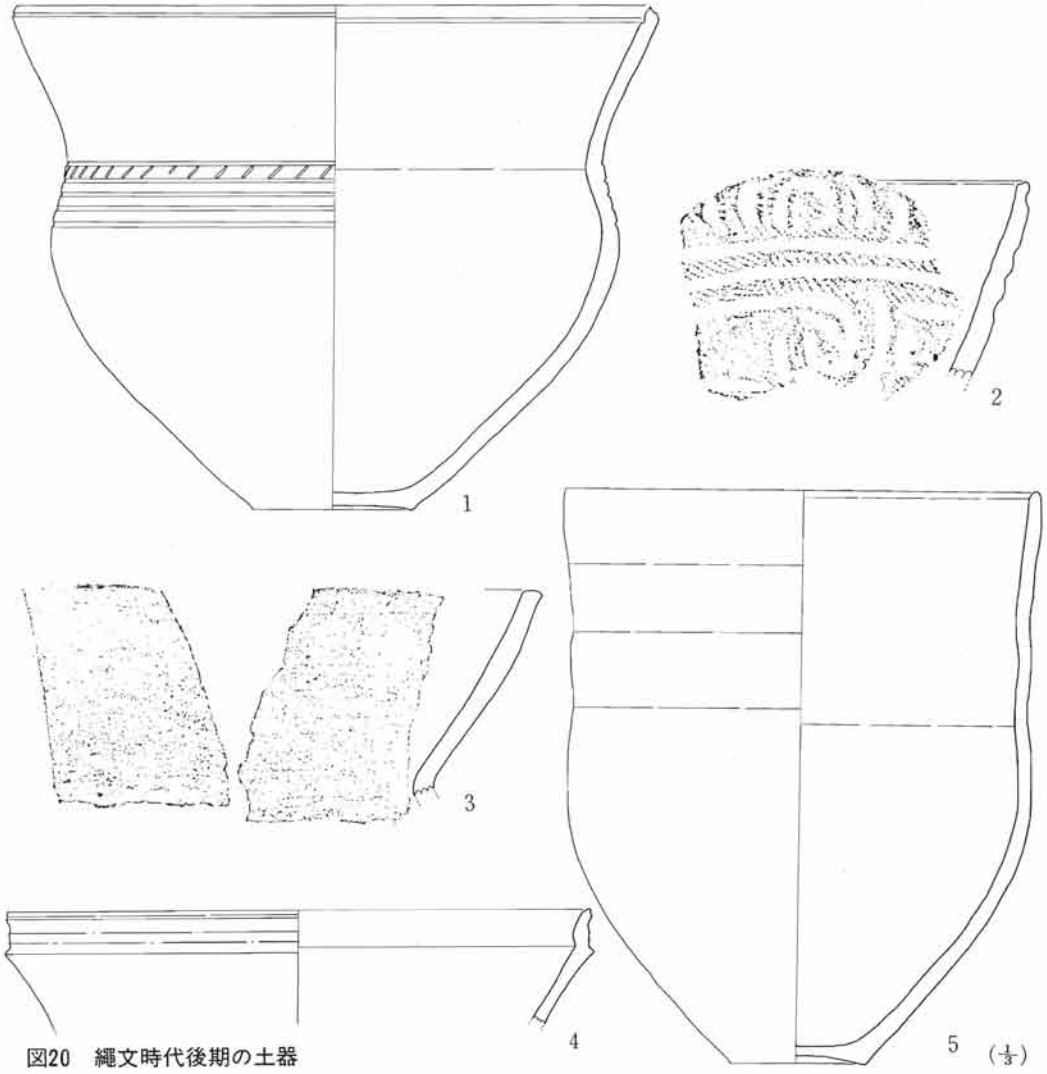
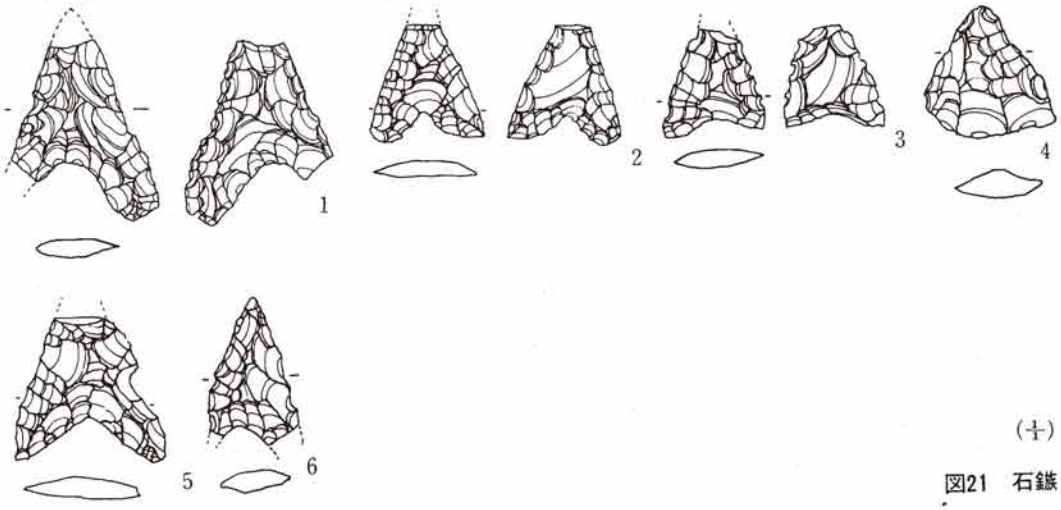


図20　縄文時代後期の土器

本調査において明確な形で第1文化層を把握することができなかったが、調査前の採集および二次堆積の土層から縄文時代後期中葉から後半にかけての遺物がわずかであるが発見されている。

1・5は採集資料であり、1は頸部に沈線と沈線間に刻みが施されている半精製の鉢形土器。5は粗製の単純な形態をした鉢形土器で文様は全く施されていない。4は黒色磨研の浅鉢形土器。以上の3点は縄文時代の後期後葉の時期が想定される。

2は磨消縄文を有する鉢形土器の口縁部で、いわゆる「小池原式」に対比される。3は条痕文の口縁部で、2とセットをなすものと考えられる。縄文時代の後期中葉に位置づけられるであろう。



(1/1)

図21　石鏃

1～6石鏃

自然層序II～IV層から6点の石鏃が発見されているが、大部分が二次堆積のため第1文化層の所産とするには問題が残る。

1・2・3・5は姫島産の黒曜石製。4・6は安山岩質の石材が用いられている。

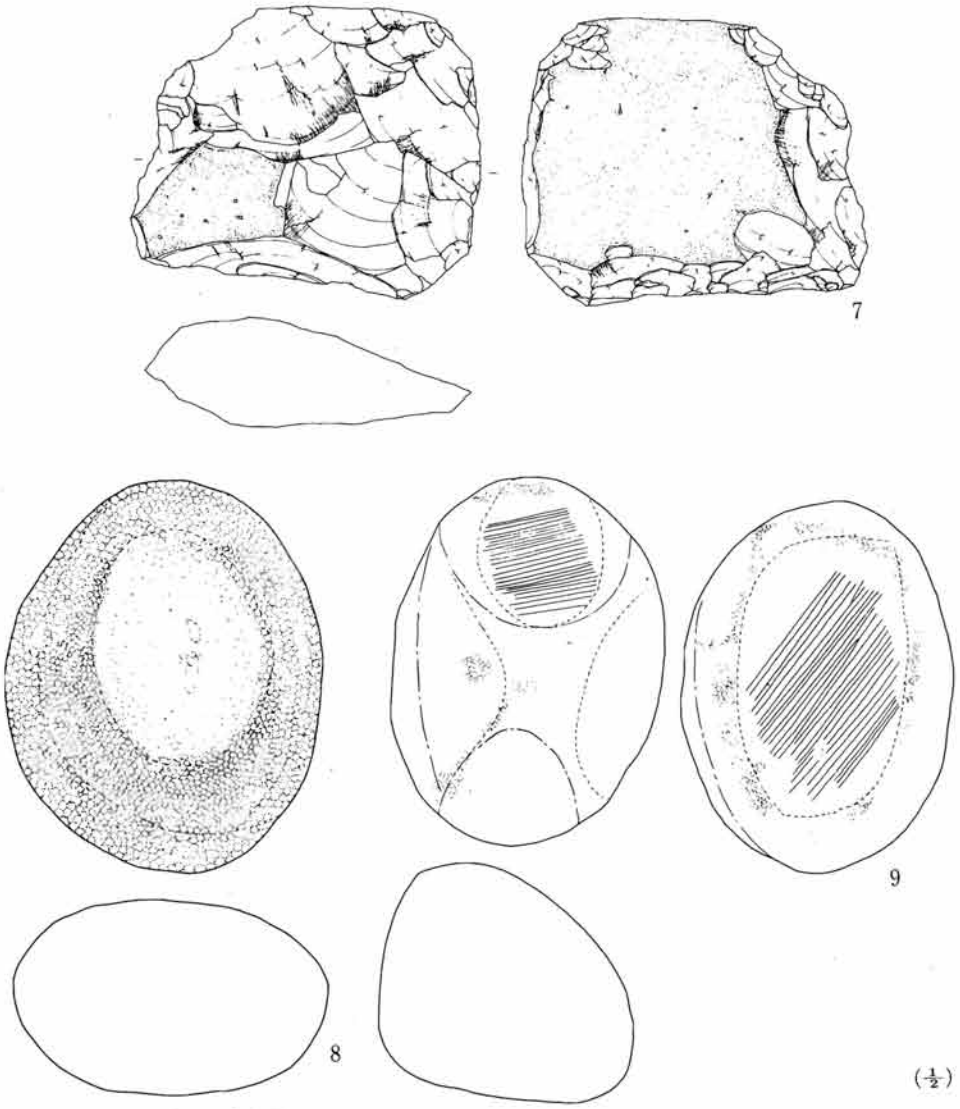


図22　スクレィパー・磨り石

7　スクレィパー。安山岩質の石材を用いた大形のもので、打製石斧とも判断できる。

8・9　磨り石。片面の大部分ともう一方の面に磨痕が認められる。また局部的に打痕も観察できる。

第2文化層

遺　構

図23　遺構の位置と文化層の広がり

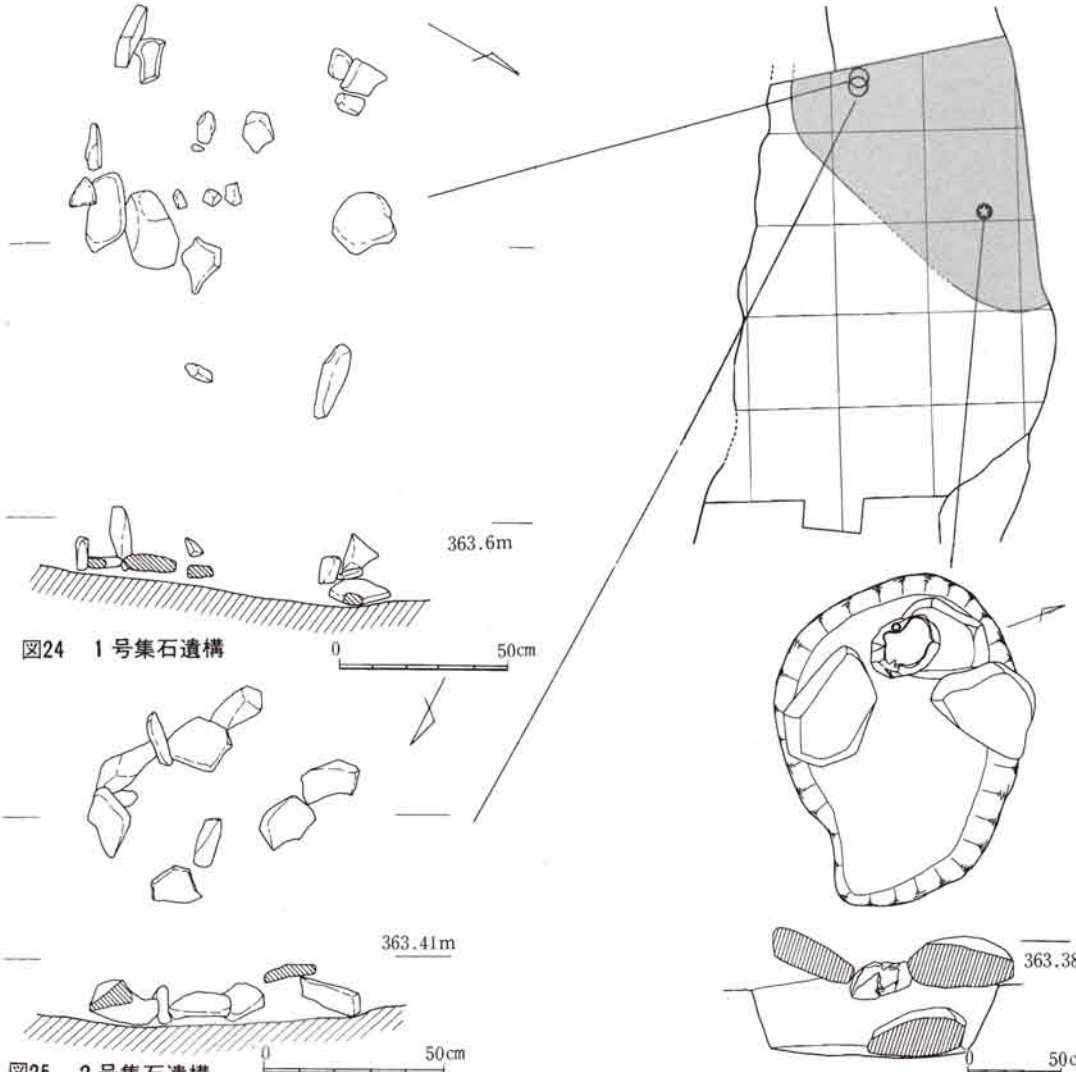


図24　1号集石遺構

図25　2号集石遺構

図26　1号埋葬遺構

集石遺構

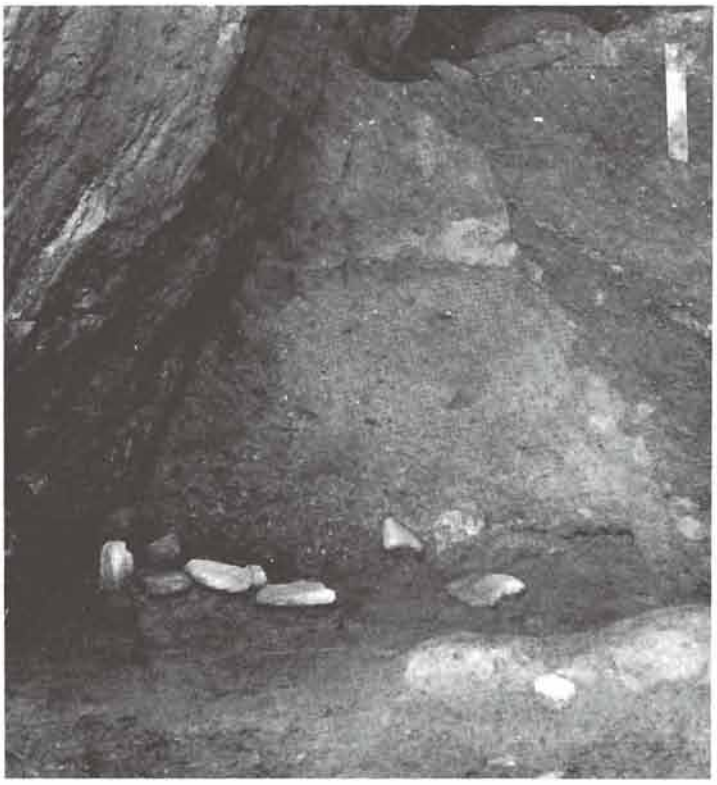
C－4グリッドで近接して1号・2号集石遺構が発見された。他の集石遺構に比較して小さな扁平な礫を使用したものであり、1号は礫が散在しており、二次的な状況が窺える。2号集石は1号よりレベル的に下位にあたる。ほぼ長方形を呈するが短辺の両側の礫はみられない。両者とも礫の周辺の掘り込みや焼土・灰などは検出されなかった。

埋葬遺構

B－5グリッドの東側において1号埋葬遺構が発見されている。60×90cmのほぼ楕円形をした土坑内から頭蓋骨のみが出土し、頭蓋骨の左右および土坑墓内の下面に、30cm前後の扁平な礫が認められる。

V層中に土坑墓の掘り方がみられ、第2文化層の時期の埋葬である。

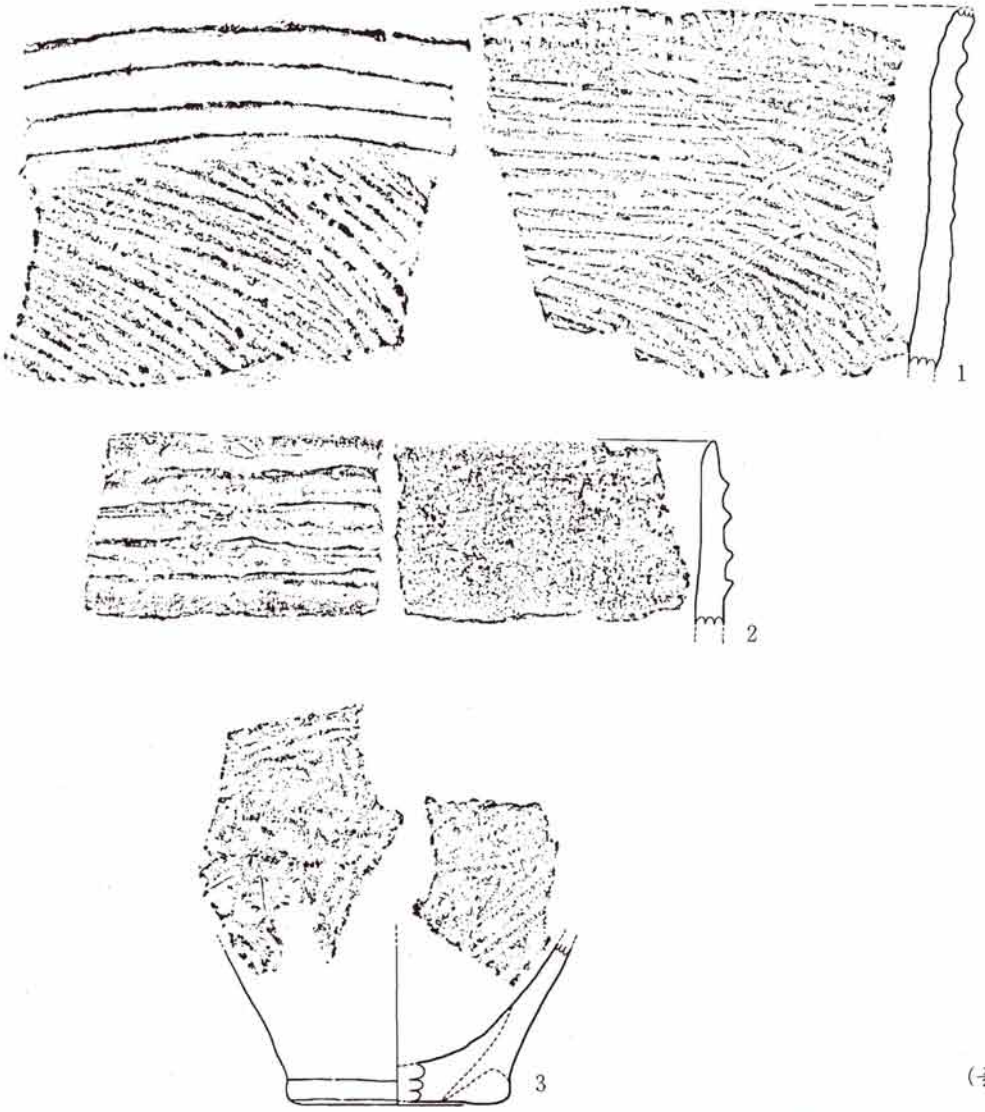
1 号埋葬遺構
(縄文時代前期)



1 号集石遺構
(縄文時代前期)

遺　物

第２文化層



(1/2)

図27　縄文時代前期の土器

1　表裏に貝殻によると考えられる粗い条痕を全面に施し、口縁部の表面に断面三角形の凸帯を４条巡らしている。

2　口縁部に凸帯を施す点は１と同様であるが、地文の条痕がみられない点で異なる。

3　表裏に粗い条痕を有する土器の底部。

いずれも従来「轟Ｂ式土器」と呼称されているもので、縄文時代前期中頃が想定される。

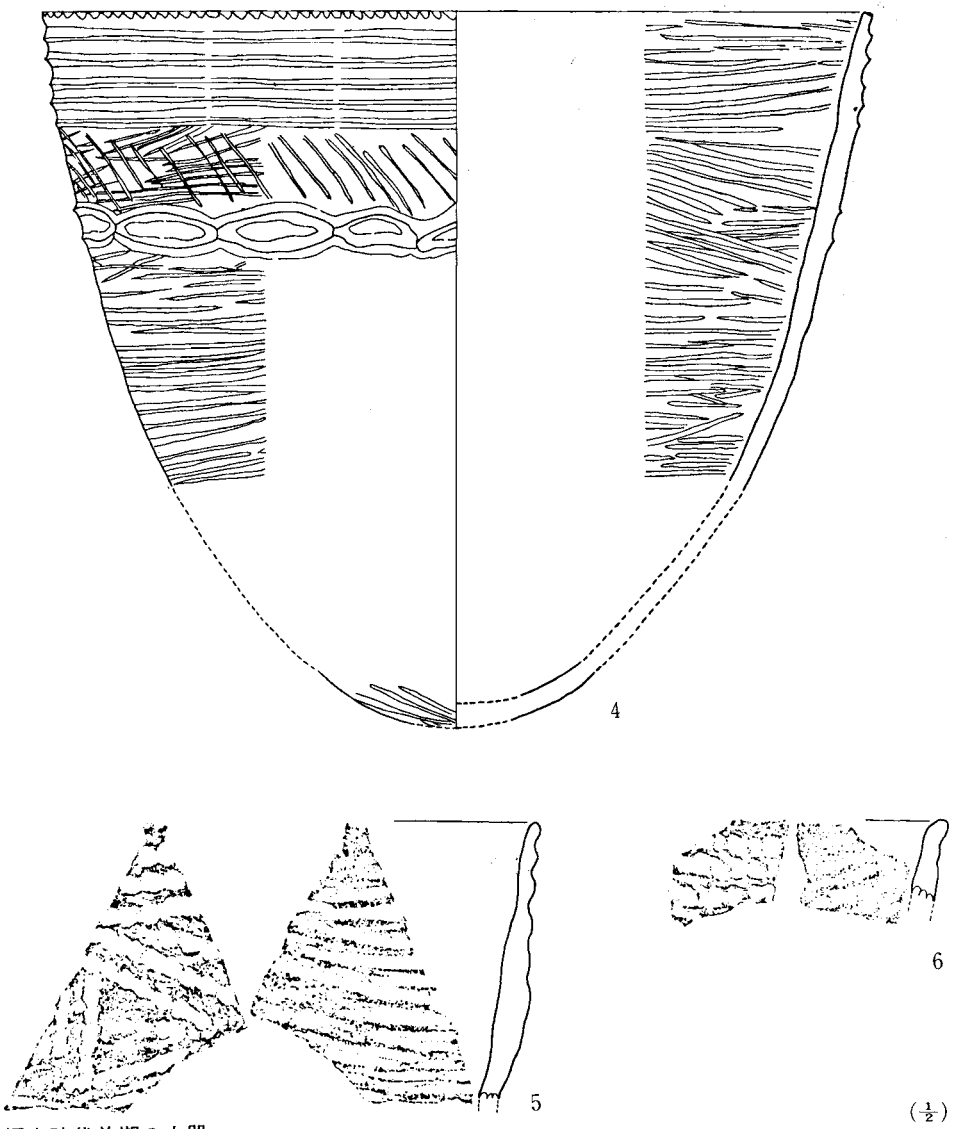


図28　縄文時代前期の土器

4　大形の深鉢形土器で、口唇部に刻み目を有し、その直下に断面三角形の凸帯を５本巡らしており、さらに同様な凸帯を胴部にやや不規則であるが波状に２条貼りつけている。横方向の粗い条痕が地文として表裏につけられている。全体の器形は口縁部がやや外反し、胴部に膨みをもたないで丸底の底部へと移行するものと推定できる。縄文時代前期の「轟Ｂ式土器」に含まれるものであろう。

５・６　いずれも口縁部の破片で、表面にはほぼ方形をした押引文が連続的に並んでいる。裏面には粗い条痕が地文として施されている。破片が小さいため全体の形は知り得ない。

第２文化層の土器はＡ・Ｂ調査区において顕著であり、Ｃ・Ｄ調査区ではほとんど出土していない。

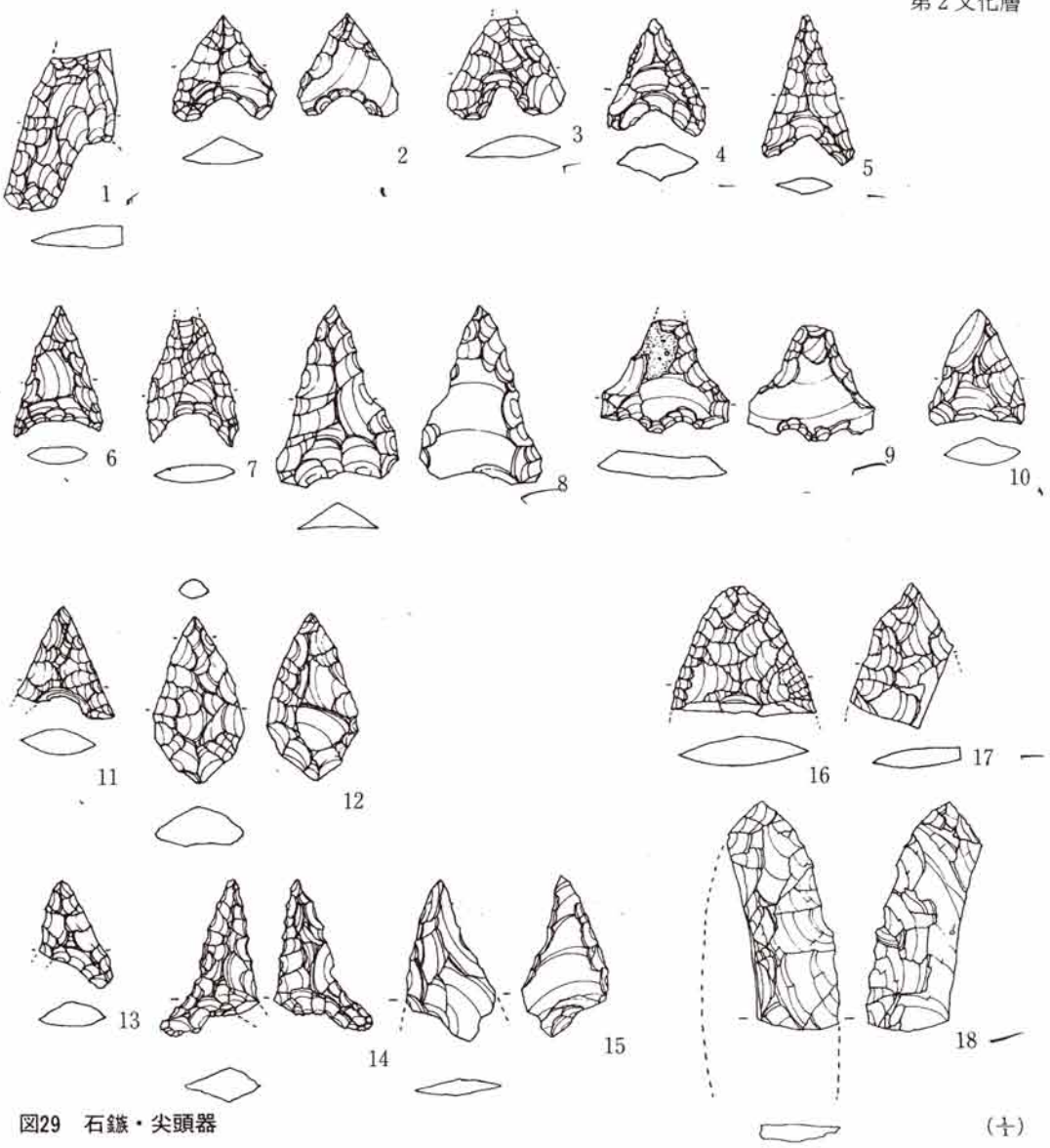


図29　石鏃・尖頭器　　(1/1)

１～15　石鏃。第２文化層から破片も含めて27点の石鏃が出土している。基部の抉りが深くて脚部が明瞭な１～５の様な一群と、基部の抉りが幅広く尖った脚部をもつ６・７で代表されるものとが顕著な存在である。この他、基部がほぼ直線的な８・10、それに12の様に基部が凸状になるものも見られる。16・17・18はいずれも先端部の破片であるが、普通の石鏃に比較して大形であり、尖頭器の一種として区別されうる資料とも思える。

１・17は黒色をした黒曜石製。３～５・８・18は乳白色をした姫島産の黒曜石製。９はチャート質の石材であり、残りはすべて安山岩質の石材が使用されている。

完全な形の石鏃の重さについては、２は0.51ｇ、５は0.39ｇ、６は0.40ｇを量ることができる。

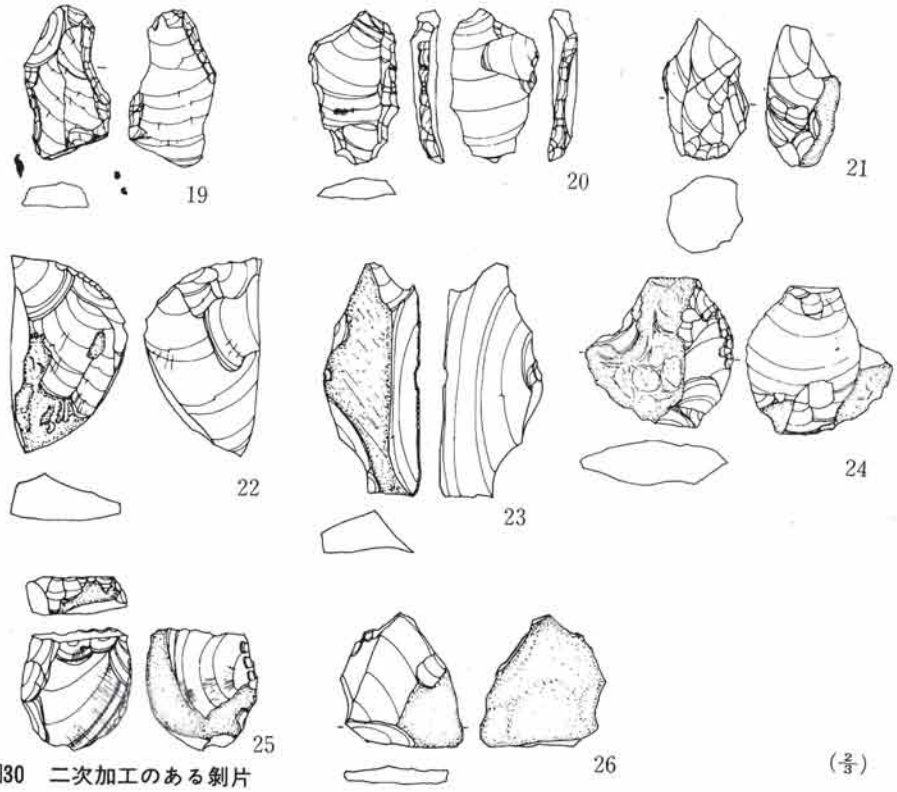


図30　二次加工のある剝片

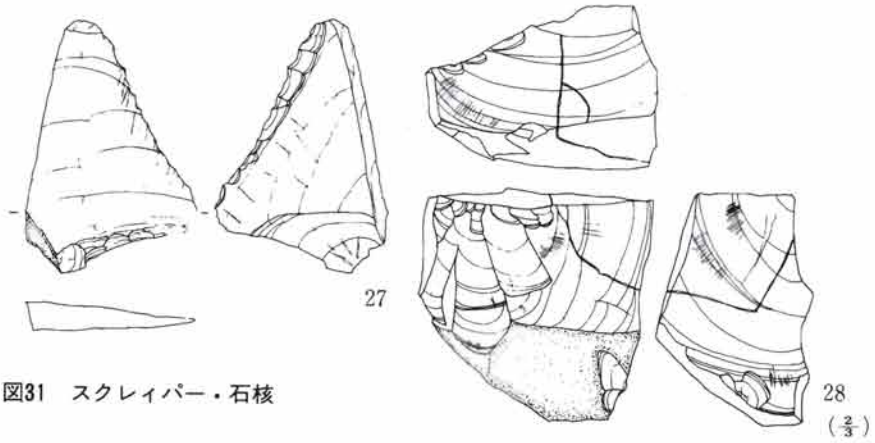


図31　スクレィパー・石核

19・20　側辺に沿ってブランティング（刃潰し）加工を思わせる剝離がみられる。

22・24　不定形な剝片の一部に小さな二次加工が施されている。

27　ほぼ三角形を呈する二辺に沿って二次加工の剝離がみられるスクレイパーである。

28　剝片石器の素材となる剝片を採取した石核。

29　礫の一端に粗い加工を施して刃部を形成している礫器である。

19・23・24・28は硅質岩、20～22は黒色の黒曜石、25・26は頁岩質、27・29は安山岩質

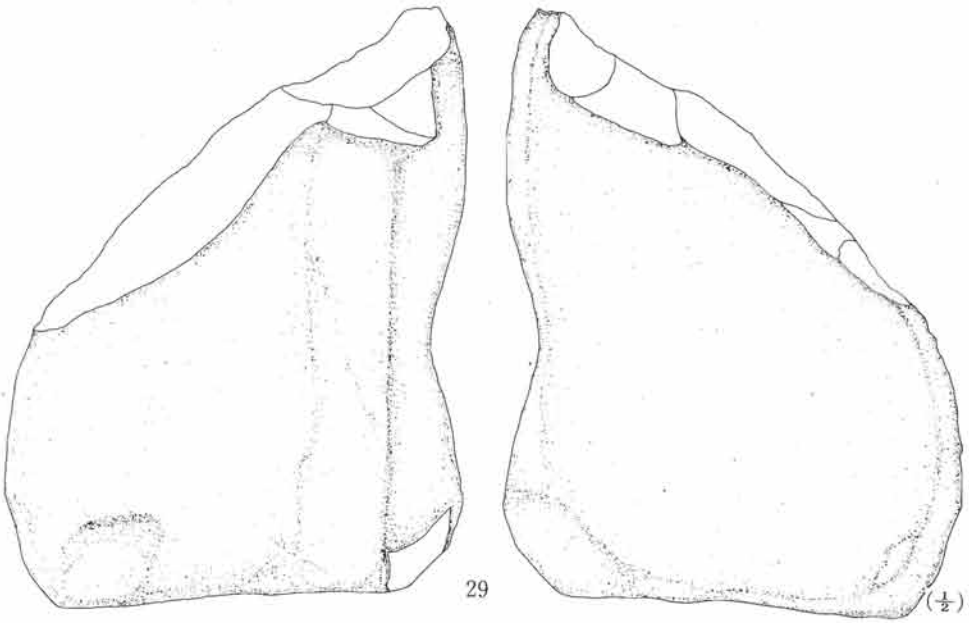
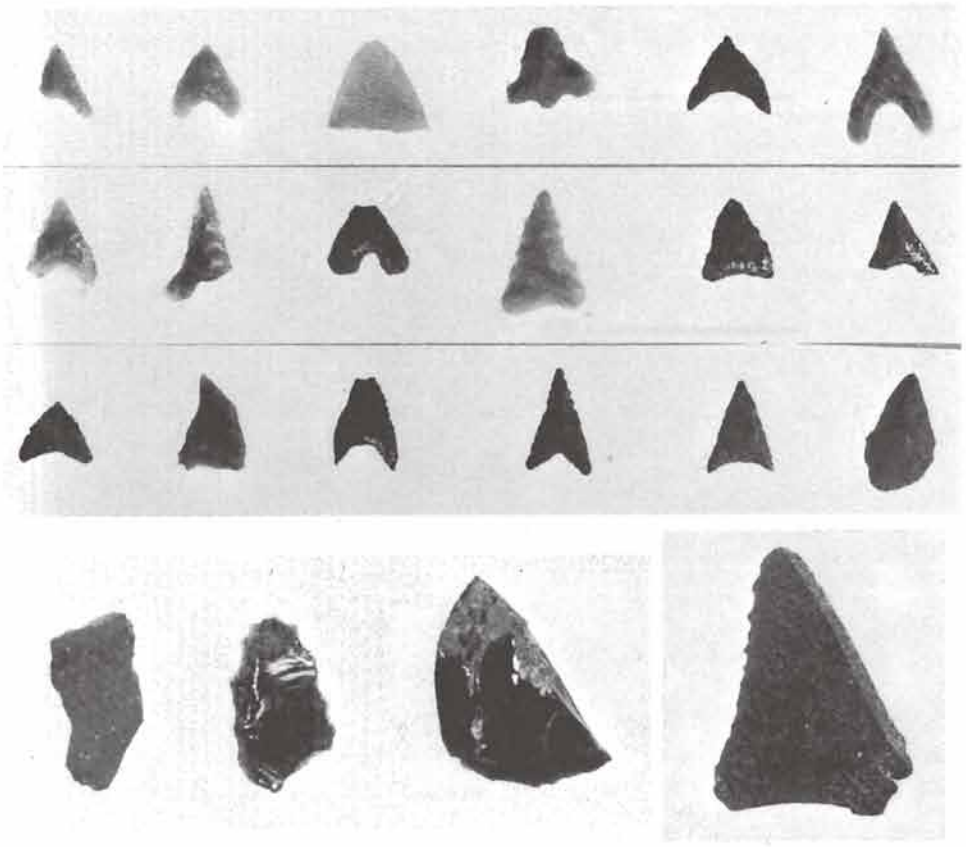


図32　礫　器



第3文化層

遺　構（集石遺構）

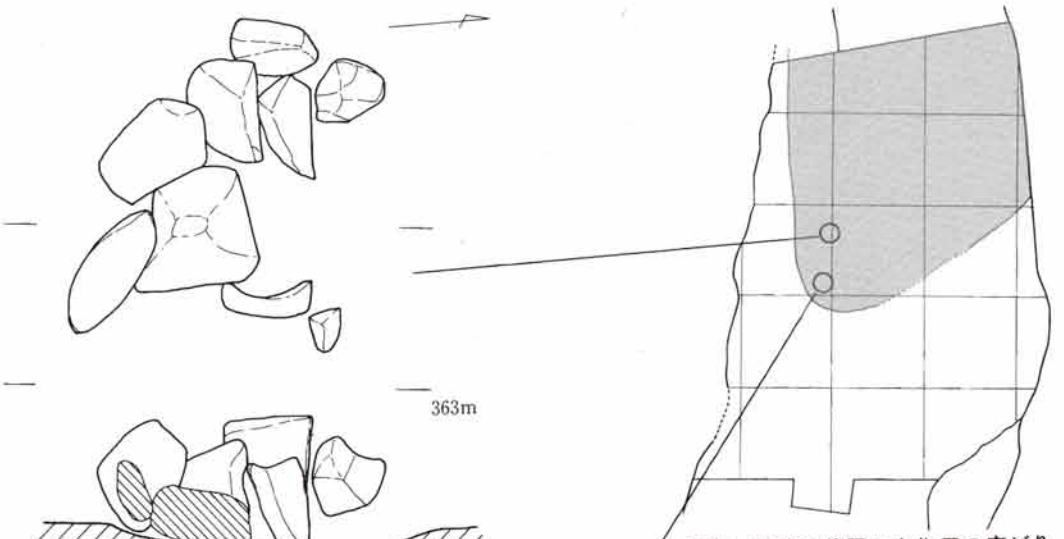


図33　遺構の位置と文化層の広がり

図34　第4号集石遺構

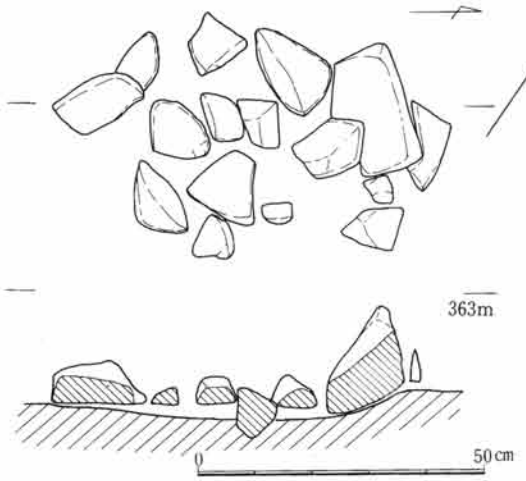


図35　5号集石遺構

洞穴のほぼ中央部に文化層の広がりを見ることができるが、遺物はB－4・5グリッド、C・D－4グリッドと洞穴の奥壁よりに集中する傾向が窮がえる。出土遺物は全体的に少なく、この時期の洞穴利用は顕著でなかったように思える。

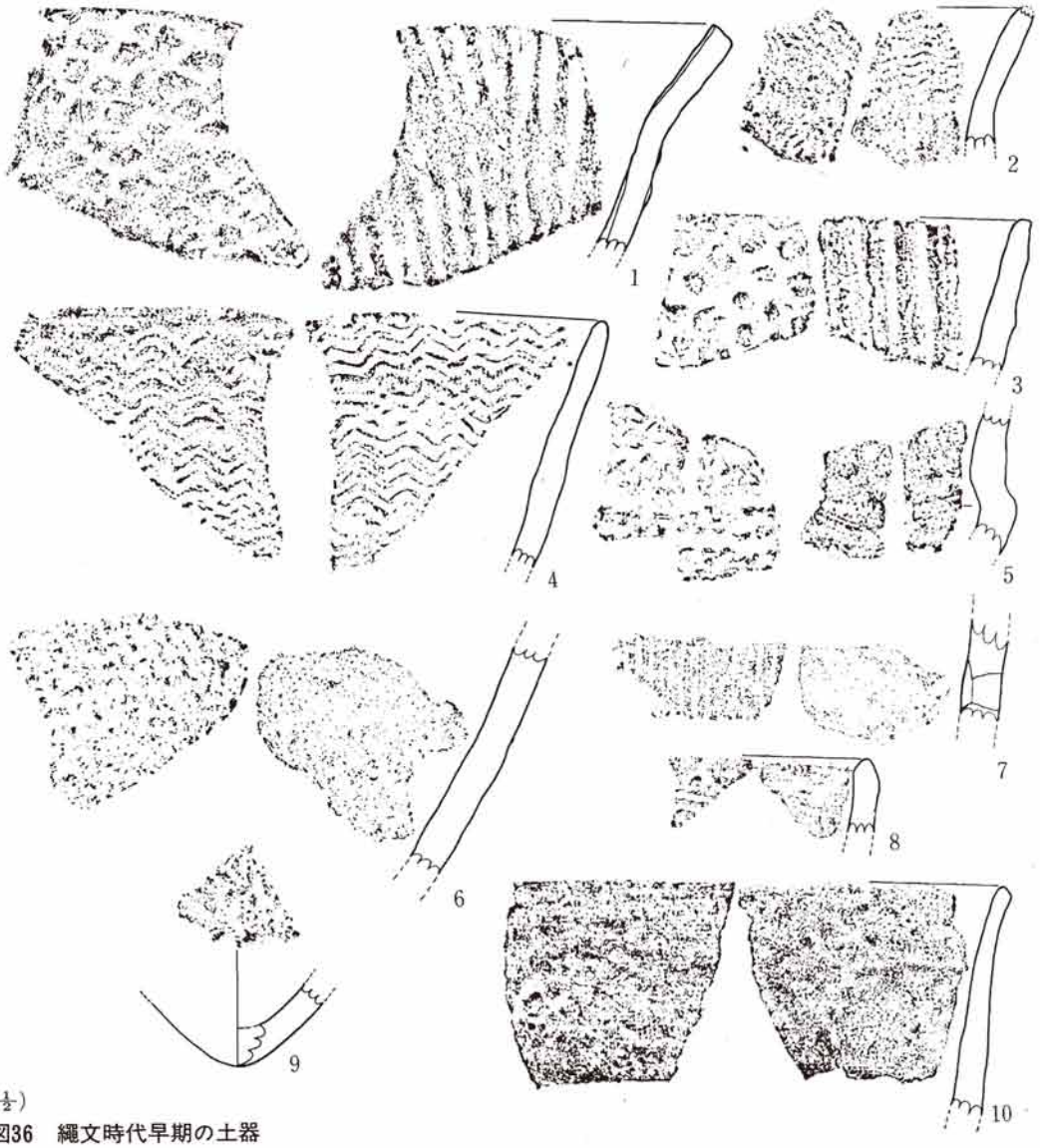
D－6グリッドの北壁よりに2基の集石が認められる4号は15～20cm大の河原礫を北へ開いたコの字状に組んでいる。5号はやや雑然としているが、礫の周辺に炭火物が検出され炉址と判断した。礫の回りに掘り込みのピットは確認できなかった。

出土土器は押形文土器とそれに伴う多量の無文土器によって代表されるが、撚糸文も出土している。押型文土器から考えると縄文時代早期末葉に相当する時期が設定される。

石器もやはり少なく、石鏃6点の他は不定形な二次加工のある剥片や使用痕のある剥片が僅かに出土しているだけである。

4 号集石遺構（縄文時代　早期）

5 号集石遺構（縄文時代　早期）



(½)
図36　縄文時代早期の土器

1　口縁部が著しく外反する押型文土器で外面に粗大な楕円文を有し、内面に太い条痕文が施されている。

3　1と同様な施文法がみられるが、口縁部はあまり外反していない。

2・4　内外面に山形文を施している。

5　胴部で「く」の字状に屈曲する特徴的な形態を有する押型文土器である。

9　尖底の押型文土器で、不明瞭だが底部の中心まで押型文が施文される。

6　底に近い部分の破片で尖り底になる。

8　内外に横方向の撚糸を施文した口縁部の破片である。

10　薄手の無文土器で口縁部がやや外反している。

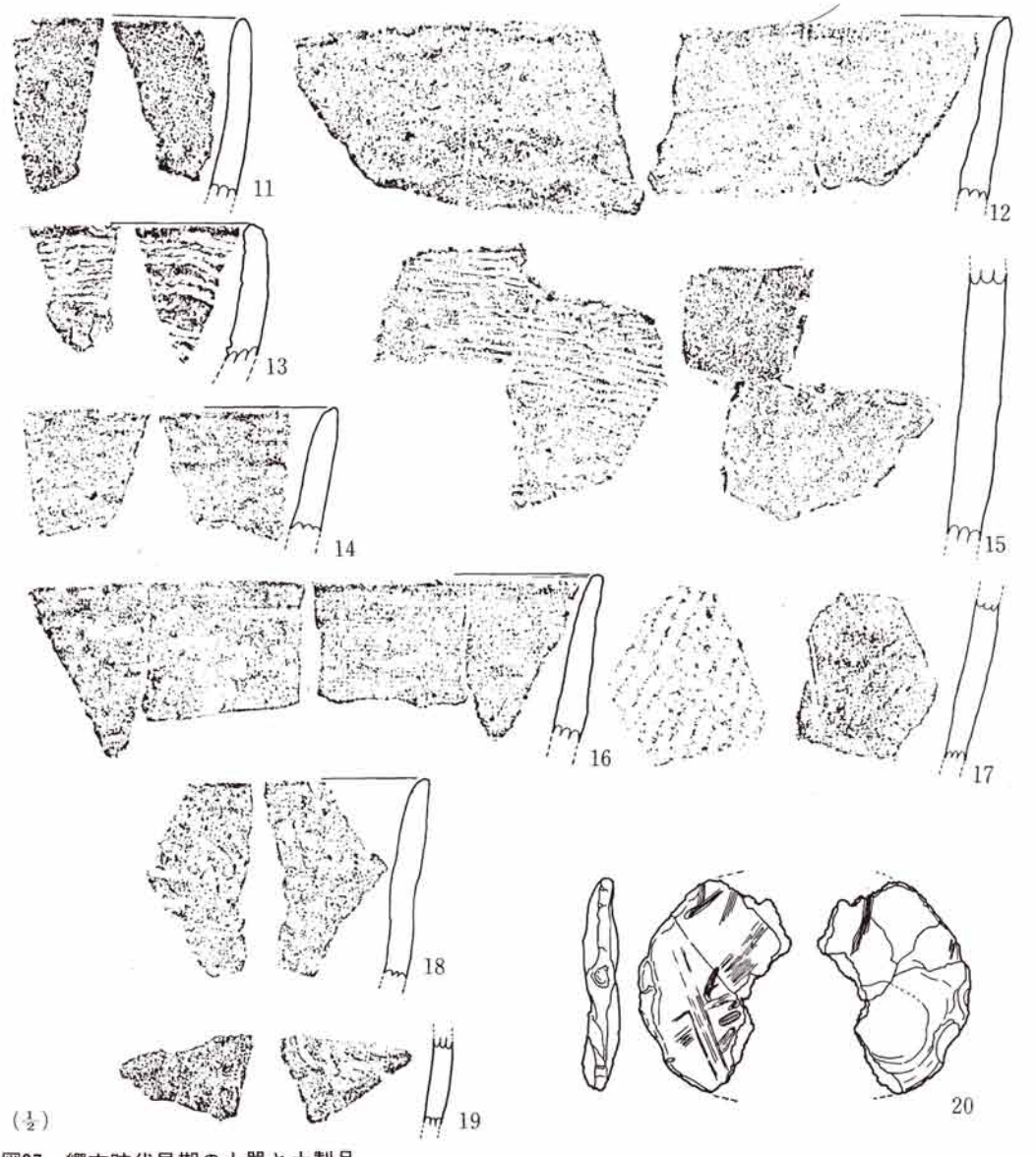


図37　縄文時代早期の土器と土製品

11　口縁部が直行する無文土器。

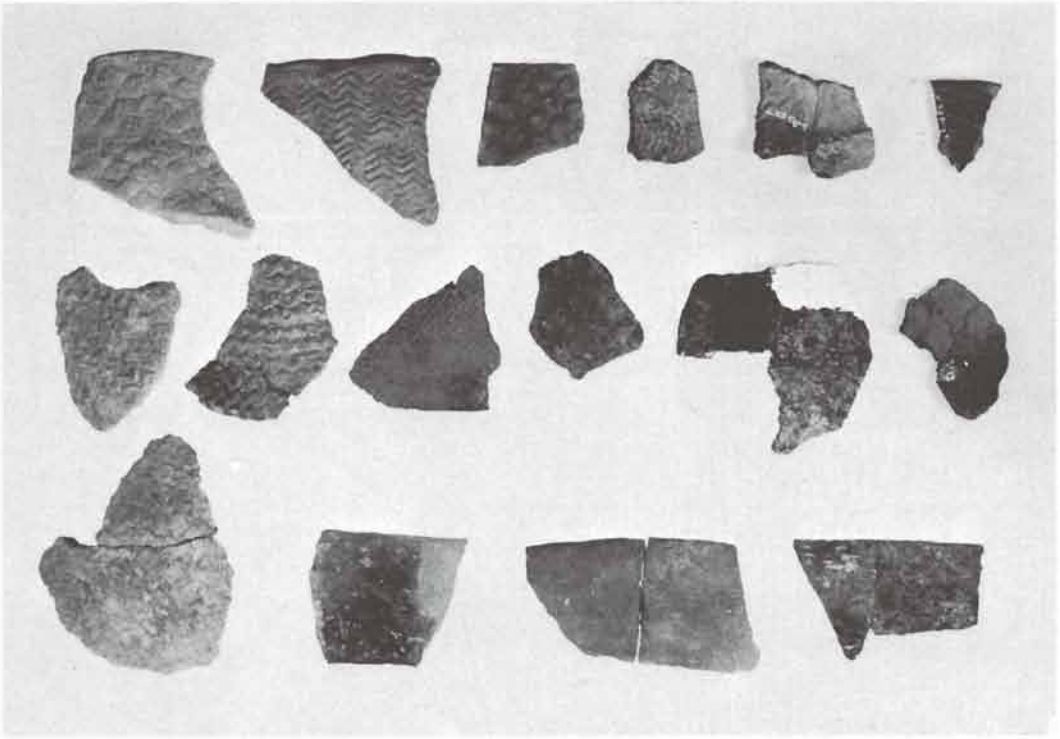
12・16　外面と内面にそれぞれ板目状の小さな条痕が観察される。

13・15　撚糸文が施された口縁部と胴部の土器片。13は内湾し内外面に撚糸文が横走している。

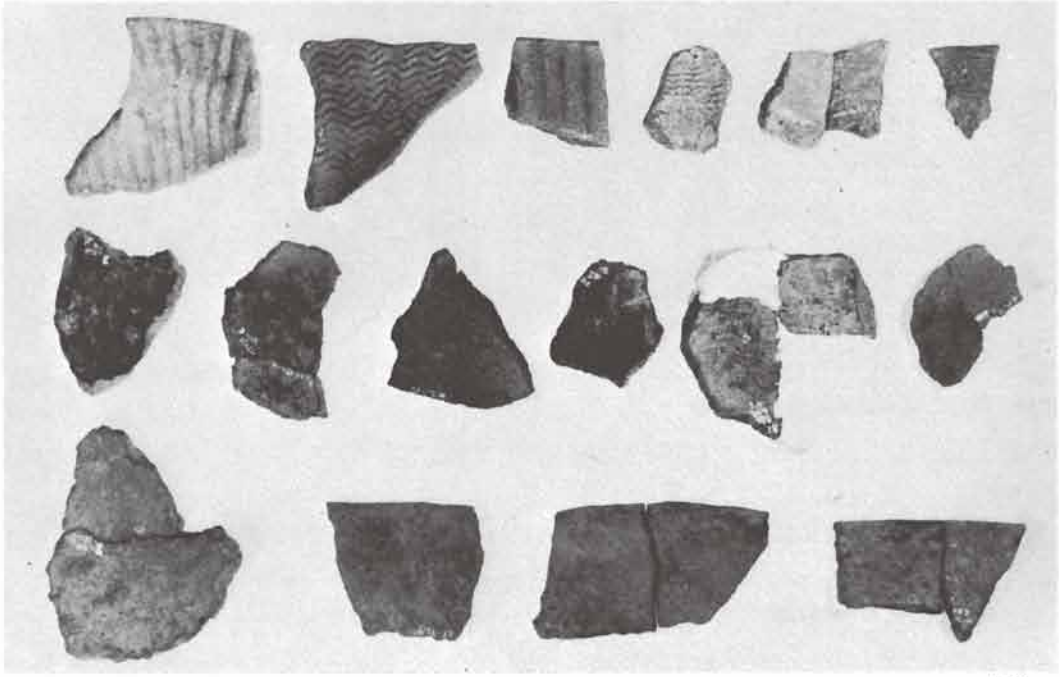
17　外面に大きな縄文が施文されている。

土　製　品

20　扁平な土製品であるが、欠損しているため全体の形状は不明である。



(表)



(裏)

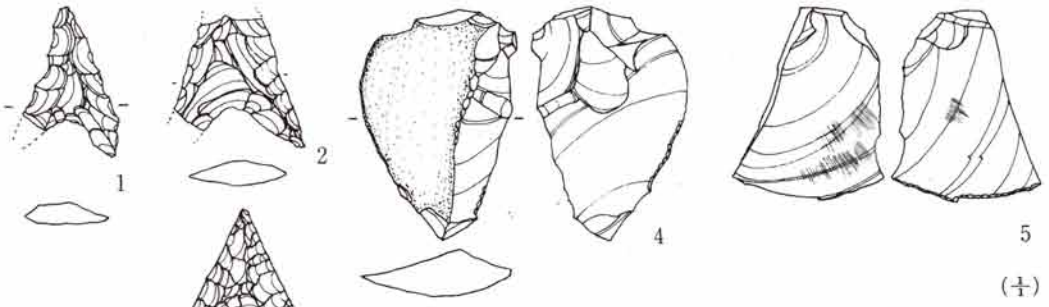


図38　石鏃・他

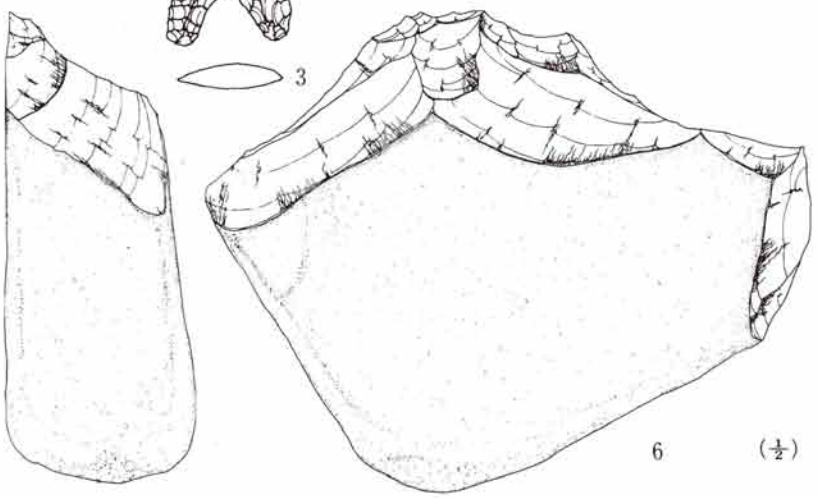
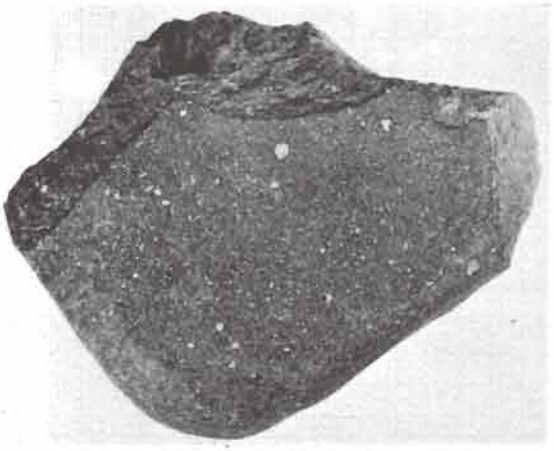
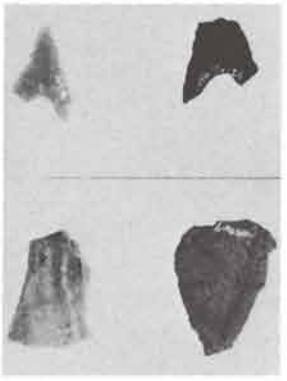


図39　礫　器





1～3石鏃

1・2はそれぞれ姫島産黒曜石製、安山岩質製である。3はチャート質の石材を用いた典型的な鍬形鏃で、重さは0.92gである。

4・5　使用痕のある剝片。4は安山岩質、5は硅質岩で、それぞれ剝片の鋭利な一辺に使用によると考えられる刃こぼれが観察される。

6　片刃の礫器、安山岩質。片面の一端にのみ打剝を施して刃部を形成しており、他は表皮を残している。典型的なチョッパー（chopper）である。

第4文化層

遺　構（集石遺構）

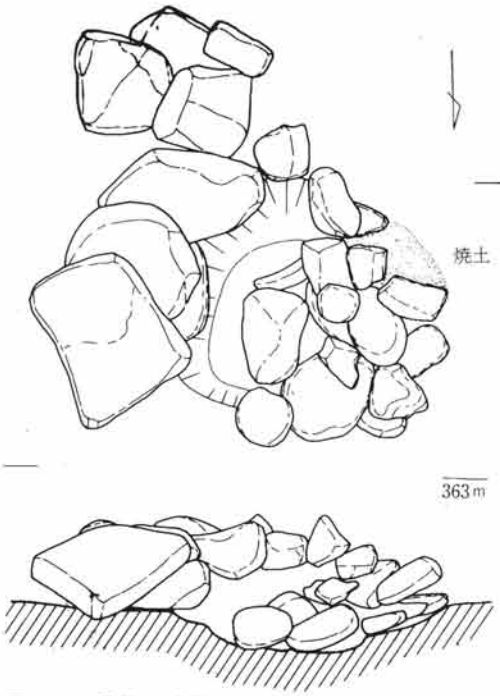


図41　3号集石遺構

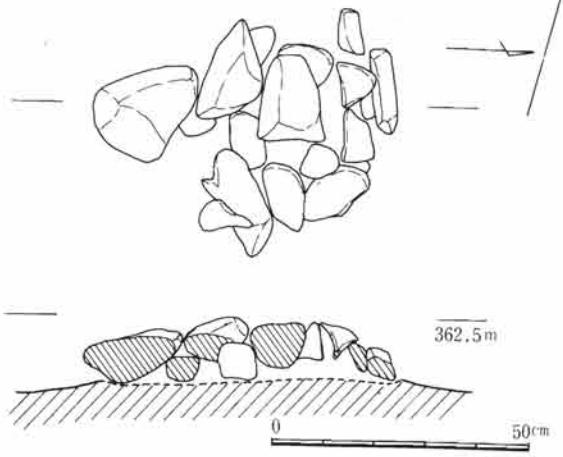


図42　6号集石遺構

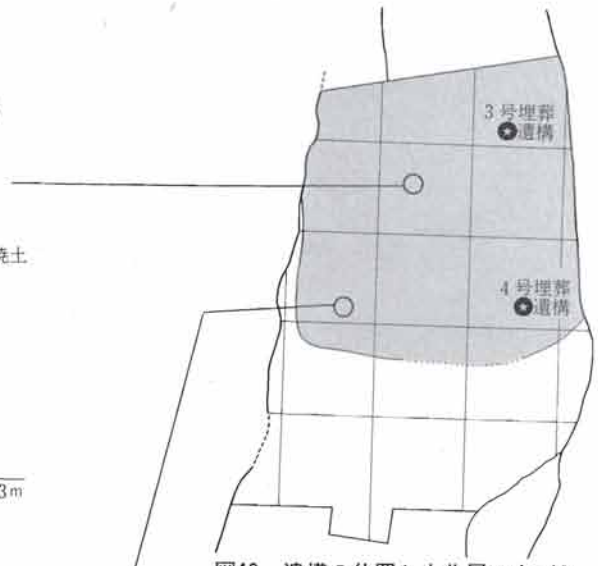


図40　遺構の位置と文化層の広がり

当洞穴の文化層の中で最も安定した層で、遺物の出土量も多く、南側のc－5グリッドおよびD－6グリッドにおいて集石遺構が、北側のB－4およびB－6グリッドで埋葬遺構が発見されている。文化層の広がりも洞穴の中央部から開口部へと広い範囲におよんでいる。

なお、第4文化層は自然層序のⅦa・Ⅶb層を主体した第4文化層（上層）とⅦc層の第4文化層（下層）の二つに区分され、遺構はいずれも上層において把握される。

上層の主体をなす土器は無文土器と押型文土器であるのに対して、下層では無文土器が圧倒的にまさっており、押型文土器は全く認められない。縄文時代の早期中頃から後半にかけての時期が想定される。

3号集石遺構は本調査で出土したものの中で最も明確な形で残っており、集石の下面に浅いピットが認められ、それに焼土・灰なども検出され炉址と判断できる。6号集石遺構も3号に準ずる状況が観察され炉址と考えられる。

遺　構（埋葬遺構）

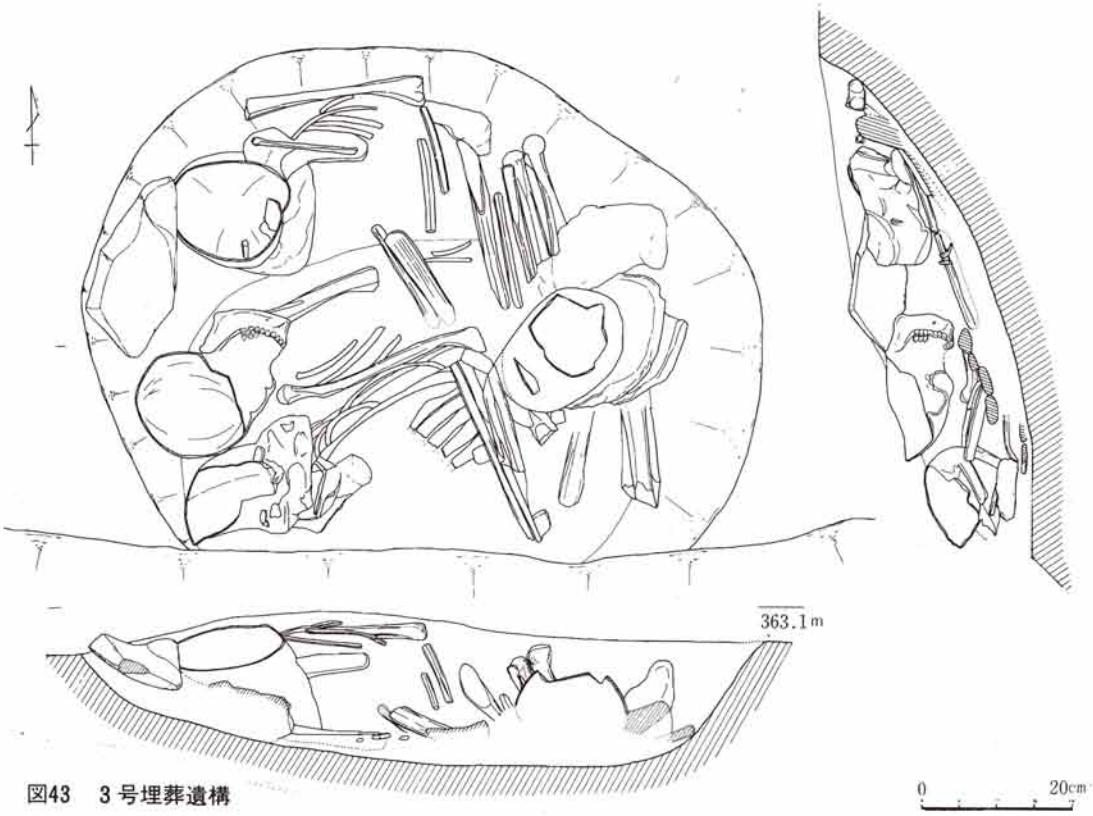


図43　3号埋葬遺構

図44　3号埋葬遺構の上部の配石

2号埋葬遺構は小さな土坑墓に、壮年男性（1号人骨）、成年女性（2号人骨）と小児の3身体が二次的な状態で埋葬されている。

3号埋葬遺構は人骨の遺存の状態が良好でなかったが、成人骨4身体と幼児骨1身体が合葬されていたものと判断される。上部にやや不規則な配石が認められる。

一つの土坑墓に複数の遺骸をおさめる葬法は縄文時代早期における特色とみなされる。

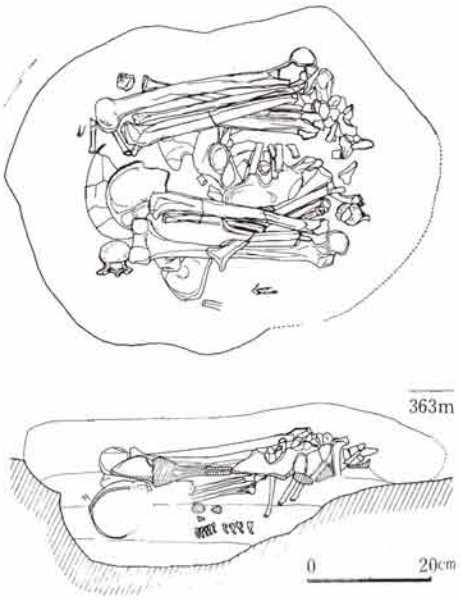


図45　2 号埋葬遺構（上面）

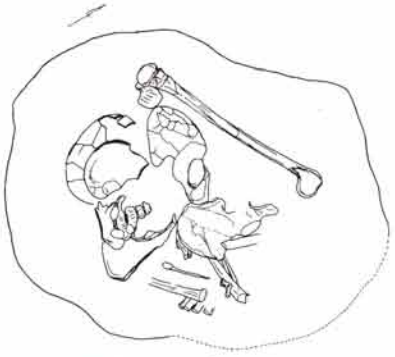


図46　2 号埋葬遺構（中面）

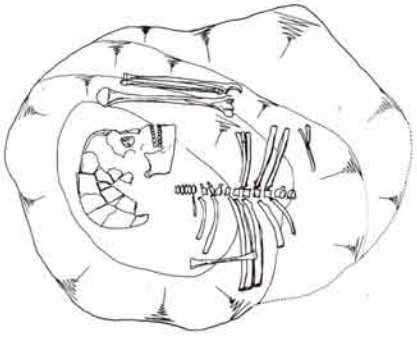


図47　2 号埋葬遺構（下面）

0　20cm

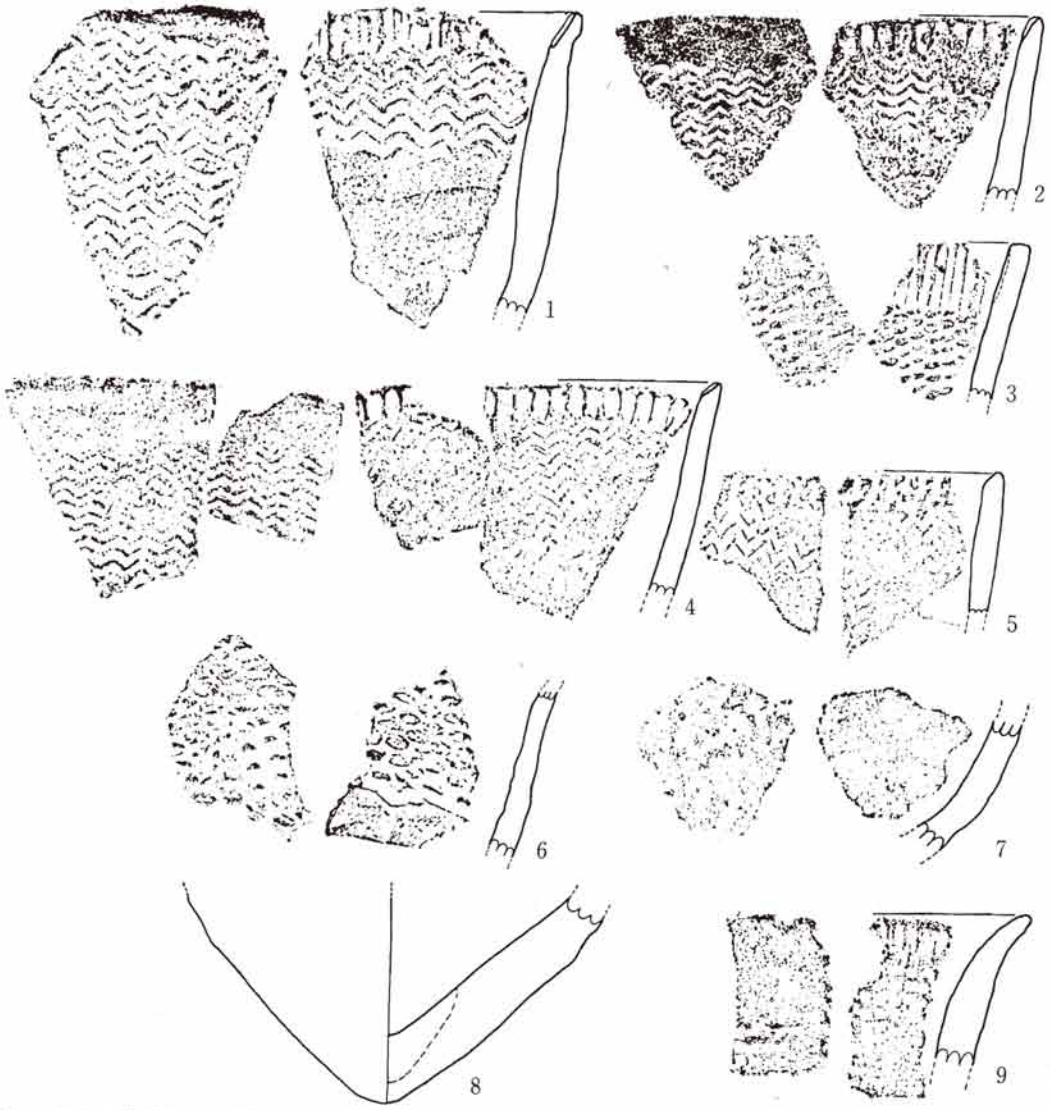


図48　縄文時代早期の土器　（$\frac{1}{2}$）

1・2・4・5　山形押型文の口縁部。内外面にやや間延びした山形文を横走させ、内面の口唇部近くに押型文の原体によると推測される短かく太い条痕が施文されている。口縁部は全体に外反気味である。

3　楕円押型文の口縁部。内外面に楕円文を施し、さらに内面にはやや細くて長い縦方向の条痕を施文している。口縁部はやや外反している。

6　楕円押型文の口縁部の破片であるが、口唇部を欠損している。

7・8　底部および底部近くの破片。

9　格子目押型文の口縁部。外面の口唇直下に素文帯を設け、それ以下に施文している。内面にも条痕文と押型文が施されており、口縁部は、著しく外反する。

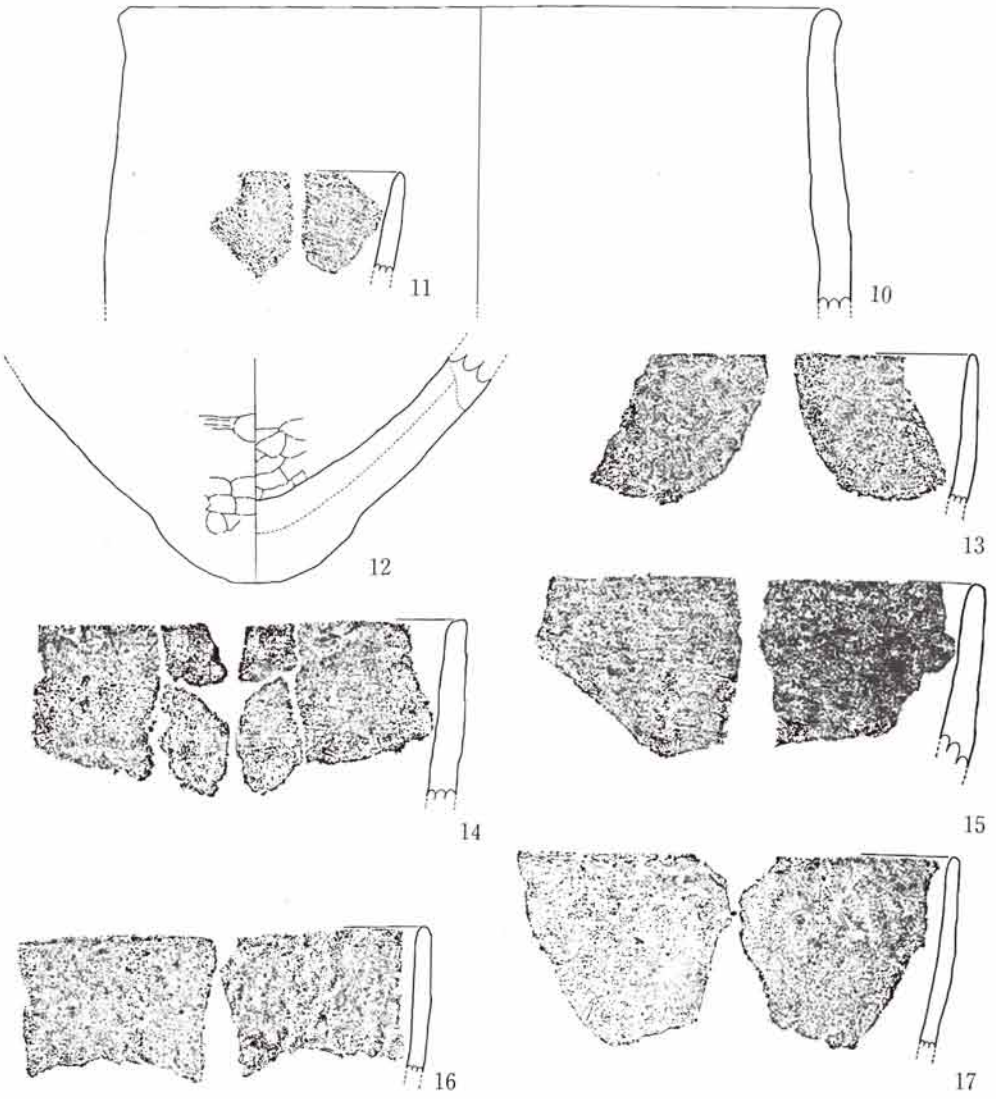


図49　縄文時代早期の土器　(½)

10　口縁部が内湾する無文厚手の大形の鉢形土器。

12　無文厚手の尖り底。土器整形時の指による圧痕が観察される。10の底部にあたるものと推測される。

11・13・16・17　薄手の無文土器で、口縁部は直行～内湾している。

14・15　やや厚手の無文土器で、口縁部はほぼ直行する。

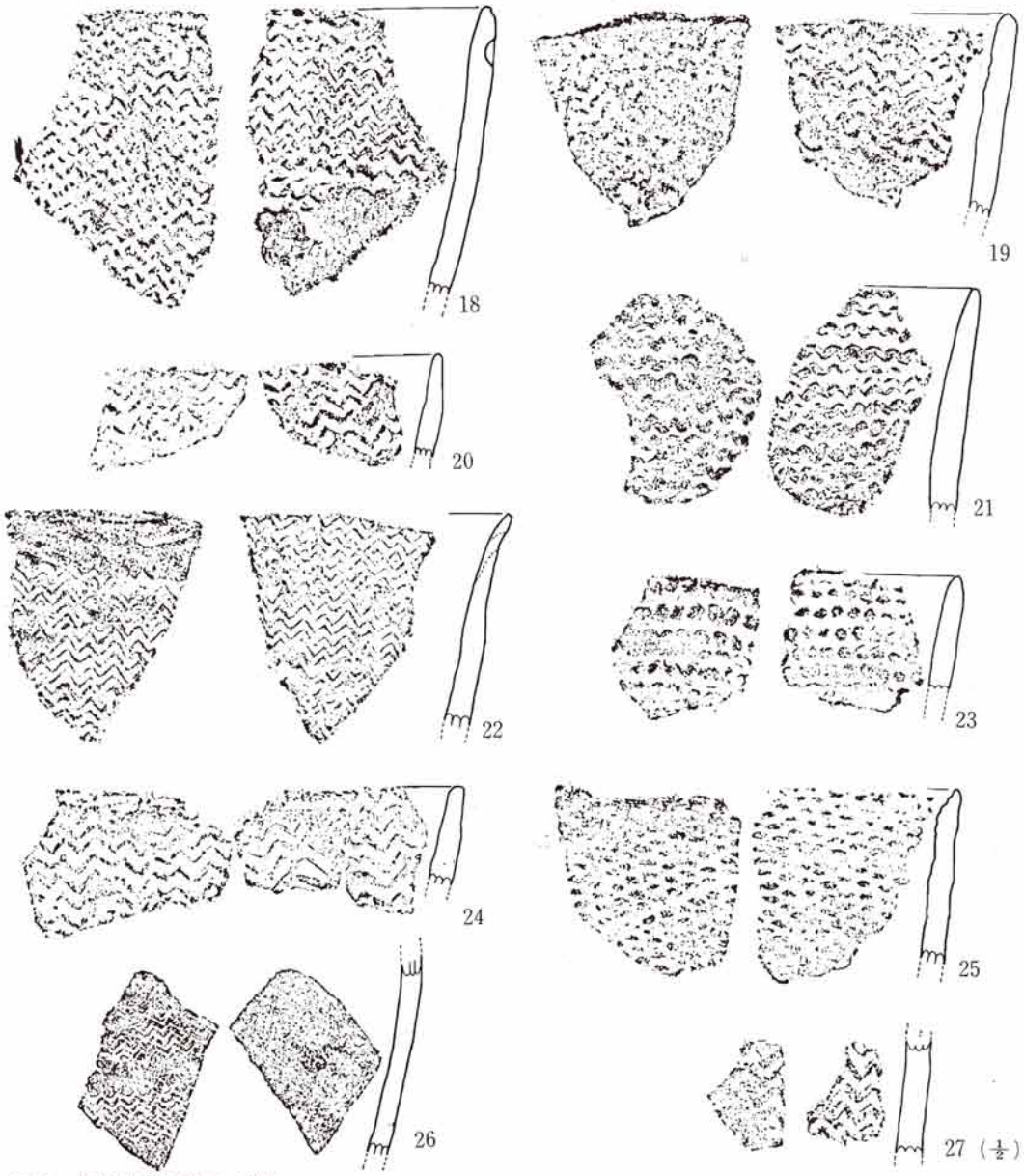


図50　縄文時代早期の土器

18～21・24　山形押型文土器。内外面に山型押型文を施した鉢形土器の口縁部である。内面に条痕文は認められず、また口縁部はほぼ直行するなど、先の押型文土器の一群とはタイプが異なる。

22　外面の口唇部直下に素文帯を残して、内外に山形文を施文している。口縁部は外反する。

23・25　楕円押型文土器。口縁部の内外面に楕円文を施しており、やはり内面に条痕は施文されていない。口縁部は直行する。

26　小さな山形文が外面に施文されているが、文様と文様の間に無文帯を持つ。

27　山形押型文の口縁部近くの破片で、内外に山形文が施こされている。

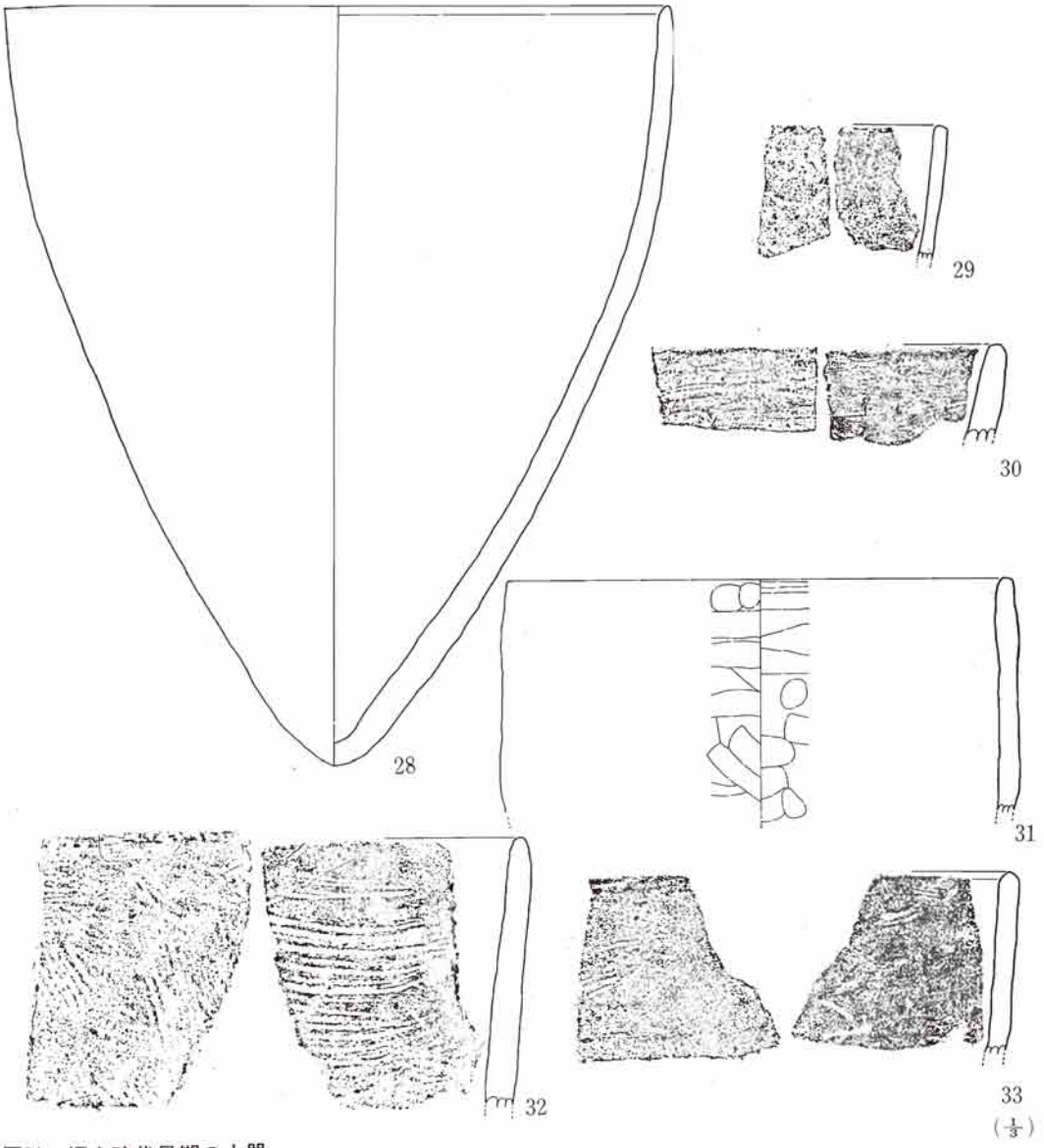


図51　縄文時代早期の土器

28　無文尖底の鉢形土器。口縁部が直行し、胴部から底部にかけて急に小さくなりながら著しく尖る底部へと移行する。

29　薄手の無文土器で、内面に縦方向の板目状調整がみられる。

30　横方向の条痕文が施されている。

31　やや内湾気味の口縁部で、内・外面に板状器具によるナデによる調整と指圧がみられる。

32　粗い条痕文が内外に認められる。外面の条痕は縦～斜方向であるのに対し、内面は横方向でしかも明瞭につけられている。なお口唇部に刻み目を有している。

33　精・粗二種類の調整痕が観察される。

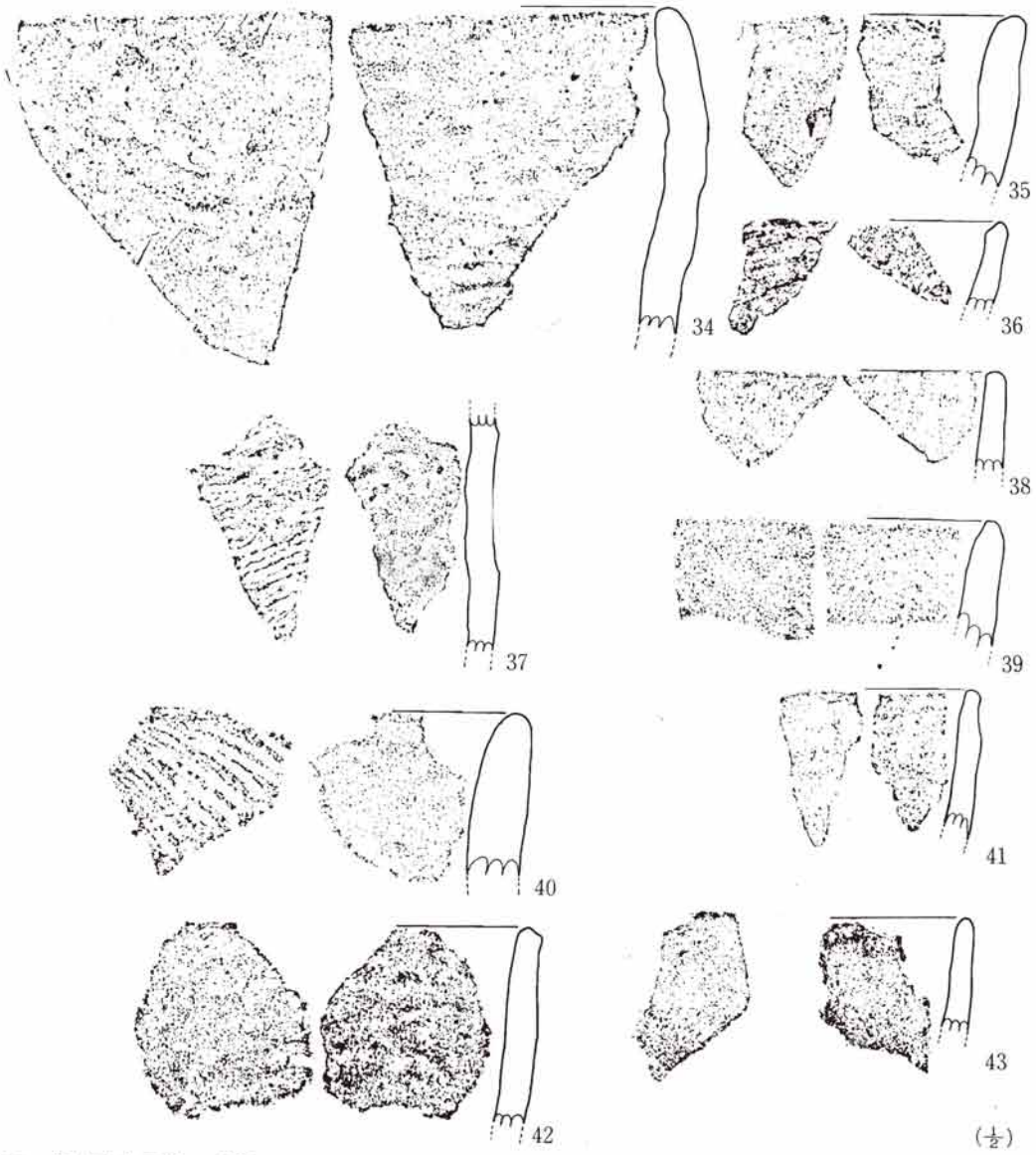


図52　縄文時代早期の土器

34　著しく内湾する無文土器の口縁部。

35・39　やや厚手の無文土器の口縁部で幾分外反する形態を呈する。

36・38・41～43　無文薄手の口縁部。口縁部の形態は全体的に直行する。

37　撚糸文土器。外面に斜向する細い撚糸文が施されている。

40　粗い撚糸文が斜方向に走っている厚手の口縁部。

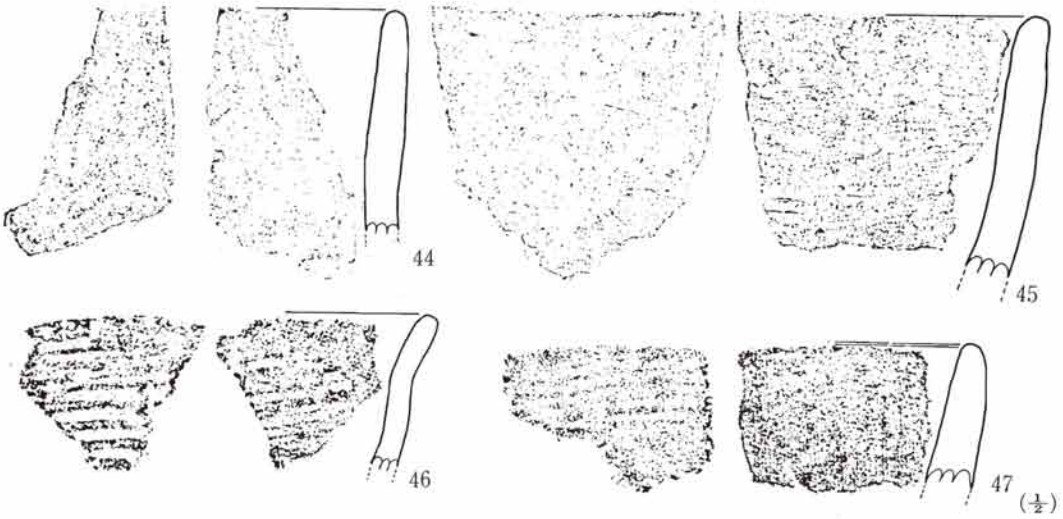
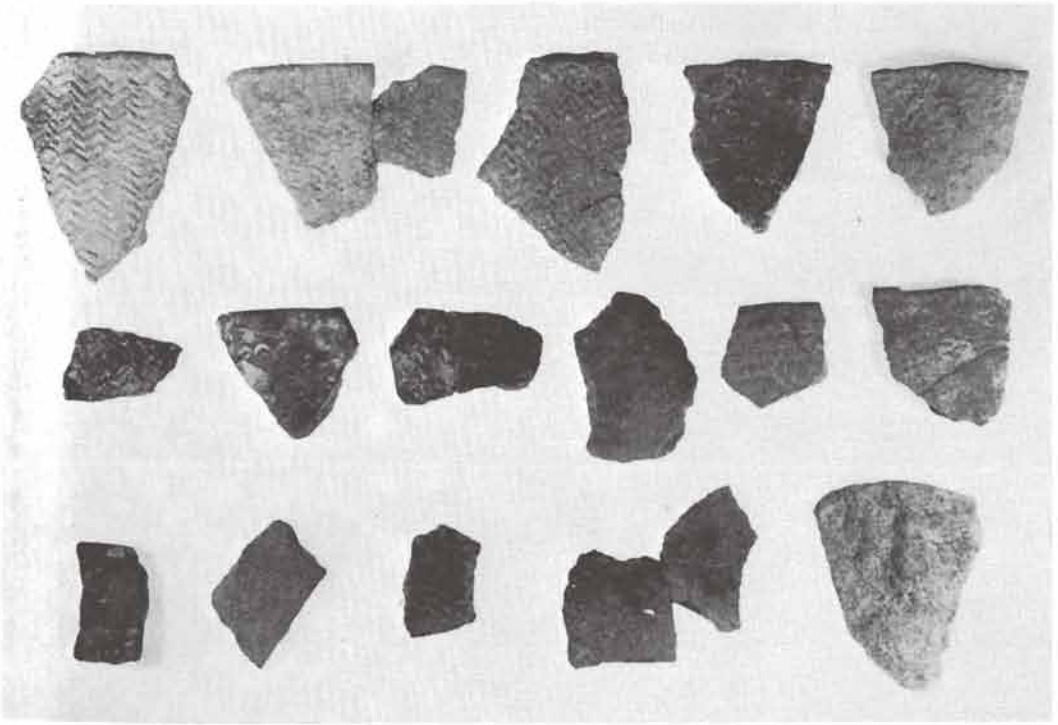
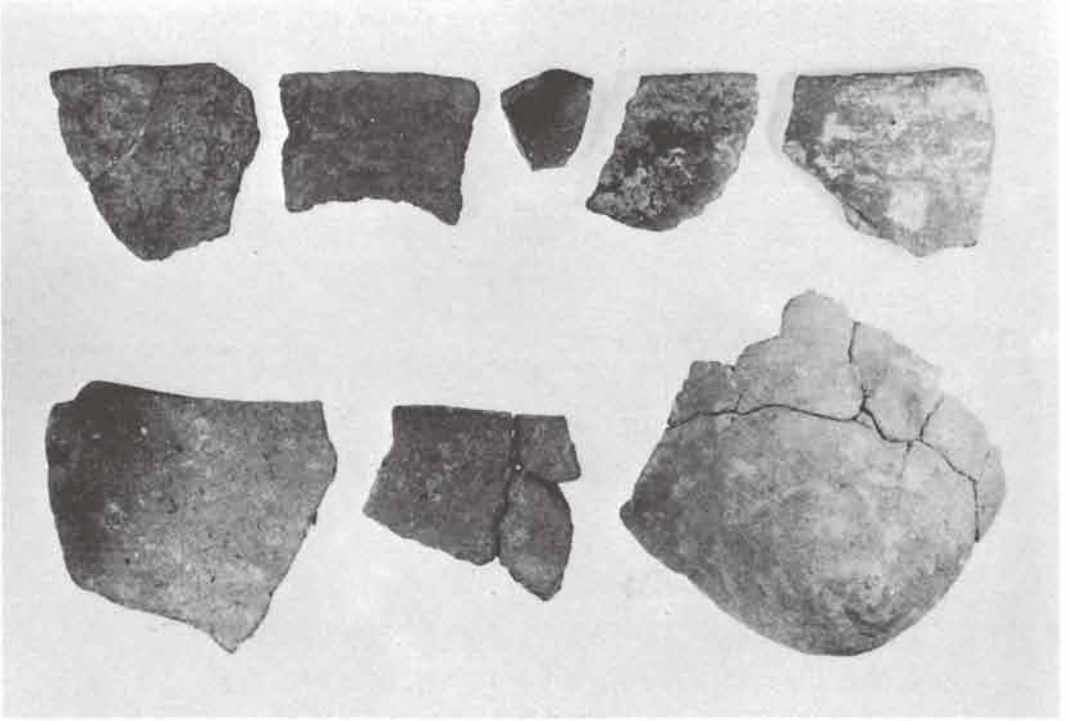
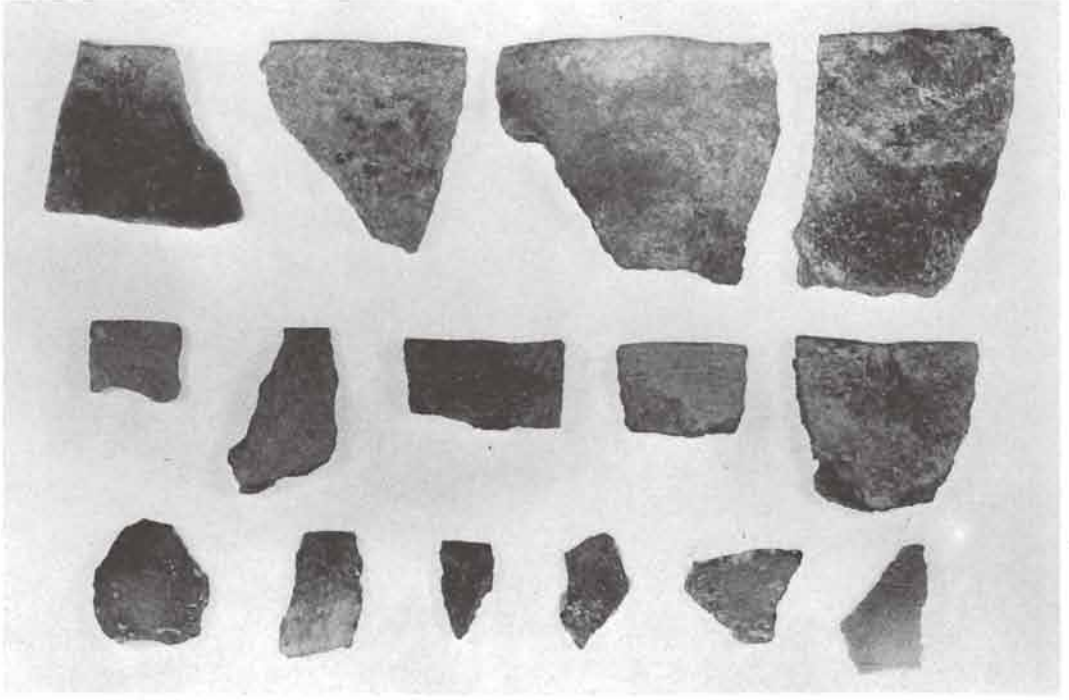


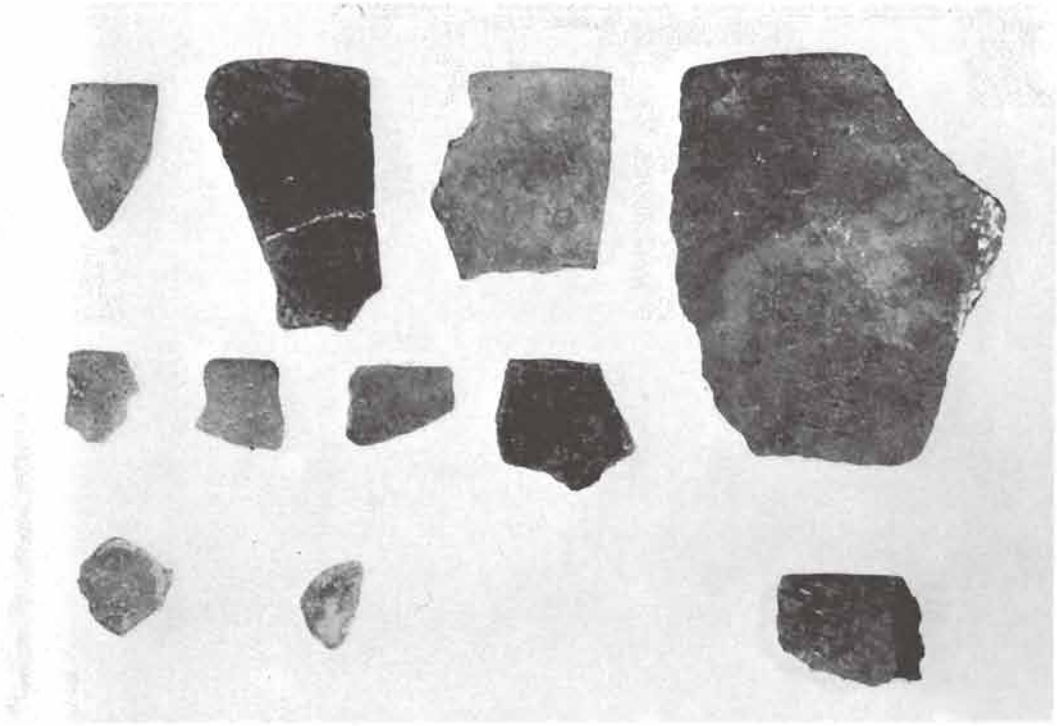
図53　縄文時代早期の土器

44・45　無文土器。45の内面には板状器具による横方向の調整がみられる。
46　ヘラ状の器具によると思われる横方向の条痕が内外面に施されている。
47　外面に横方向の条痕文がつけられている。









縄文時代早期の土器

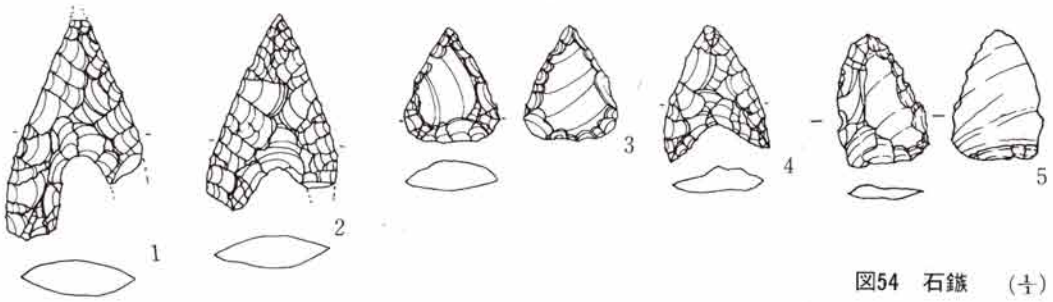


図54　石鏃　(1/1)

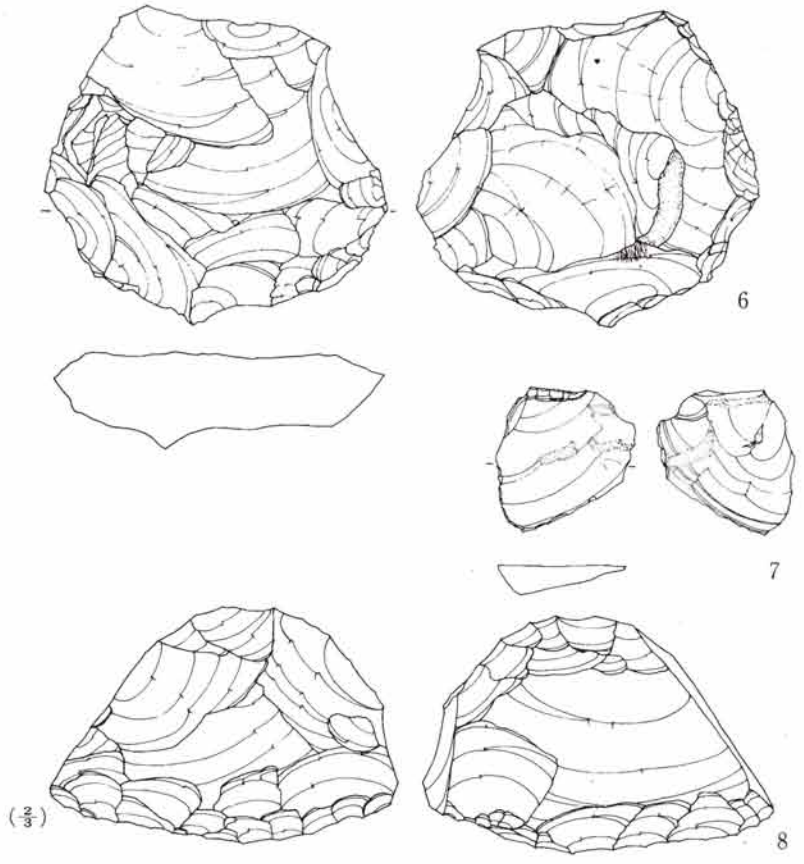


図55
スクレィパー・他

1～5石鏃（1～3…上層、4・5…下層）

1・2　いわゆる「鍬形鏃」で上層の押型文土器に共伴する資料である。共に黒色をした黒曜石製である。

3　基部に抉りがないタイプで、二次加工は周辺のみ施されている。姫島産黒曜石、0.55g。

4　脚部が尖る特徴的なタイプの石鏃である。安山岩質、0.52g。

5　基部に抉りがなく、しかも大剝離面側のみ周辺に沿って二次加工が行なわれている。安山岩質、0.42g。

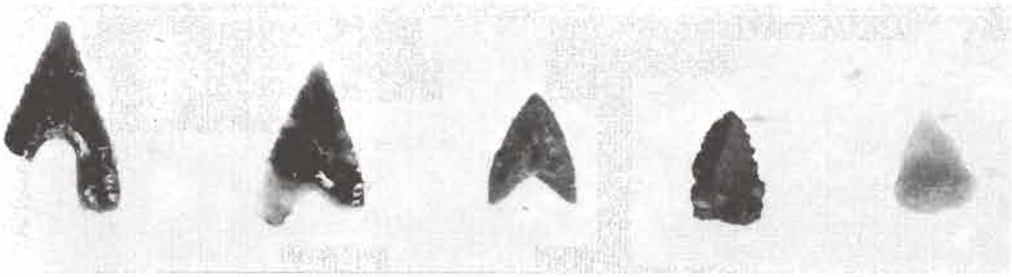
6・8　掻器（6…下層、8…上層）

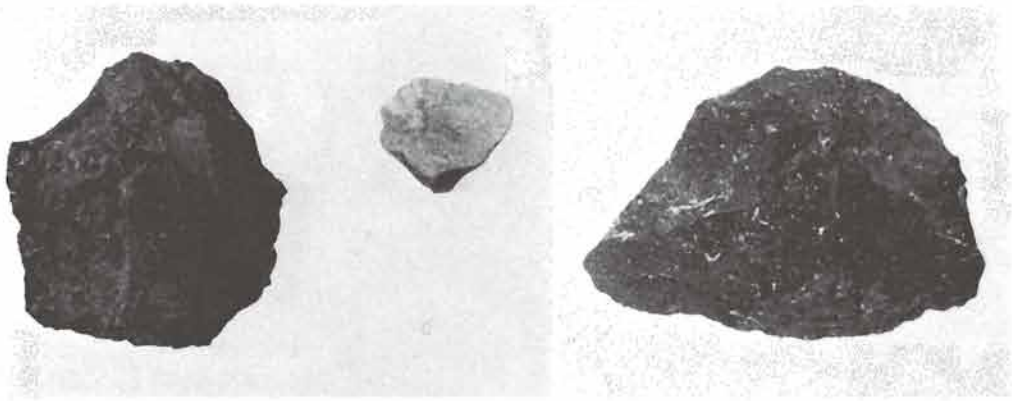
6　大形で厚味のある安山岩質の剝片を用い、その両面に二次加工を施している。

8　半月状を呈するスクレィパーで、直線的な一辺の両面に丹念な二次加工を施し、鋭利な刃部を形成している。安山岩質。

7　使用痕のある剝片（上層）

安山岩質の剝片の一端に使用によると推測される刃こぼれが観察される。





遺物出土状況

第5文化層

遺　構（集石遺構）

図57　7号集石遺構

図56　遺構の位置と文化層の広がり

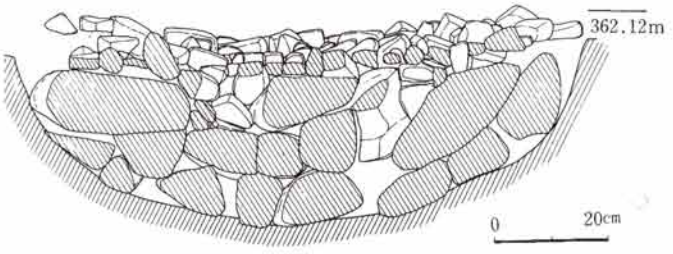


図58　7号集石遺構（断面）

自然層位のⅧa層にほぼ相当する文化層で、これまでの文化層と比較して、南側の開口部よりに広がっている。

D－6・7グリッドでそれぞれ集石遺構が認められる。

7号集石遺構は直径ほぼ1m深さ約40cmの円形をしたピットの内部が円礫によって埋めつくされており、それも上面近くでは拳大よりやや小さめの礫を、下部は15～30cm程の大きさの円礫をと使い分けている。内部はそれこそ礫だけで、人骨も焼土や灰なども検出されずその性格を明確にすることが出来なかった。

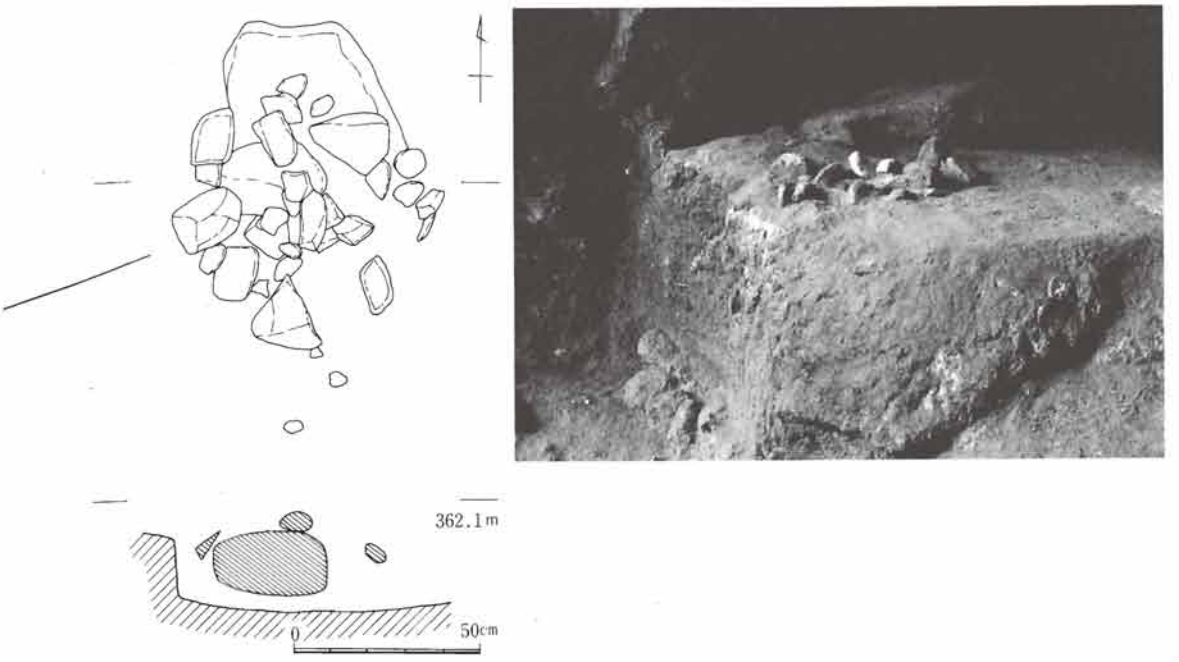
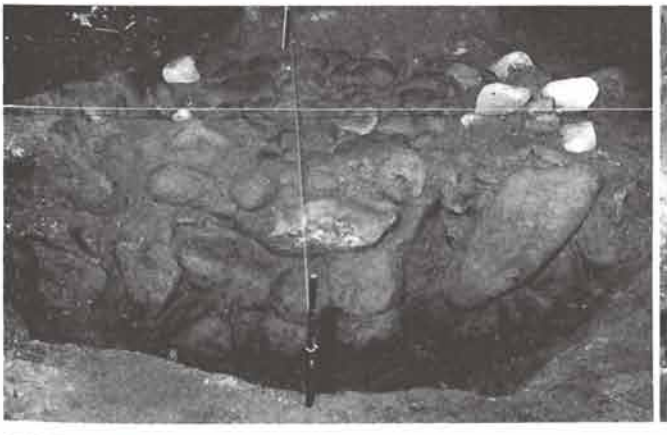


図59　8号集石遺構

8号集石遺構

8基の集石遺構の中でもっとも開口部よりに位置している。30～40cmの大きな礫と10cm大の大きさの礫から成っており、集石の下面にほぼ直角に近い壁を有するピットがみられる。また周辺にさほど顕著でないが、炭化物、焼土などが観察され一種の炉址と考えられる。



7号集石遺構（断面）

（掘り込み）

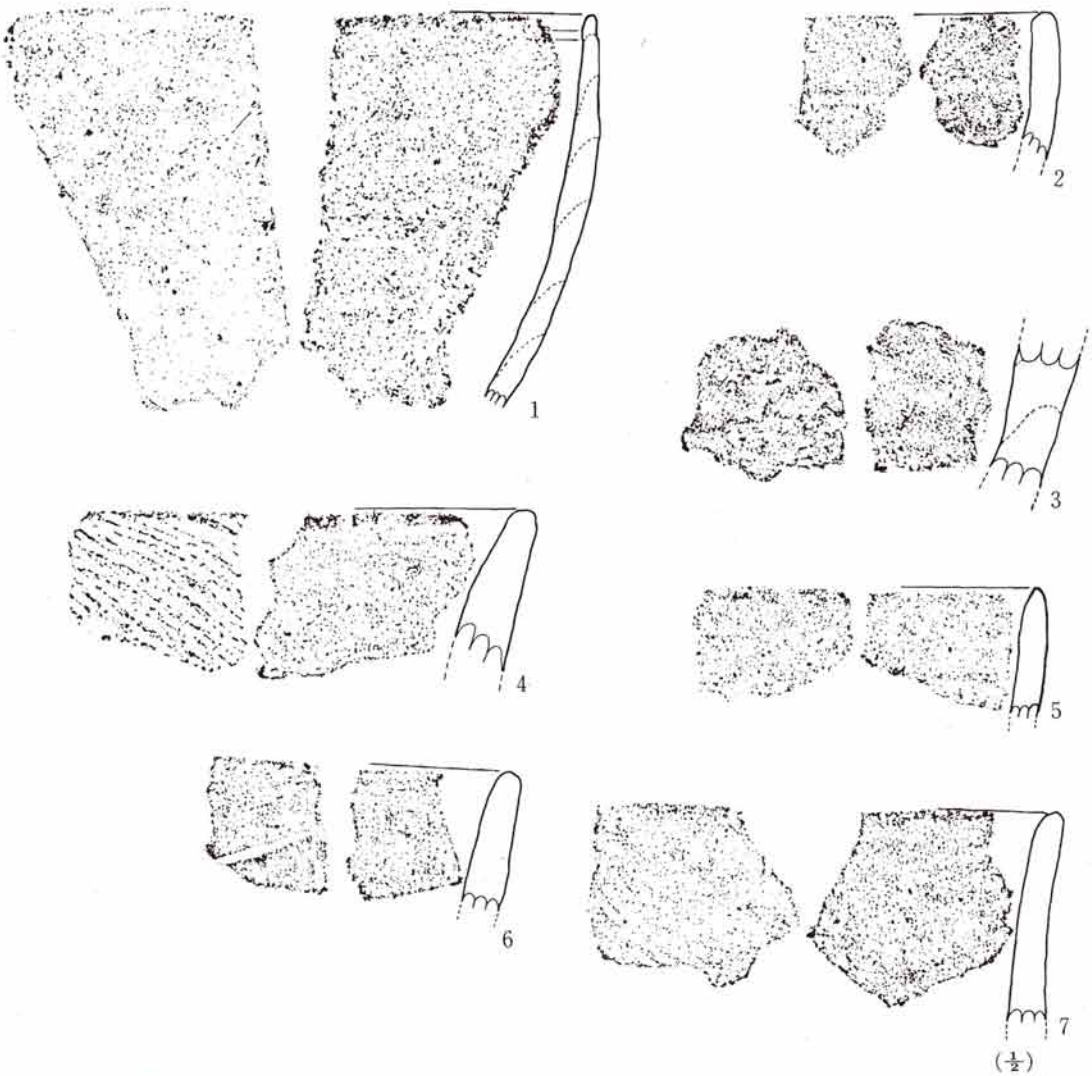


図60　縄文時代早期の土器

1　無文薄手の小形の鉢形土器。口縁部から胴部にかけての形態から、底部は尖底になるものと判断できる。破片の断面に幅が２cmほどの粘土のおびが示されている。

2　無文薄手の土器で、１と同様内湾した口縁部から小形の鉢形土器が推測される。

5　無文土器の口縁部で、口唇は尖り直行する。

4　外面に斜め方向の粗い条痕が施されている外反する口縁部。

6・7　やや外反する口縁部の破片で、部分的にヘラ状の器具による調整の痕跡がみられる。

3　厚手の無文土器の胴部。

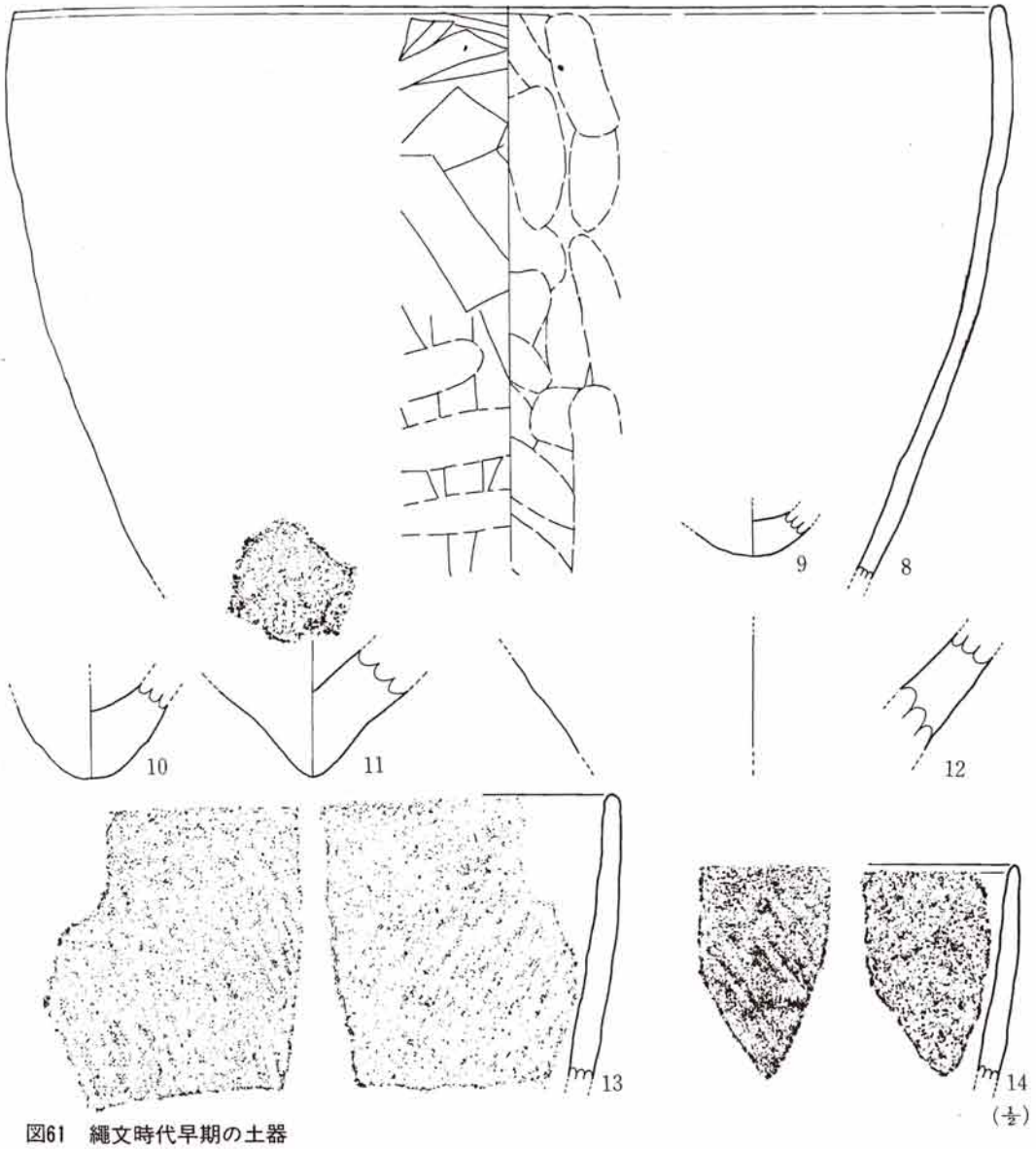


図61　縄文時代早期の土器

8　極めて薄手の、口縁部が内湾した単純な器形を呈する鉢形土器で、底部は恐らく9のような尖底が考えられる。外面は板状器具による調整が施されており、内面は指圧が認められる。

13・14　共に薄手の直行する口縁部であるが、8と同様な器形が推測される。内外面に斜め方向の条痕がみられる。

10　小さくてやや丸味を有する尖り底である。

11　底部の先端近くで著しく尖っている厚手の底部。

12　底部近くの破片で、尖り底になるものと考えられる。

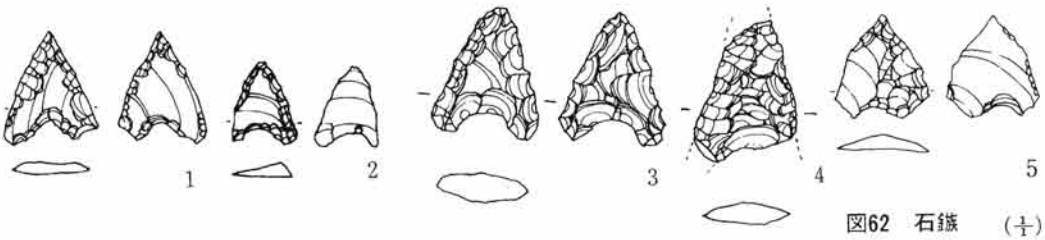
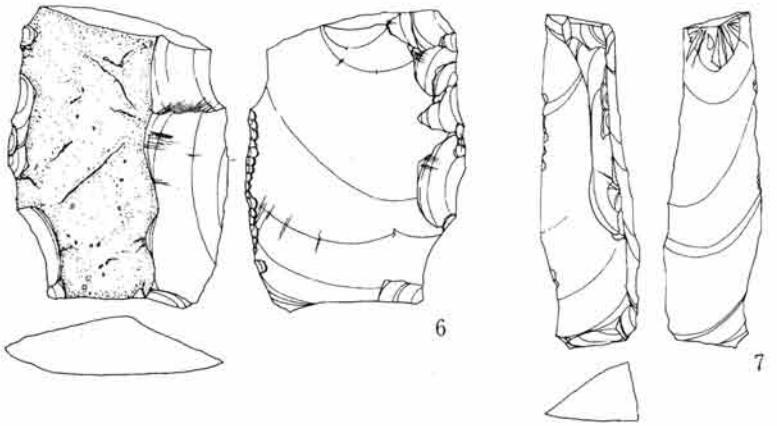
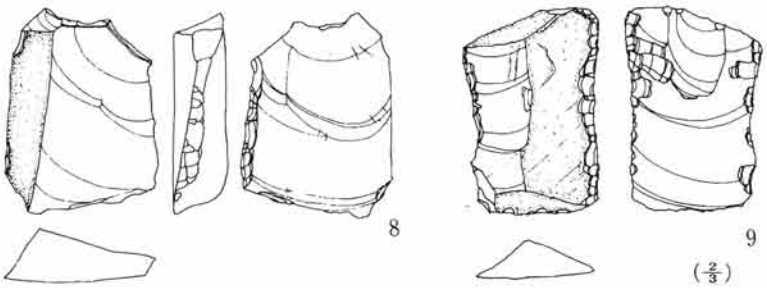


図62　石鏃　(1/1)





(2/3)　図63　スクレィパー・他

1～5　石鏃

1・2・5　主要剝離面と大剝離面の大部分を残した特徴的な加工を有する石鏃。2は特に小形で、僅か0.12g、黒曜石製。1は硅質岩製、5は安山岩質製である。

3　基部にやや大きな抉りを有する二等辺三角形の石鏃で、石材は安山岩質、0.72g。

4　先端と脚部を欠損する。チャート質の石材を用いている。

6・8・9　削器（スクレィパー）

6　硅質岩の比較的大形で厚味のある縦長剝片の側辺に沿って二次加工が施されており、反対の一辺の中央には細部加工の小さな剝離がならんでいる。

8　縦長剝片の主要剝離面側の一側辺に沿って刃部形成の二次加工が加えられている。打面部はカットされている。硅質岩。

9　縦長剝片の側辺に沿って丹念な二次加工が施されている形の整った削器である。チャート質の石材が用いられている。

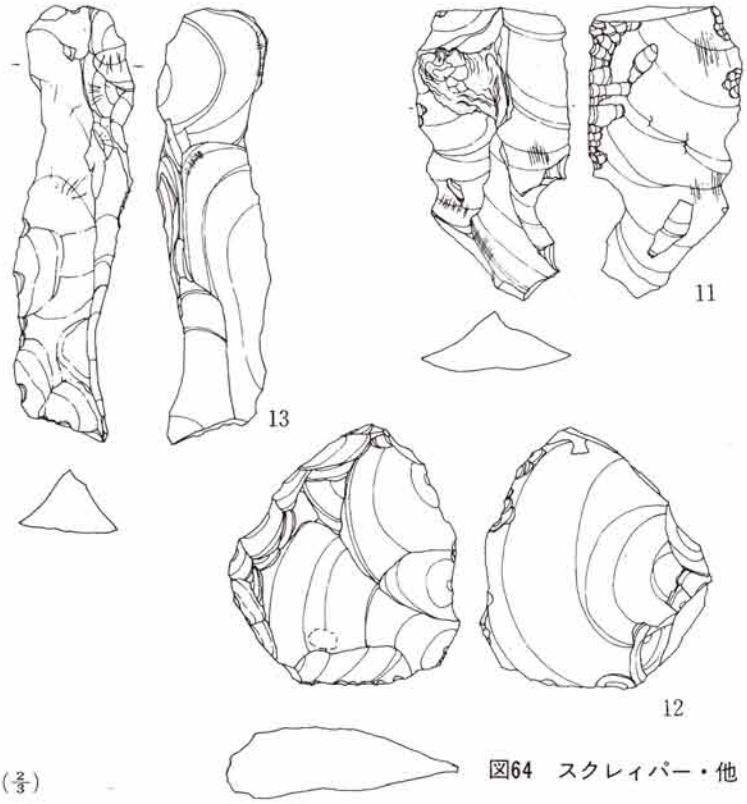
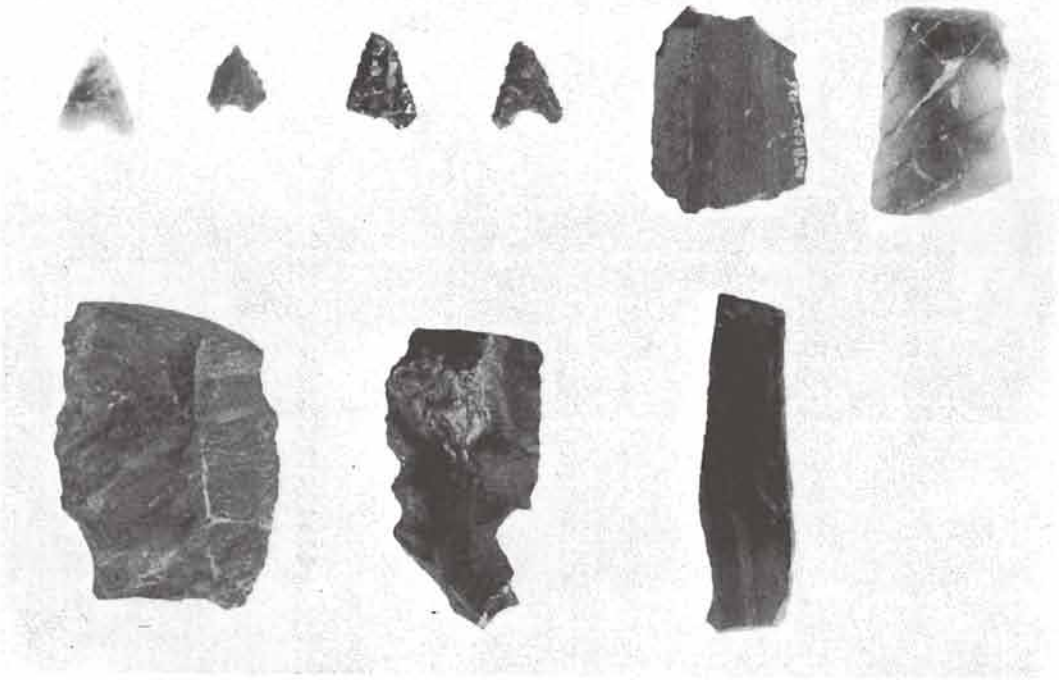


図64　スクレィパー・他

11　削器（スクレィパー）。縦に長い剝片の一側辺の主要剝離面側に二次加工がみられる。石材は硅質岩と思われるが明確でない。

12　やや横に広い剝片の打面側と反対の一辺に局部的二次加工が施されている。安山岩質。

13　縦に長い剝片であるが、石材のせいか剝離面は不規則である。



第6文化層

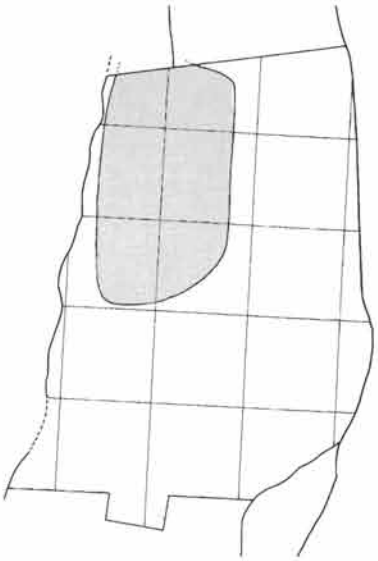


図65　文化層の広がり

自然層序のⅧａ・Ⅷｂを主体にⅨ層上面にかけて遺物の包含が認められる。この第６文化層はそれ以前の文化層の広がりと異なり、洞穴南側のＣ、Ｄグリッドのみに認められる。

遺物の量は他の文化層に比較して卓越しており、土器の出土状況では、これまでの文化層では無文土器が圧倒的多数を占ていたのに対し、この層では条痕文土器がかなりの比率を占めている。石器は70点余りで特別多いとは思われないが、石器組成の中に槍先形尖頭器が認められる点は注目される。

なお、第２～第５文化層において発見されていた炉址と想定できる集石遺跡は１基も出土していない。

尖底土器の出土状況

遺　物

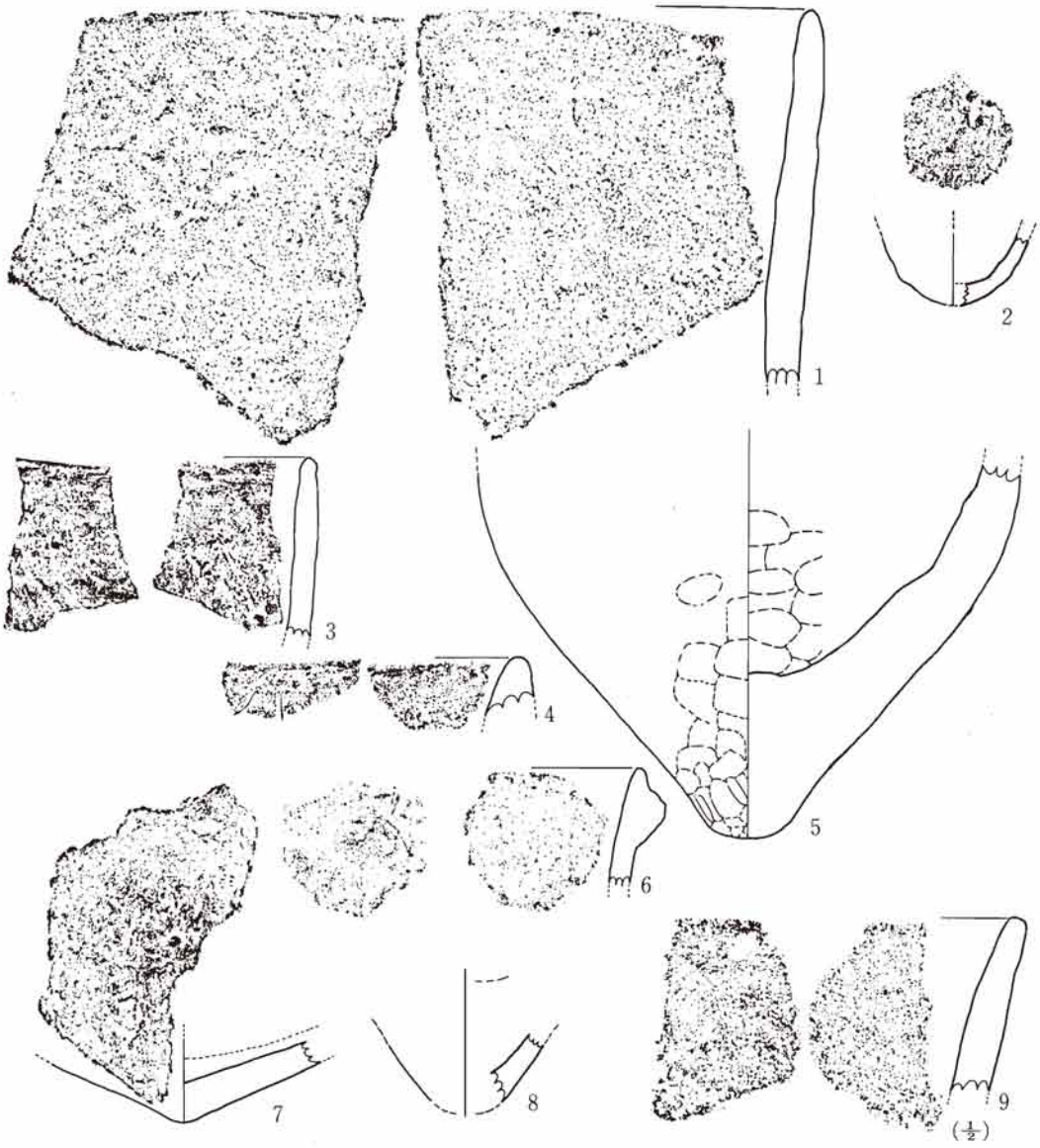


図66　縄文時代早期の土器

1　無文の口縁部の破片で、内外面に指圧の痕跡が観察される。

2　丸底に近い尖底をしたミニチュアの土器である。

3　薄手の条痕文土器の口縁部で、外面は横方向、内面は縦方向の板目状の施文具による調整が施されている。

5　厚手の乳房状をした尖り底の土器であり、特に底部の中央では厚みを増している。内外面に指圧による調整が明瞭にみられる。

6　口縁部の直下に1cm大のコブ状の粘土を貼りつけている。

7　大きく開いた尖底で、特殊な器形を予想させる。内面の一部が剝落している。

8　厚手の底部近くの土器片で、内面は大きく剝落している。

9　外反する無文土器の口縁部。

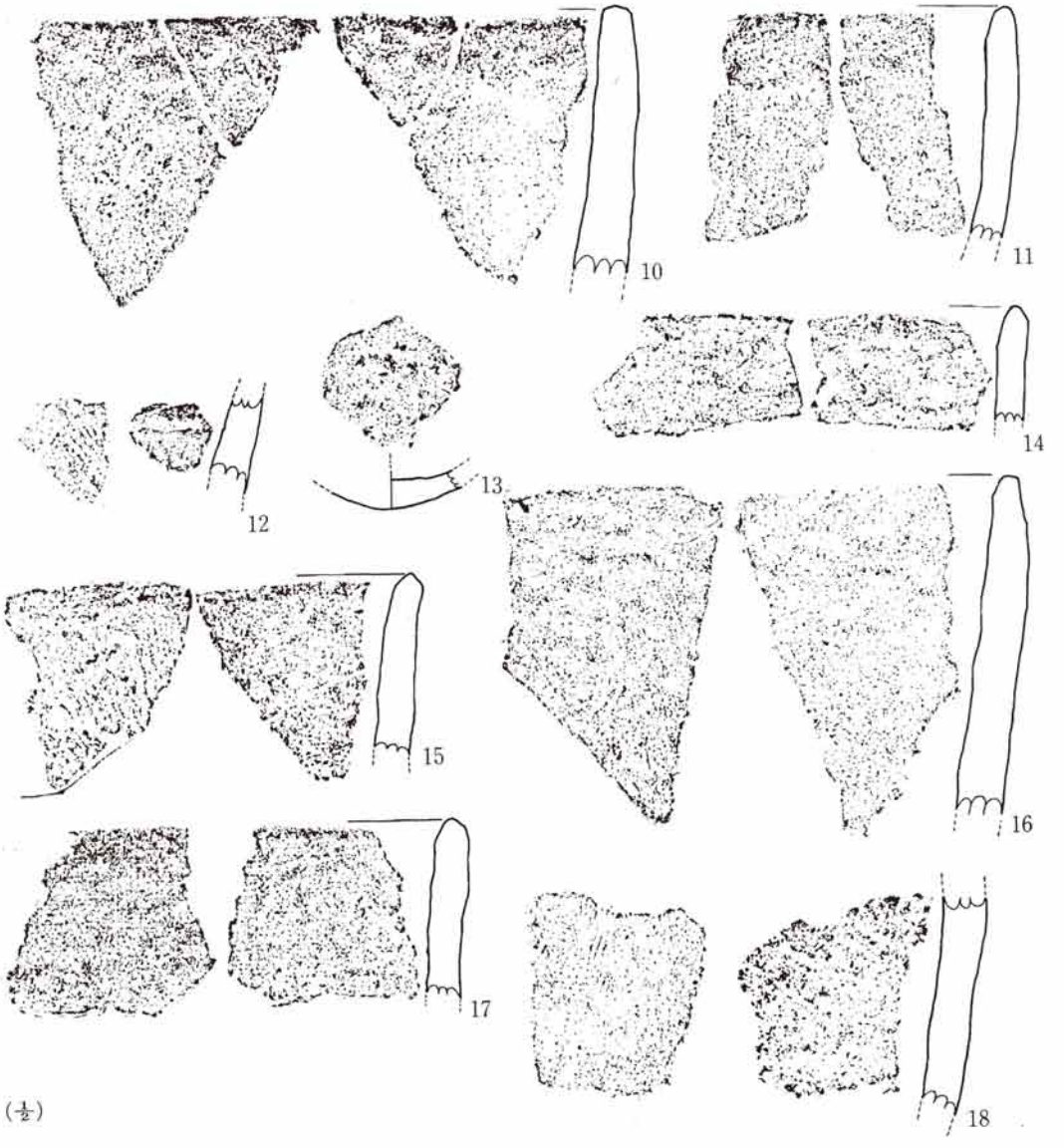


図67　縄文時代早期の土器

10・16　無文のやや厚手の口縁部で若干内湾気味の器形を呈する。

11　同じく内湾するが器壁がやや薄い。

14・17　直行する薄手の口縁部の破片。横方向の板目状施文具による調整がみられる。

15　外反する口縁部の破片で、内外に縦方向の条痕が施されている。

12　撚糸文の胴部破片。

18　胴部の破片で、外面に湾曲する短い単位の条痕文がみられる。

13　薄手の無文土器の破片。丸底に近い形態を呈する。

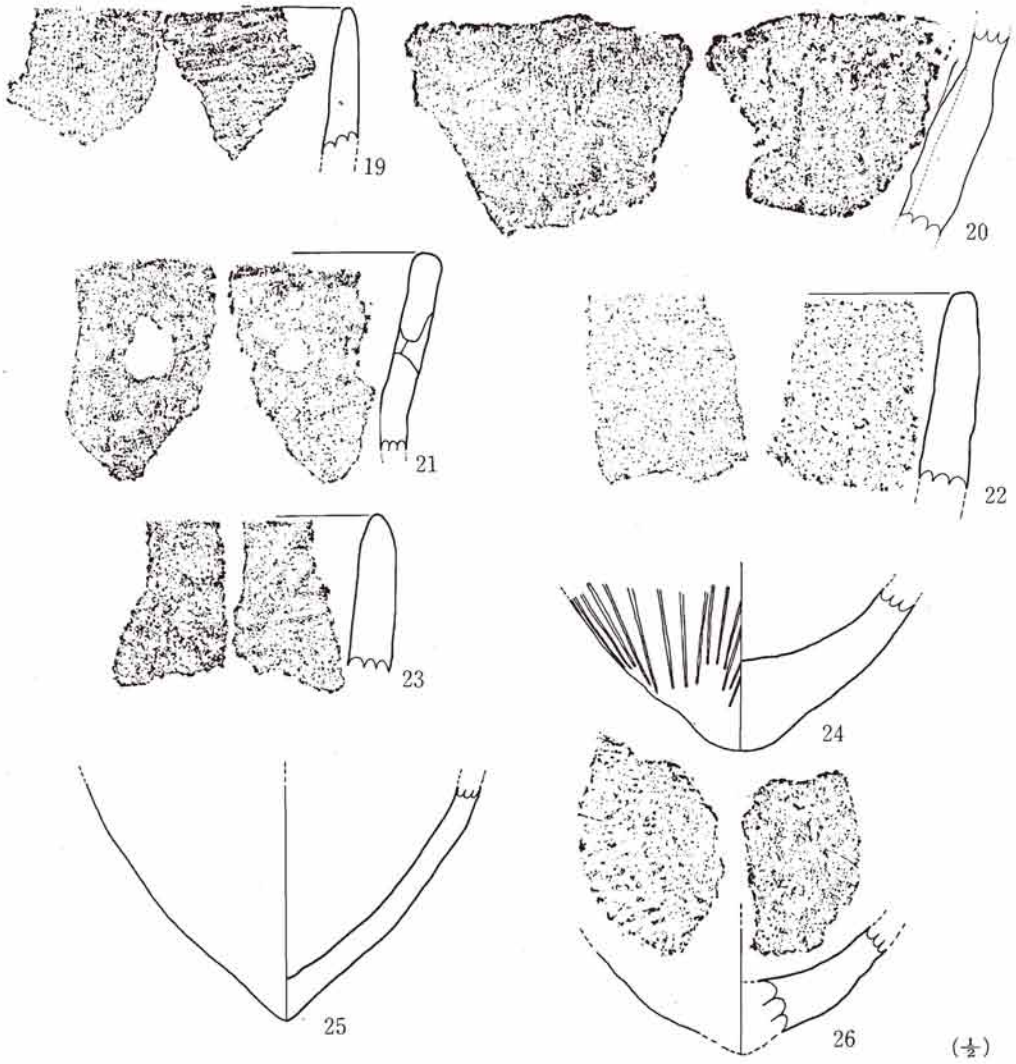


図68　縄文時代早期の土器

19　薄手の無文土器の口縁部。

21　無文の口縁部の破片で、口縁部近くで急に外反する器形を呈する。中央に穿孔が施されている。

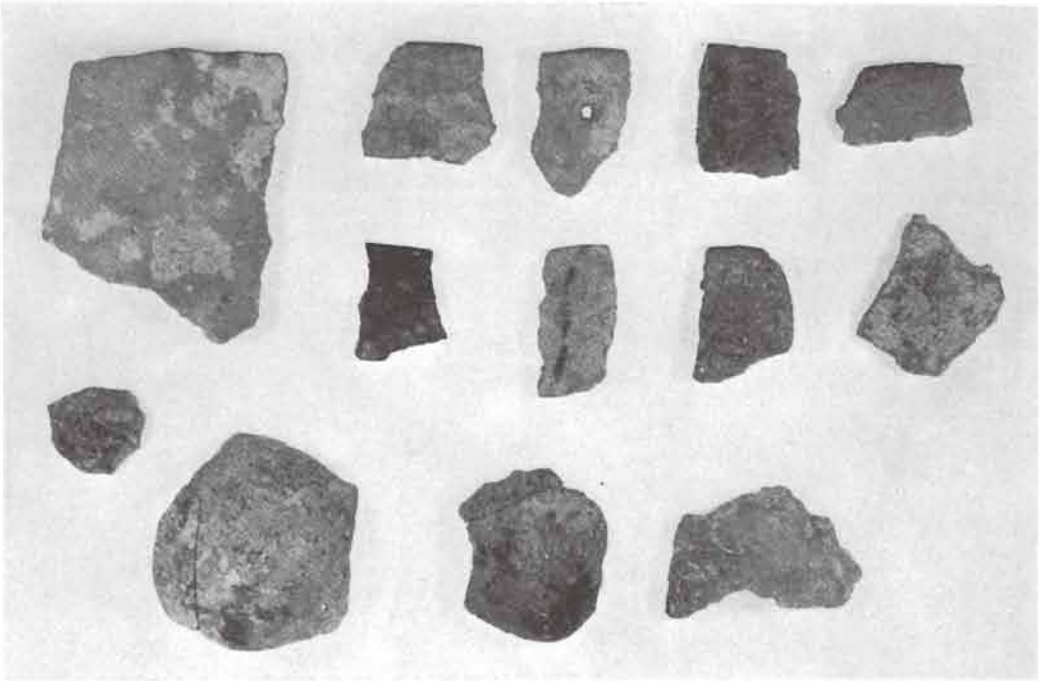
22・23　無文土器の口縁部。共に直行する形態を有する。

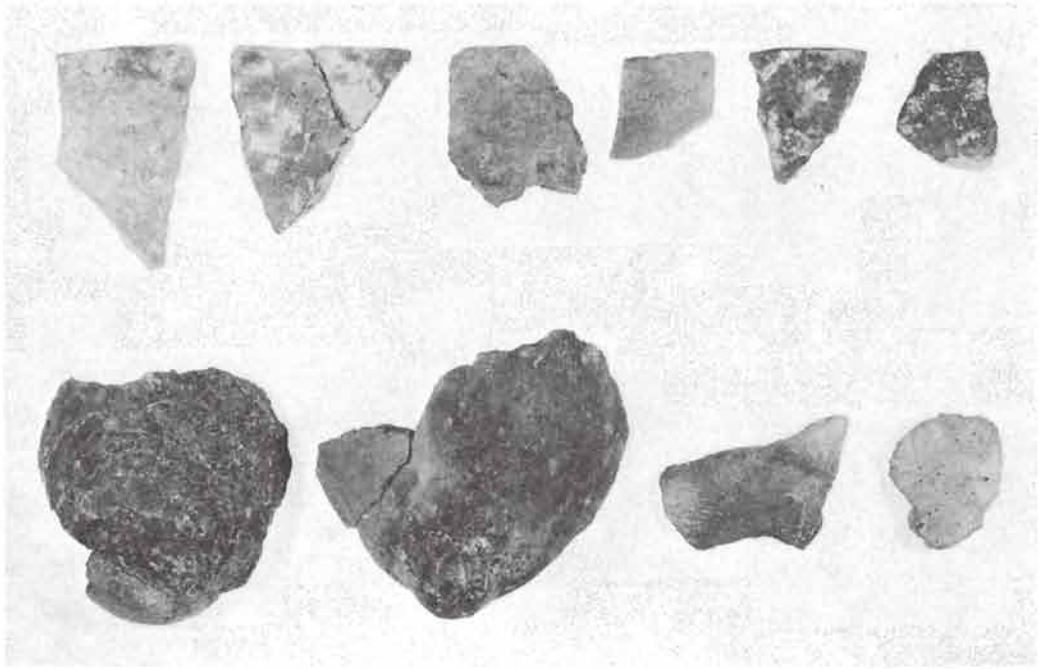
20　底部近くの破片で、尖底になるものと思える。

24　乳房状の尖底。外面に細くてシャープな条痕がみられる。

25　無文の尖底。胴部から底部にかけて器壁の厚さがほとんど変化していない薄手の著しく尖る底部である。

26　粗い条痕を有する尖り底。底部の中央近くで厚さを増しており乳房状になるものと考えられる。





縄文時代早期の土器

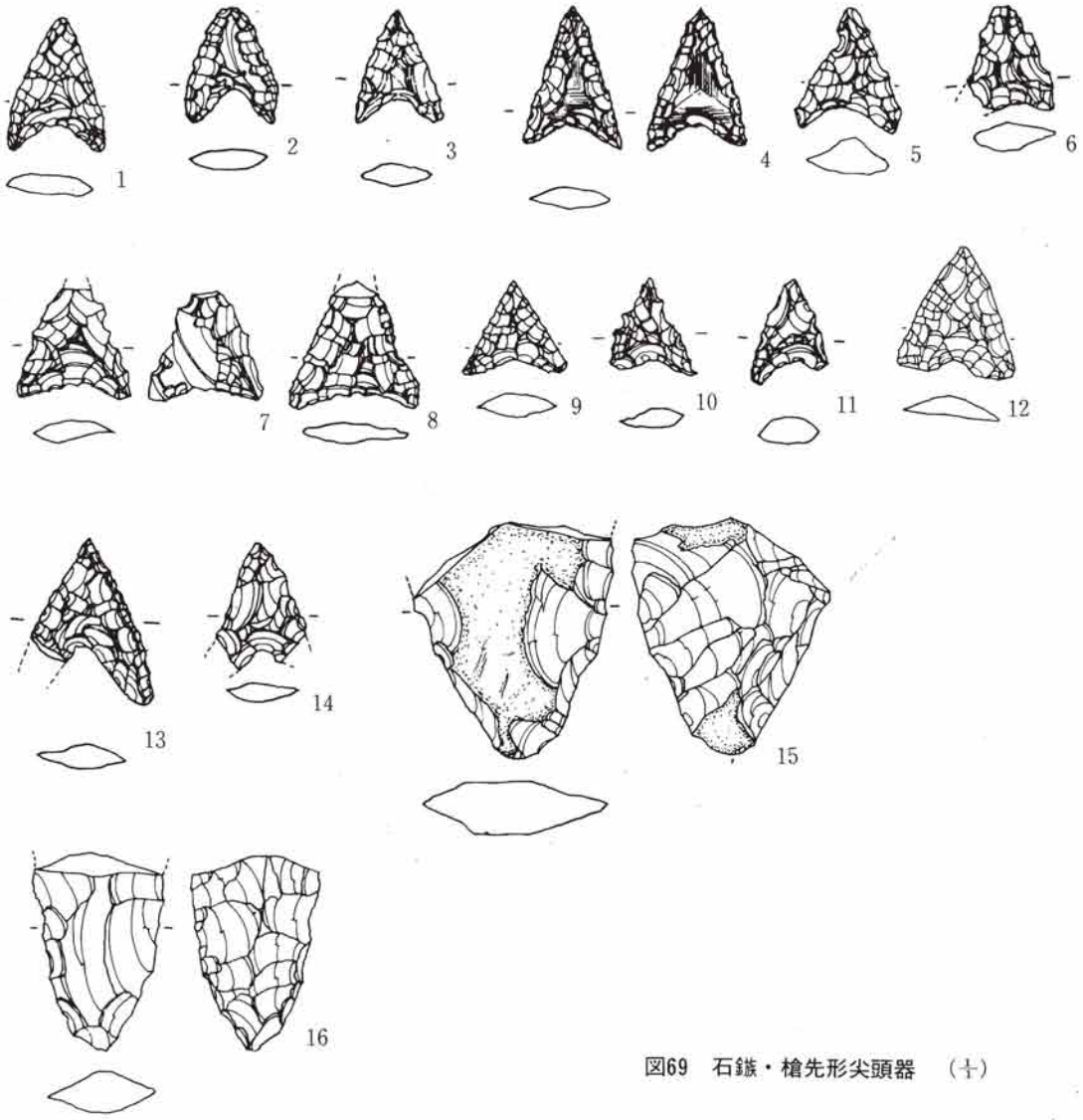


図69　石鏃・槍先形尖頭器　(1/1)

1～14　石鏃

1・2・3・5　基部の抉りが大きな石鏃で、1・2は黒曜石で残りは安山岩質、硅質岩を用いている。重さは0.47g・0.35g・0.30g・0.57gである。

6・7・8　基部の抉りが浅くて両脚が尖る石鏃。6は黒曜石、7・8は共にチャート質の石材である。

9・10・12　基部の抉りが浅く、ほぼ正三角形をした石鏃。9は安山岩質、10・12はチャート質の石材で、重さは0.31g・0.23g・0.74gを量る。

11　小形の石鏃で、石材はチャート質。

13・14　三角形をした抉りの深い基部を有し、石材は共に安山岩質。

4　局部磨製石鏃。サヌカイト質、0.25g。

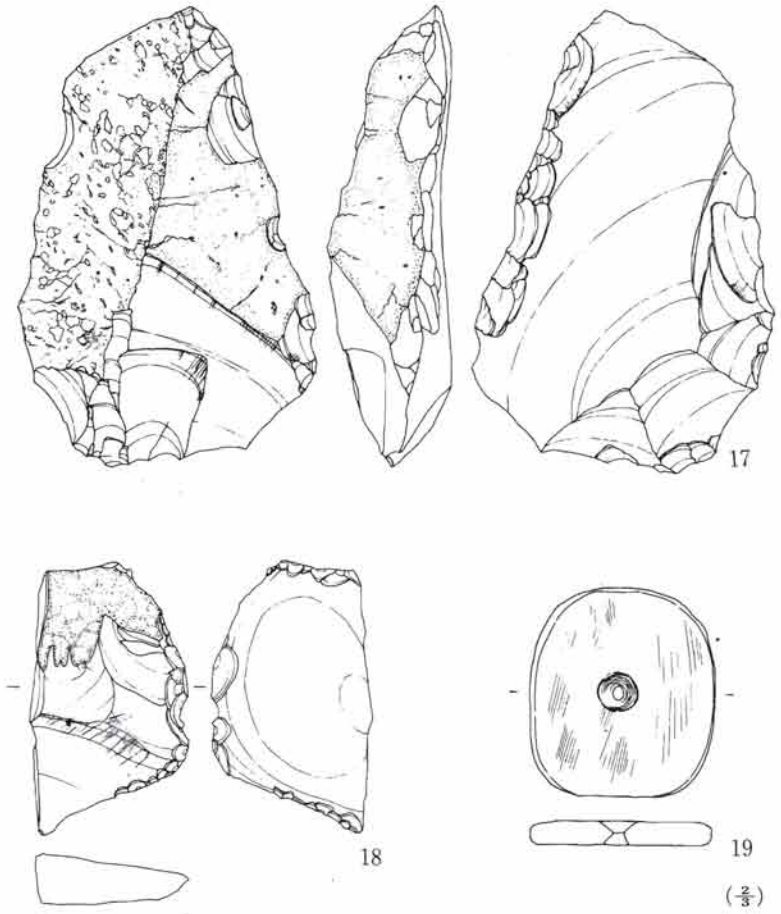


図70　スクレィパー・有孔石製円盤

15・16　槍先形尖頭器

15・16は尖頭器の基部で、それぞれ黒曜石、安山岩質の石材を用いている。

17・18　削器（スクレィパー）

17　頁岩質の大きくて厚味のある剝片を素材に用い、打面と反対側の一側辺に二次加工を施して刃部を形成している。打面も二次加工によってカットしている。

18　不定形な剝片の側辺に沿って小さな二次加工の剝離が施されている。硅質岩。

19　有孔石製円盤

砂岩質の石材を用いて、両面および周辺を研磨によってやや角ばった楕円形に整えており、さらに中央に両面からの穿孔が施されている。穿孔の一個所に両面とも擦痕が観察されることから紐で吊されていたものと判断できる。

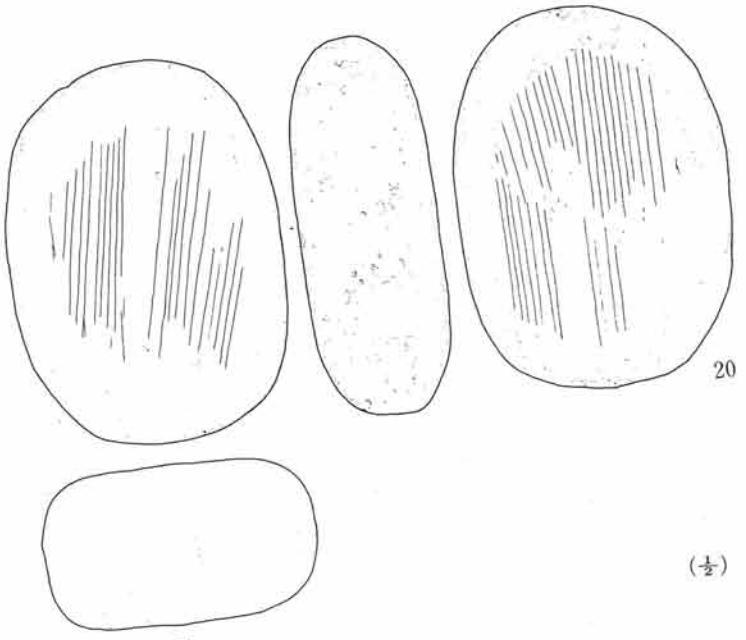
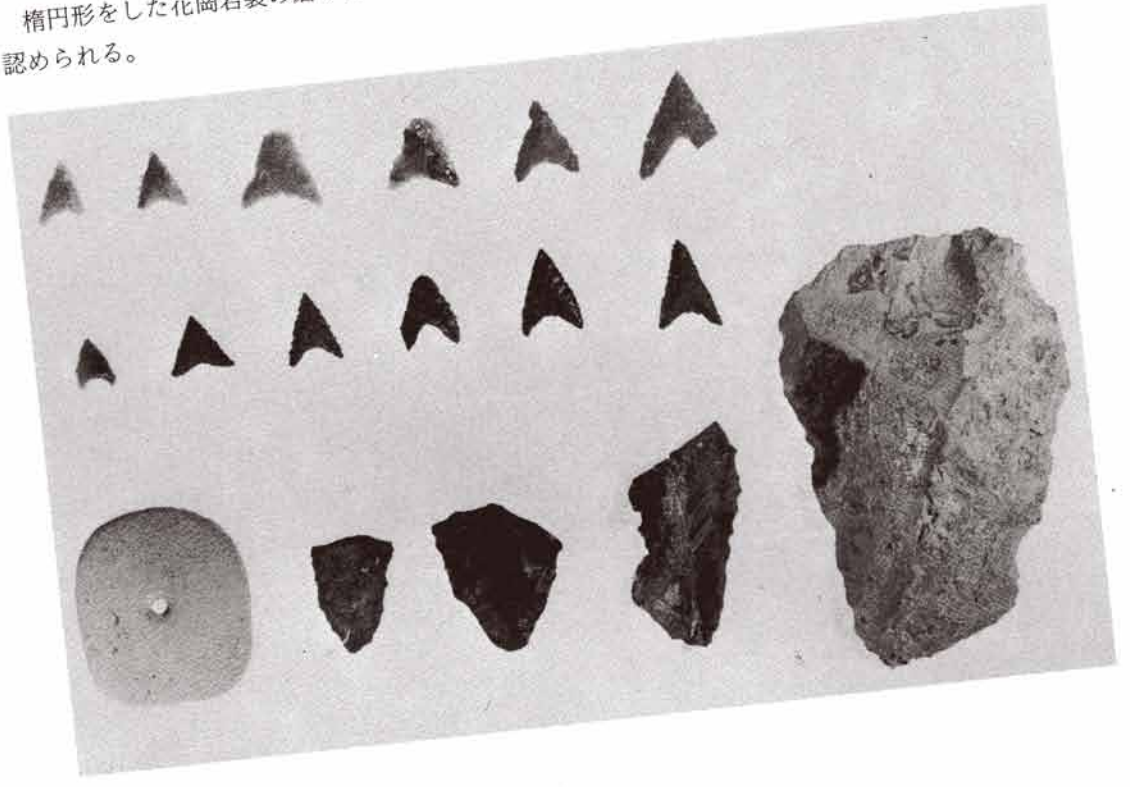


図71　磨り石

20　磨り石

楕円形をした花崗岩製の磨り石で、表裏両面に擦痕が顕著に認められる。



第7文化層

自然層序の第Ⅹ層を中心に、間層であるⅨ層の下面およびⅪ層の上面にかけて遺物の出土が見られる。

文化層の広がりは第6文化層と同様、南側のC・D調査区に限られるが、開口部近くに集中する傾向が窺える。

遺物の量は石器、土器共に少ないが、上・下に間層と判断できる土層が存在することから、ある時点での限られた遺物を包含していることになろう。

遺構については明瞭にし得なかった。

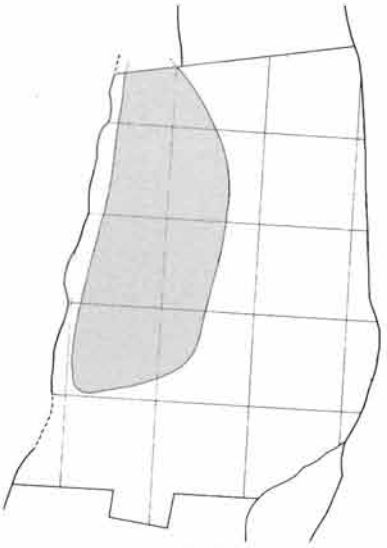
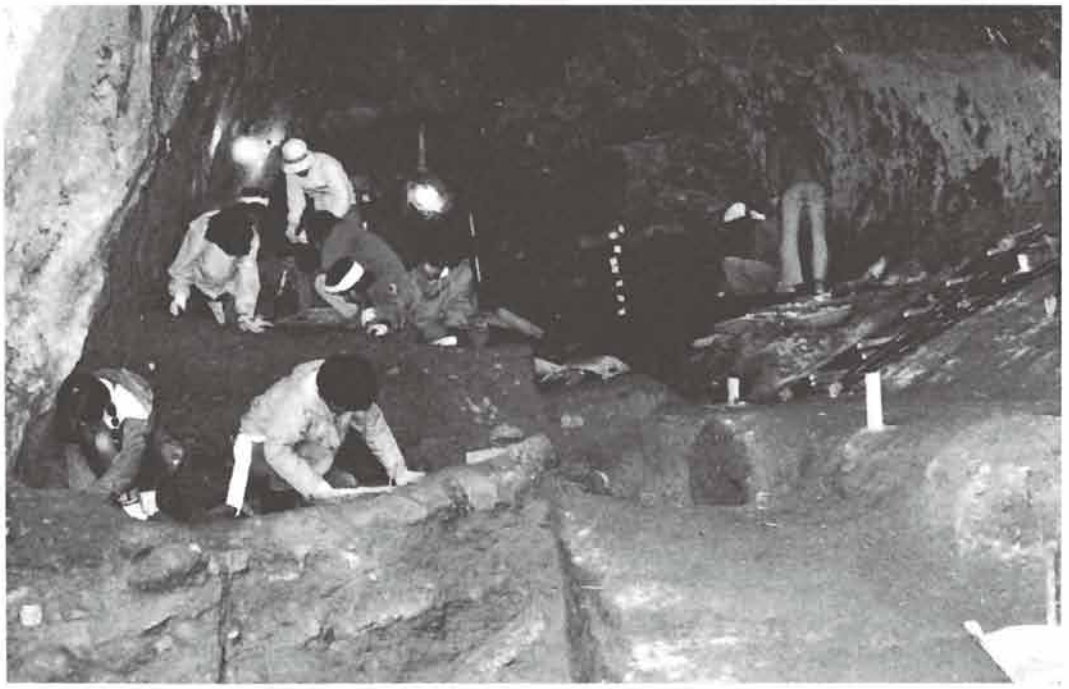


図72　文化層の広がり



洞穴内の発掘状況

遺　物

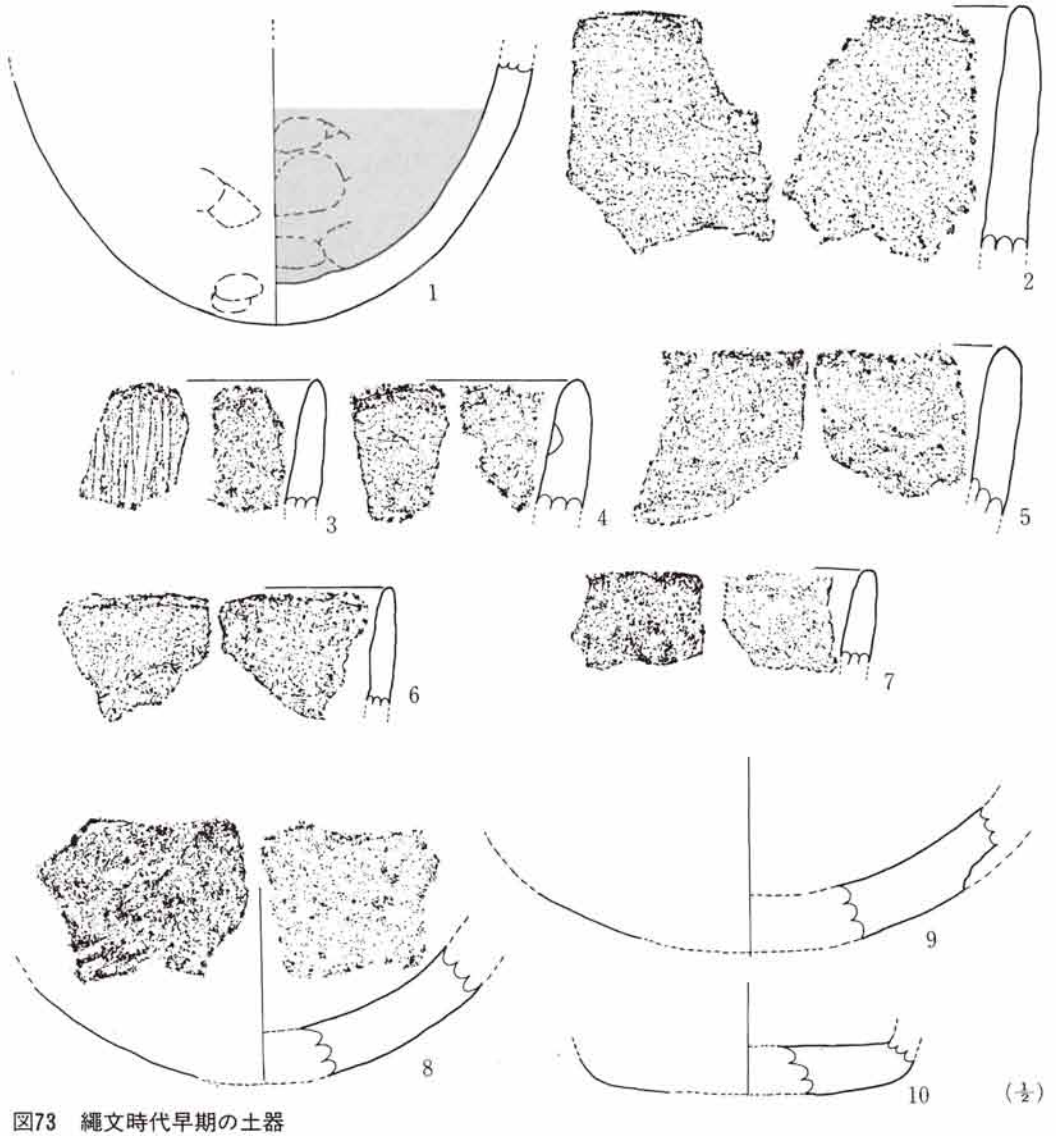


図73　縄文時代早期の土器

1　無文丸底の土器で内外面に指圧の痕跡が観察される。この土器の内面には赤色顔料が付着している。

8・9　無文土器の底部の破片で、中心部を欠損しているが1と同様な丸底を呈するものと判断できる。

10　底部の破片で、上記3点とは異なり平底になる。

2・4・5　いずれも無文でやや厚手の口縁部の破片であり、ほぼ直行する形態となる。8・9などの底部の口縁部とみなされる。

6・7　やはり無文で直行する口縁部であるが、器壁の厚さで、異なっている。

3　薄手の口縁部破片で、外面に縦方向のシャープな条痕が観察される。

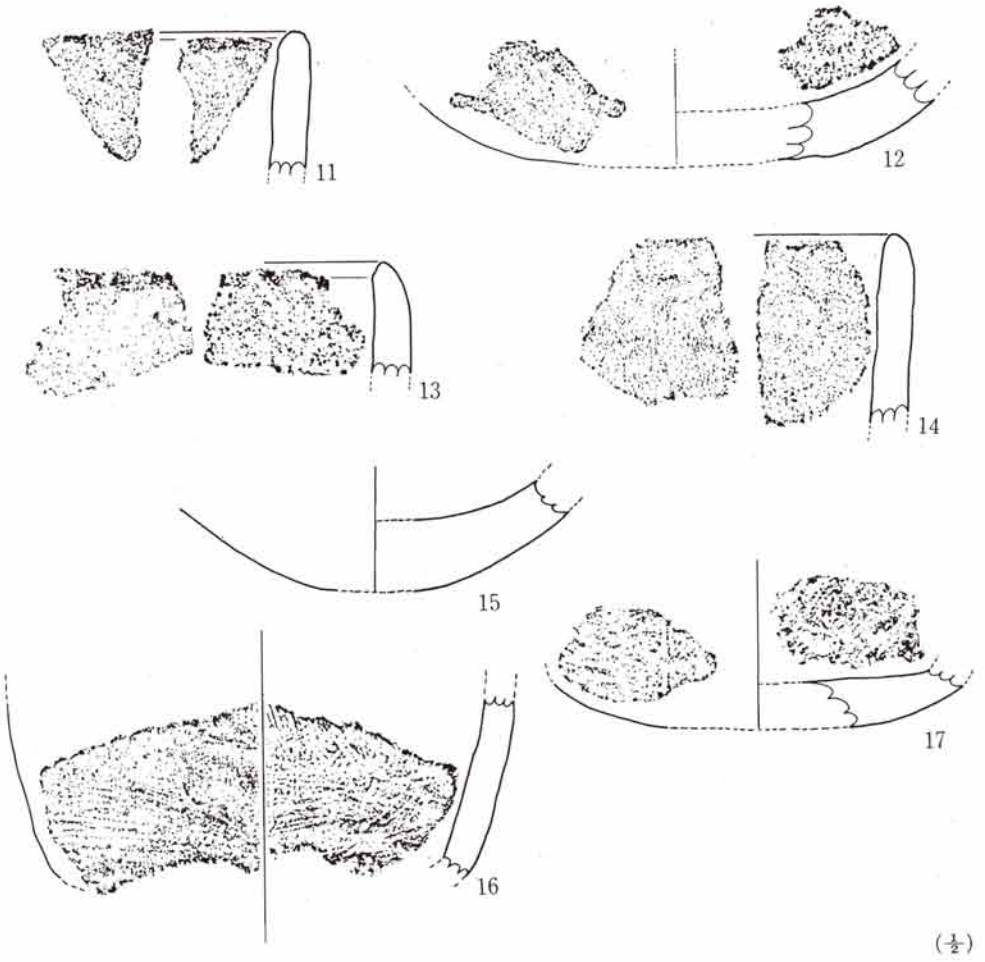


図74　縄文時代早期の土器

11・14　直行する形態をとる口縁部の破片。11は無文であるが、14は外面に不規則な細い条痕がみられる。

13　やや内湾ぎみの口縁部で、口唇は内面に向かった傾斜をしている。

12・17　底部の一部で平底状になると考えられる。12は無文で、17は外面に条痕がみえる。

15　平底に近い丸底を呈する無文土器。

16　内、外面に条痕を有する底部近くの土器片。平底に近い丸底ないし平底になるものと推測される。

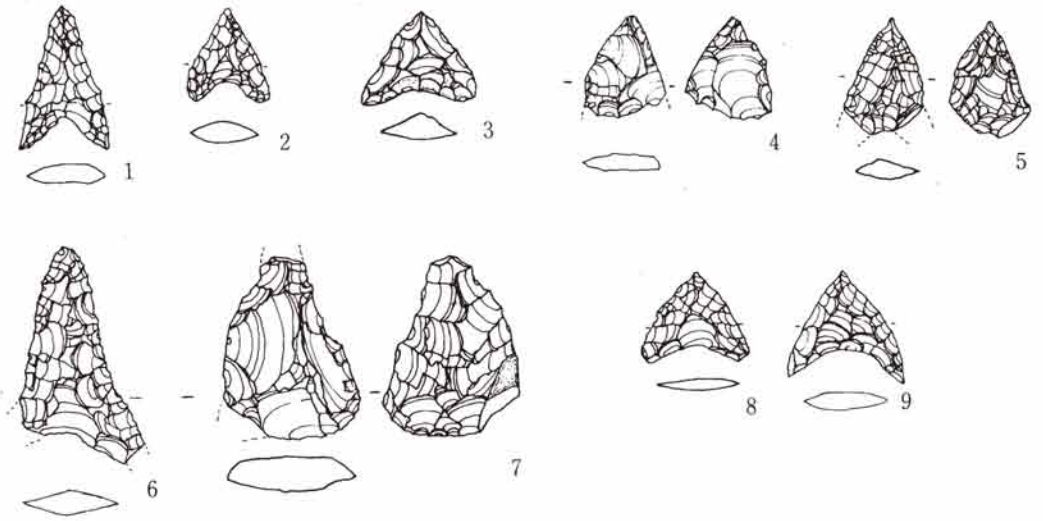
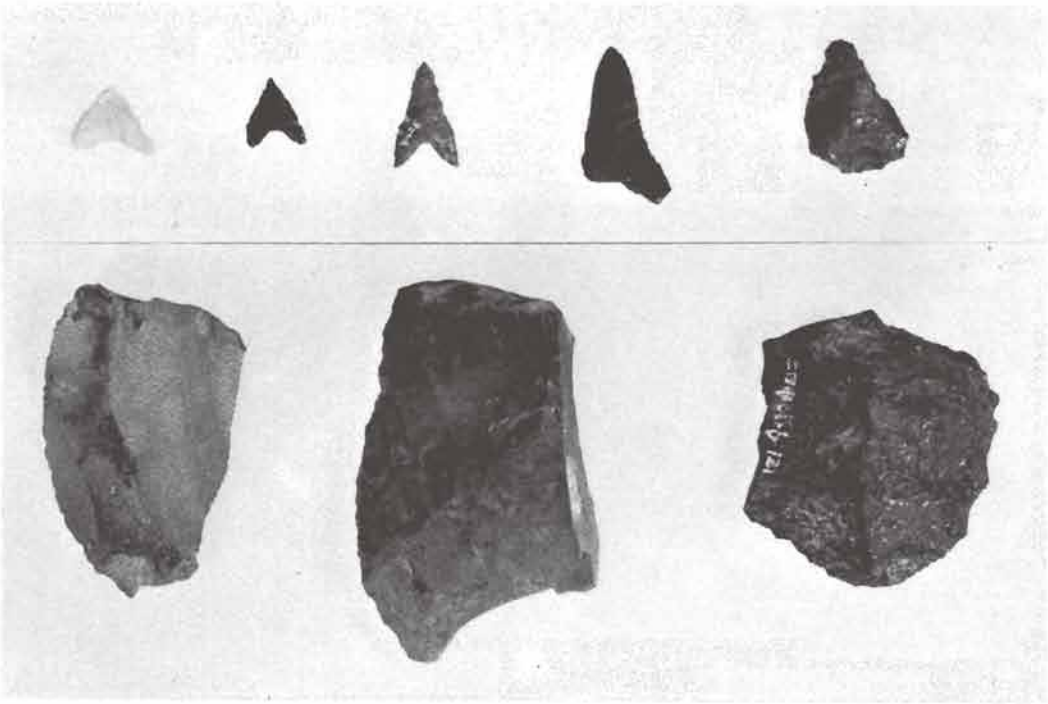


図75　石鏃



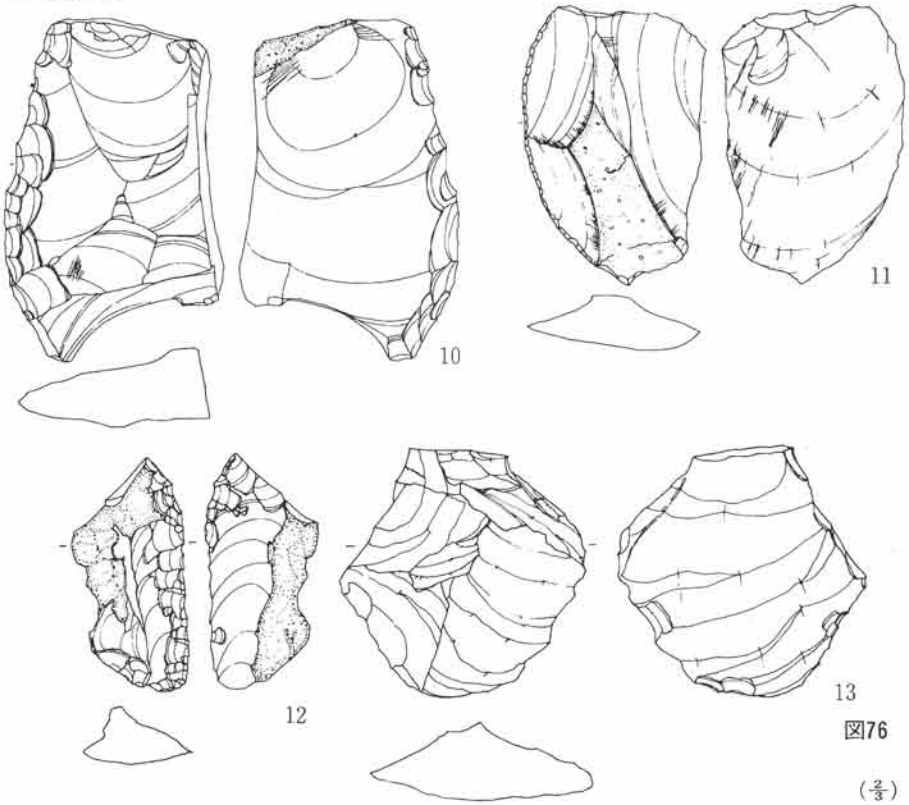
1～9　石鏃

1・2　基部の抉りが深い石鏃で、1は硅質岩、0.45g。2は黒曜石、0.24g。

3・8・9　浅くて大きな抉りを有する小形の石鏃で、重さはそれぞれ0.41g・0.29g・0.35gである。石材は3は頁岩質、8・9は安山岩質。

4・5・6　脚部を欠損している。石材はそれぞれ姫島産黒曜石・メノウ・安山岩質である。

7　基部に抉りをもたない大形の石鏃で、硅質岩製。



10・12　スクレィパー、硅質岩製。

11　使用痕のある剝片、硅質岩。

13　二次加工のある剝片、安山岩質。

図76　スクレィパー・他

（$\frac{2}{3}$）

遺物の出土状況

第8文化層

自然層序の第Ⅻ層を中心に上下の土層の下部および上部において遺物の包含が認められる。

文化層の広がりはやはり洞穴の南側に限られており、しかもC・D－4グリッドから7グリッドへと細長くのびている。

遺物は多く、特に土器の量が顕著で、遺存状態も良好である。

遺構は明確な形で把握されなかったが焼土・灰などが小範囲で集中する個所がみられた。

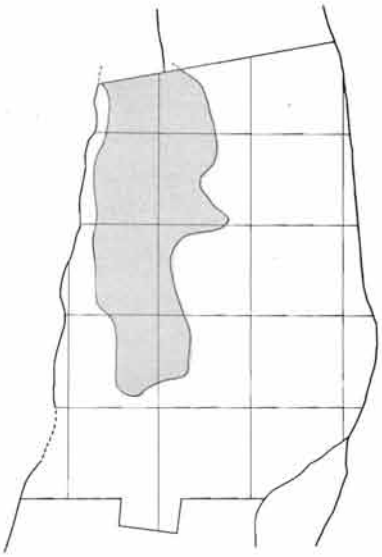
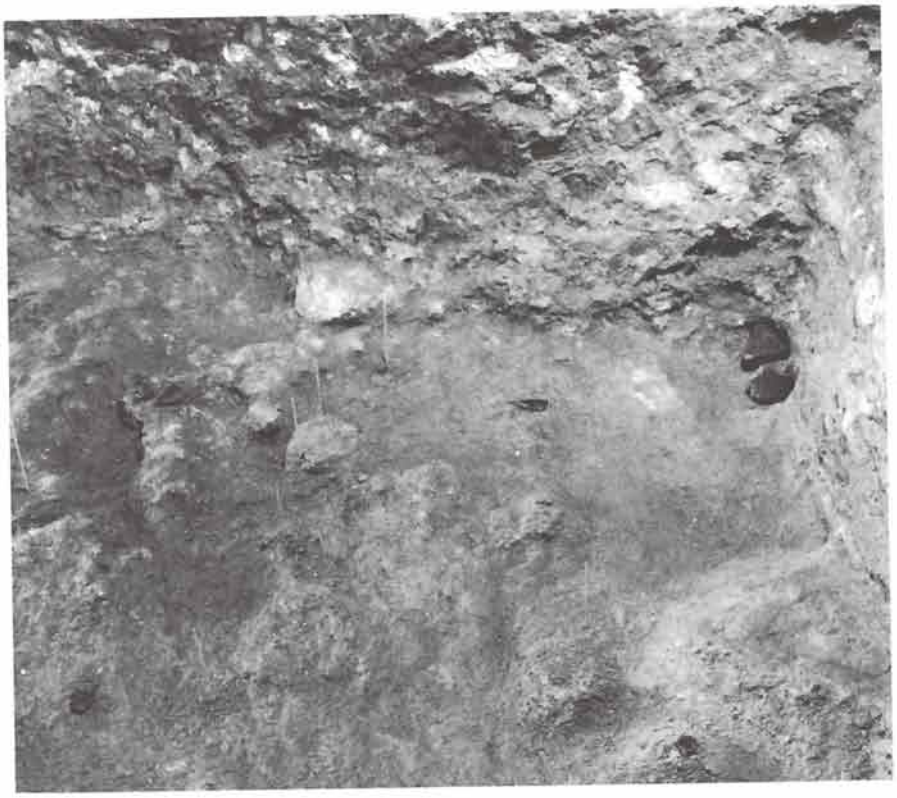


図77　文化層の広がり



槍先形尖頭器
出土状況

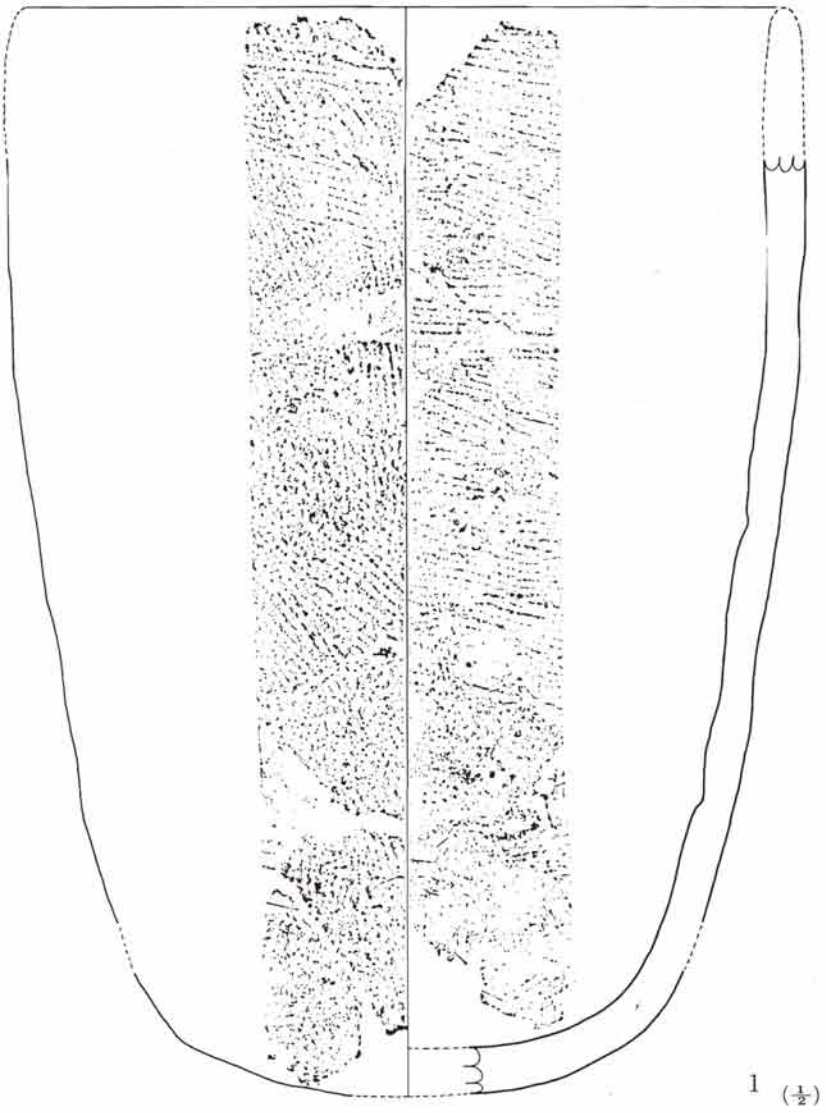
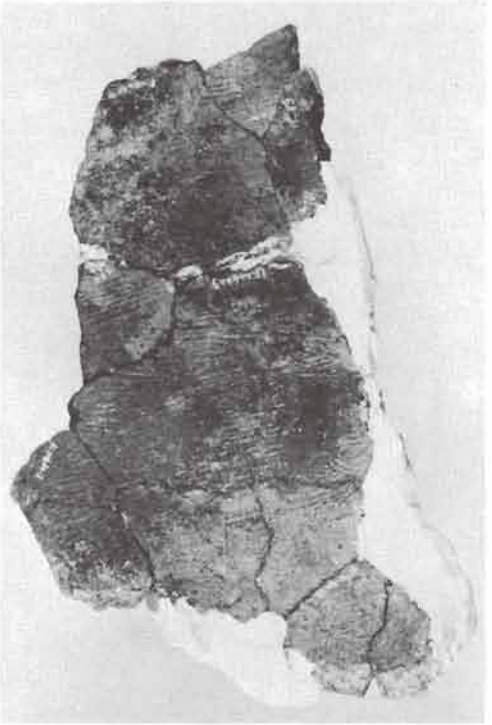
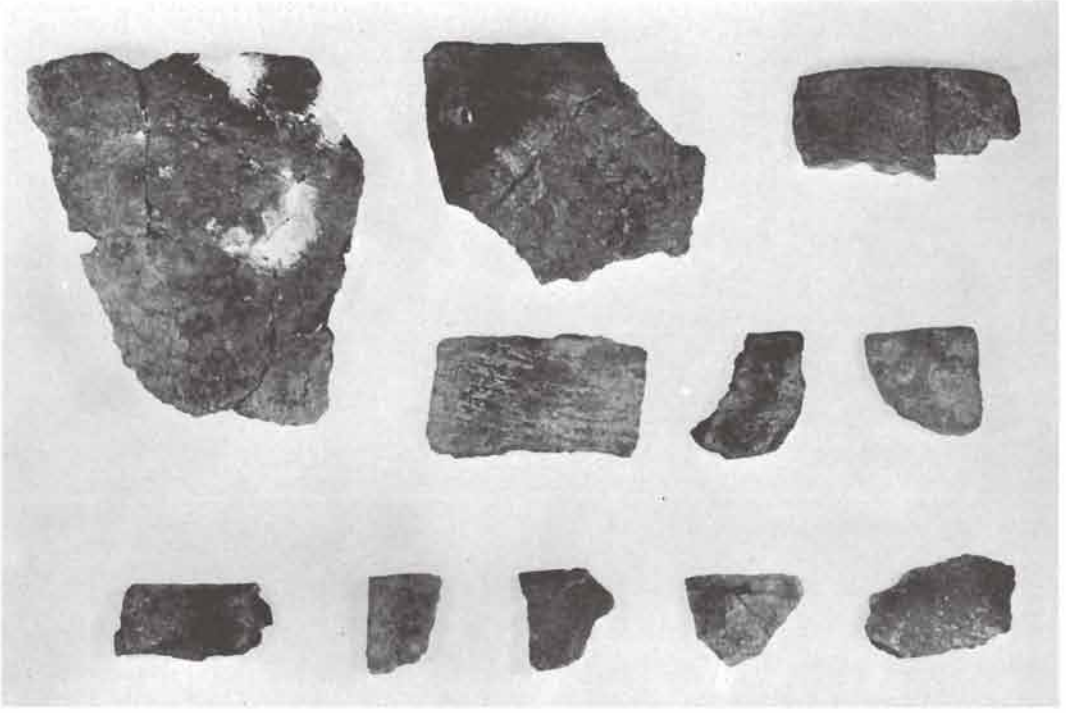


図78　縄文時代早期の土器

1　条痕文の平底に近い丸底をした深鉢形土器。口縁部の一部と底部の中央を欠損しているが全体の器形については十分に知ることができる。内外の全面に細い条痕を施しており、外面では縦ないし斜方向に、内面はほぼ横方向である。内面の胴部および底部近くに指圧痕が観察される。





縄文時代早期の土器

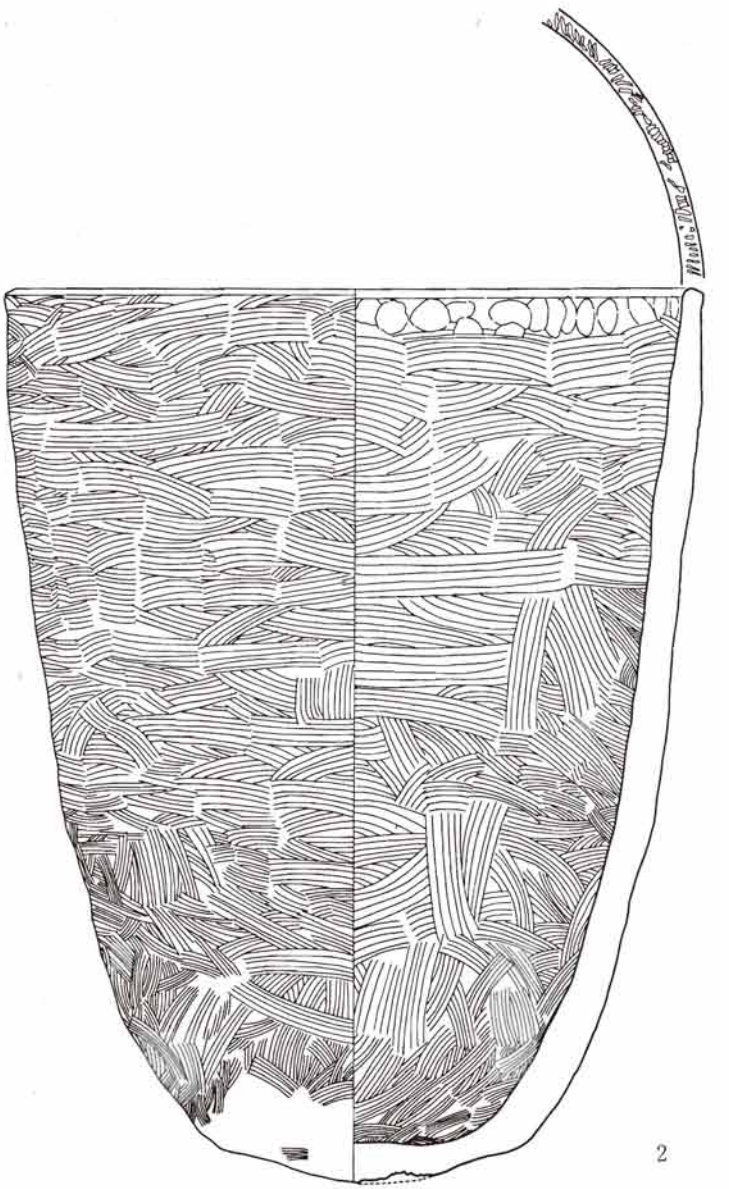


図79　縄文時代早期の土器

2　条痕文の丸底深鉢形土器。口縁部がやや外反する円筒形土器で、底部は平底に近い丸底を呈する。器壁の内外面は５～６本を単位とする細くてシャープな条痕によって埋めつくされている。条痕は口縁部から胴部にかけては横方向を主体に、底部よりではほぼ縦方向に施されている。内面は条痕の他、指によるナデと指圧が観察され、特に口縁部直下は指圧による成形が顕著である。口唇部に不規則な刻みが施されている。

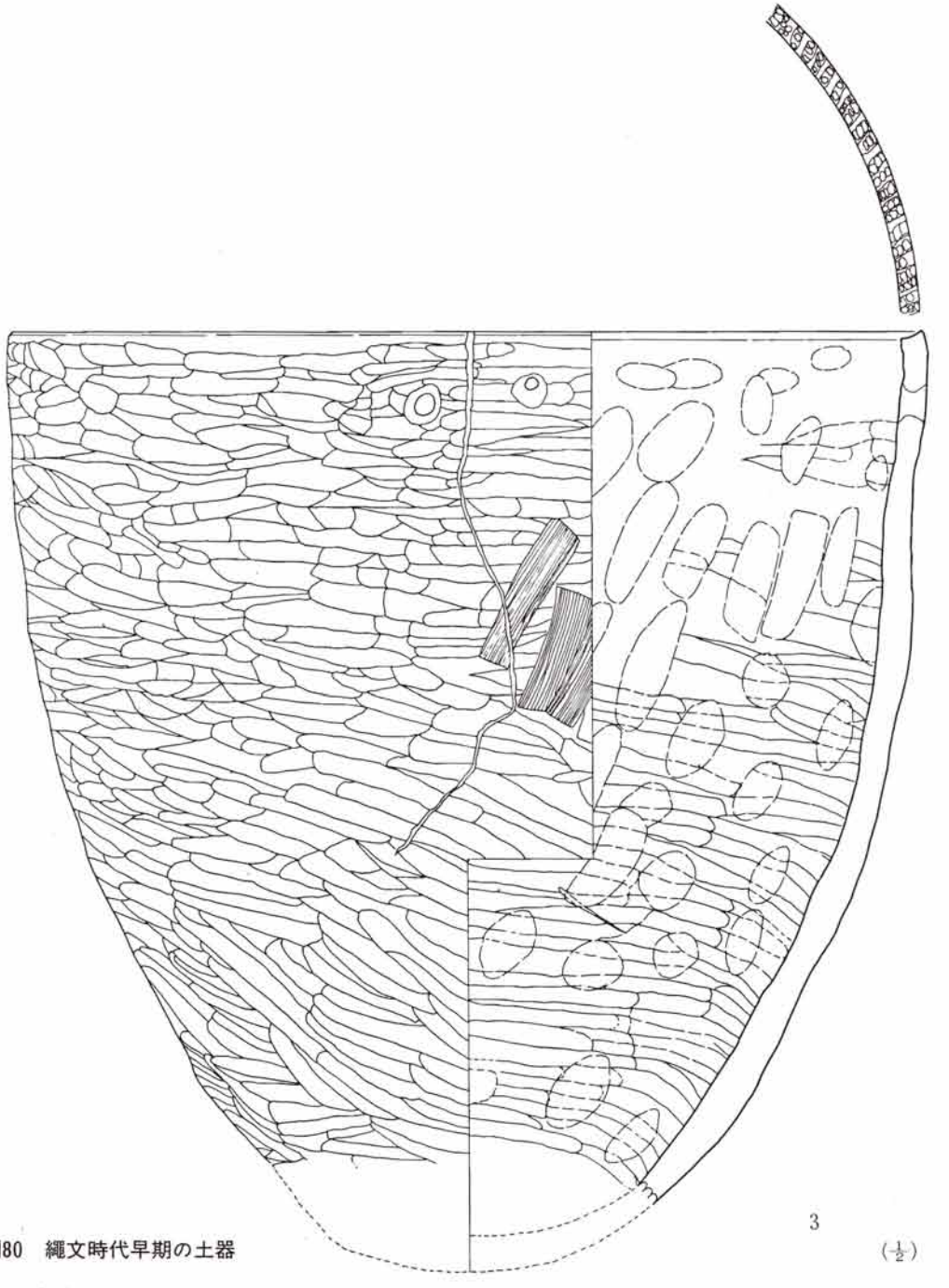
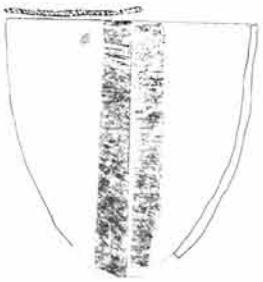
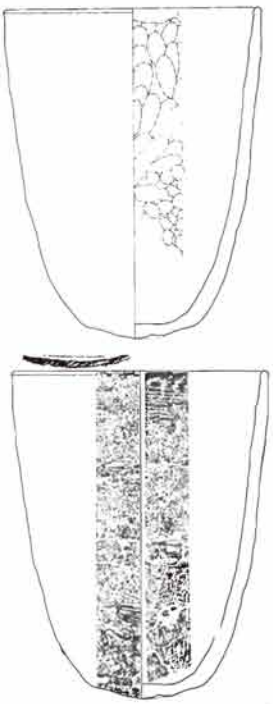


図80　縄文時代早期の土器

3　条痕文の丸底深鉢形土器。全体的な器形は口縁部に向かって開いた単純な深鉢形を呈し、底部は欠損しているが丸底と考えて大過ないであろう。外面全体に5㎜前後の幅で、2～4㎝の長さを一単位とするナデによる調整が施されている。また内面には指による指圧、ナデの痕跡が観察できる。口唇部に3個を単位とする刻みが巡っている。口縁部に補修孔が施されている。





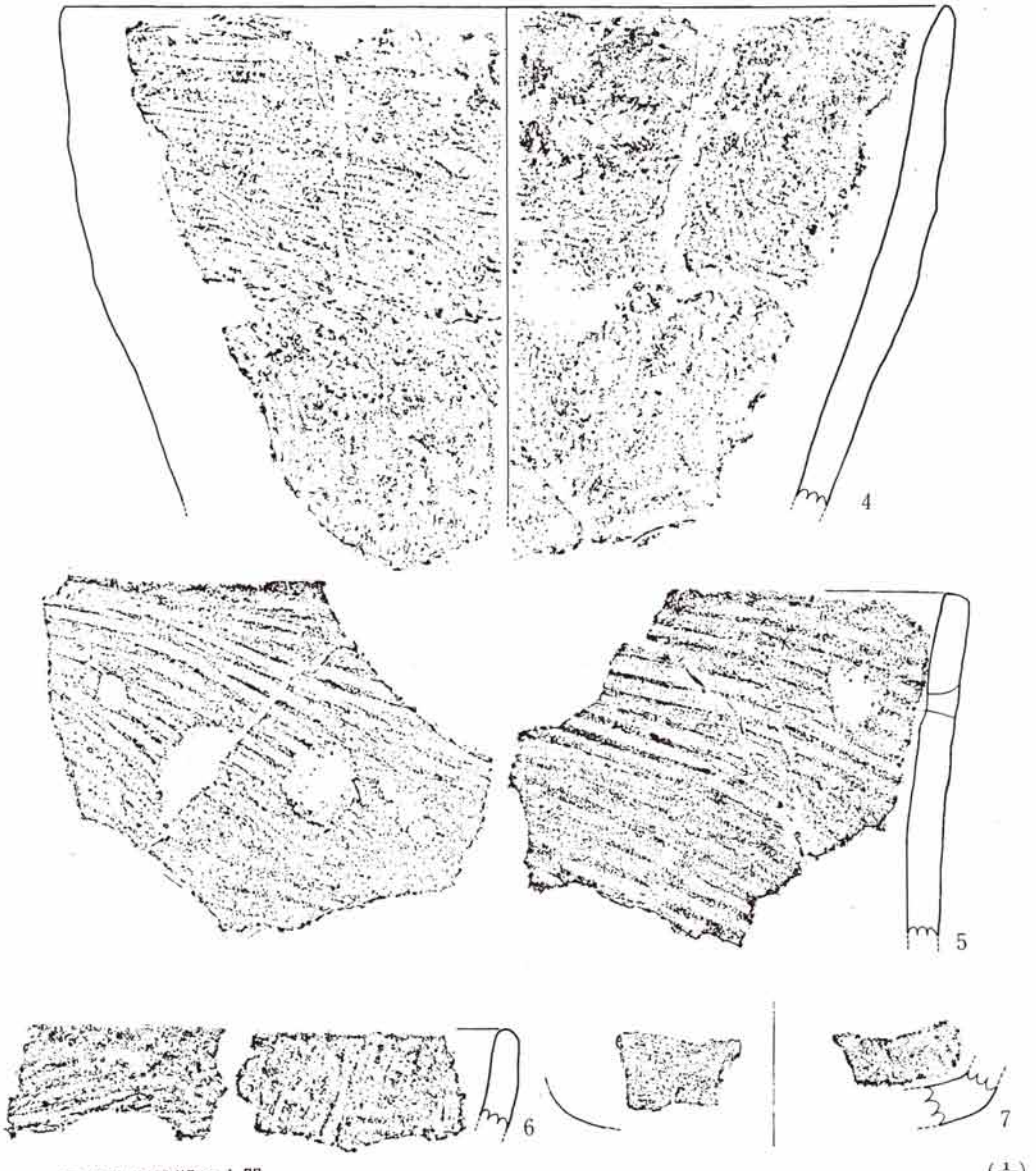


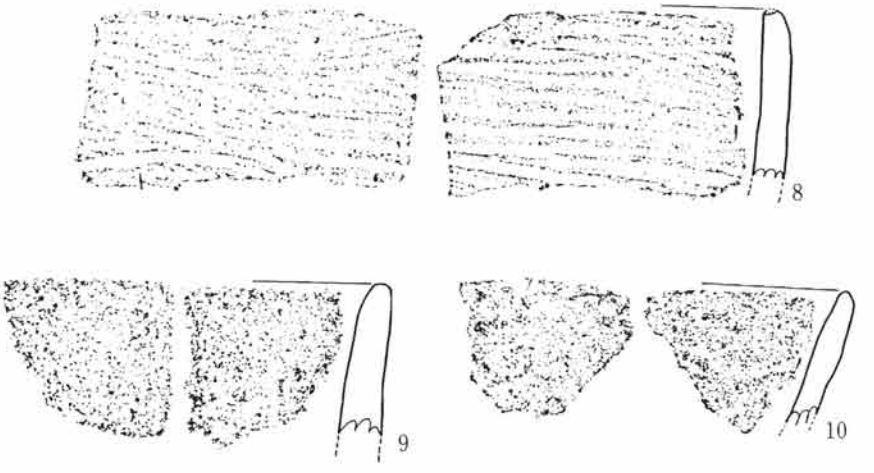
図81　縄文時代早期の土器　(½)

4　条痕文を有し外反する口縁部から胴部にかけての破片で、底部を欠損しているが丸底になる鉢形土器と判断される。条痕の方向は横方向を主体にし、胴部近くでは縦方向である。

5　幅の広い明瞭な条痕が内、外面共に斜め方向に施されている。口縁部近くに穿孔がみられる。

6　直行する口縁部で、内外に粗い条痕が施されている。

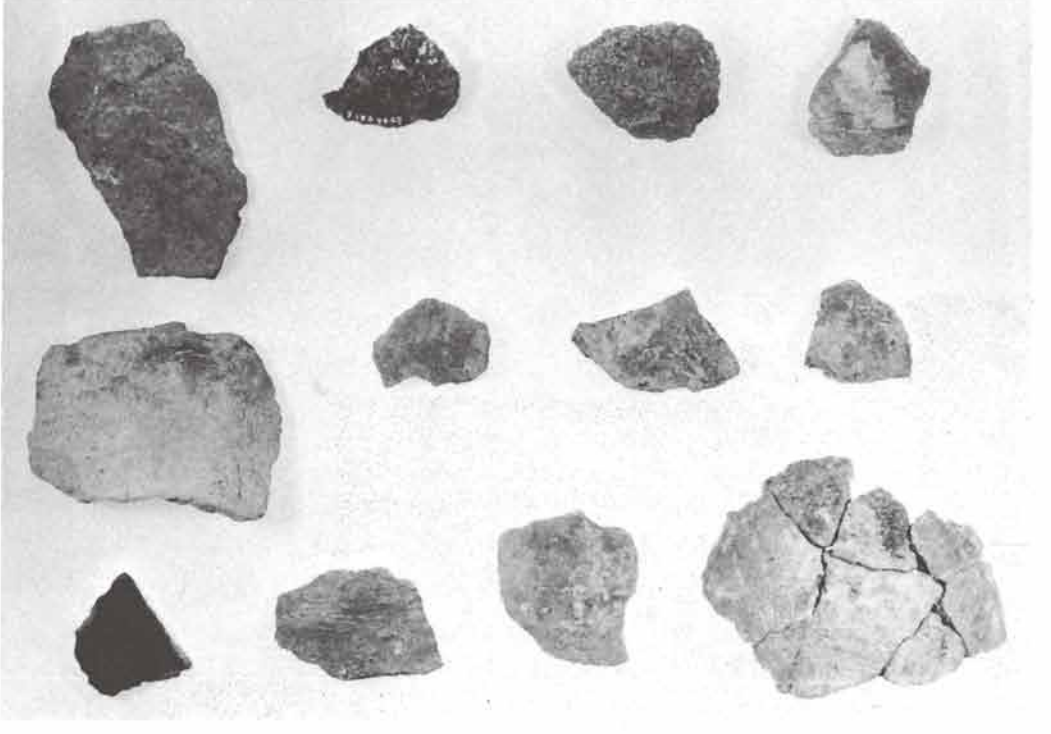
7　無文の底部の破片で、平底になると推測される。

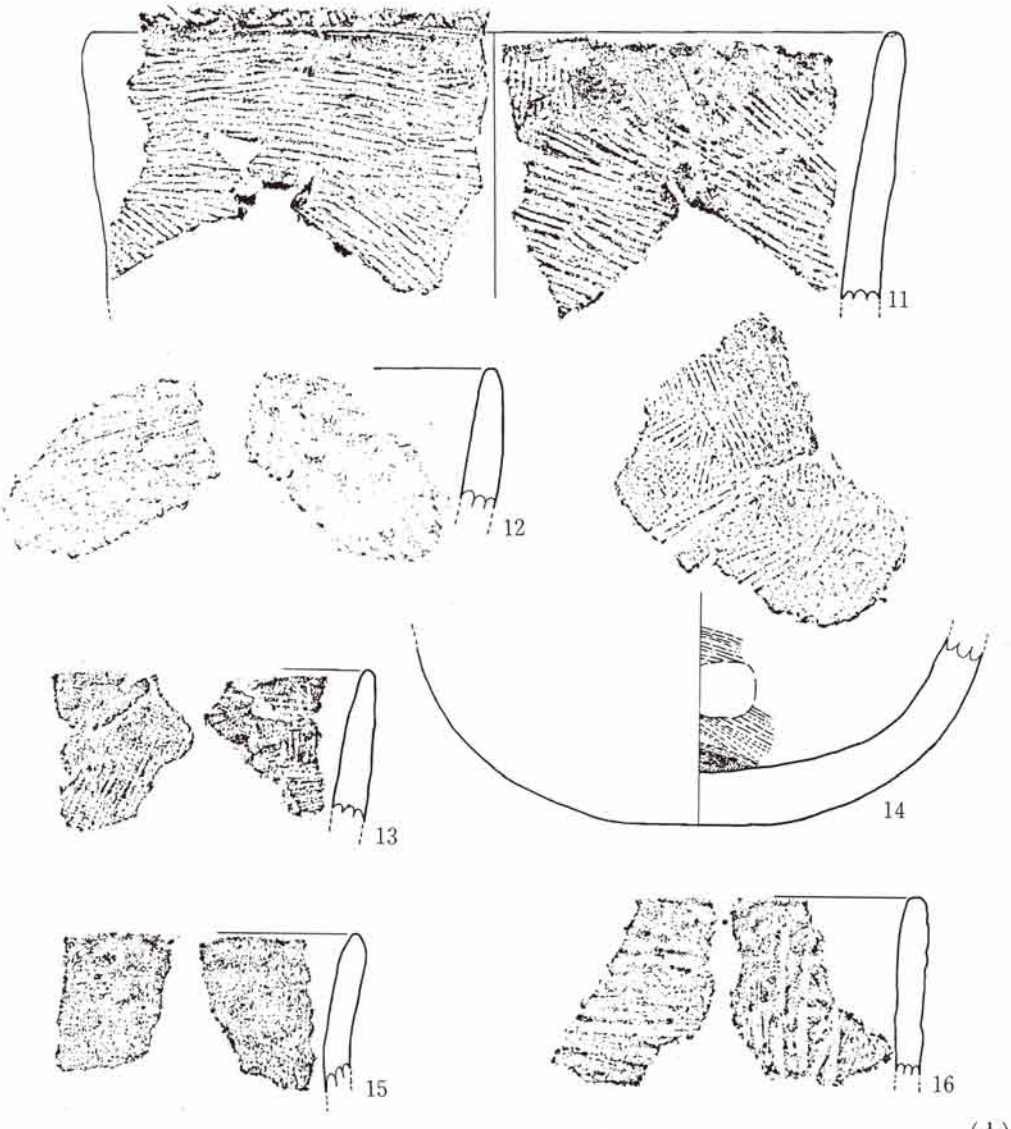


(1/2)

図82　縄文時代早期の土器

8　内外面に横方向の大きめの条痕文が施された口縁部で、器形は直行している。
9　無文のやや厚手の直行する口縁部。
10　無文薄手の外反する口縁部。





(1/2)

図83　縄文時代早期の土器

11　内外面に明瞭な条痕文が施された口縁部。条痕の方向は外面では横、内面は斜めの方向に走っている。口唇部に刻みを有する。

12　粗い条痕を有する口縁部。

13　細くてシャープな条痕がやや不規則に施文されている。薄手の口縁部で直行する。

15　無文薄手の口縁部で、やや外反している。

16　粗い条痕の口縁部で、内、外面では条痕の方向が異なっている。

14　細い条痕を有する大形の丸い底部で、恐らく11などの口縁部と関連するものと思える。

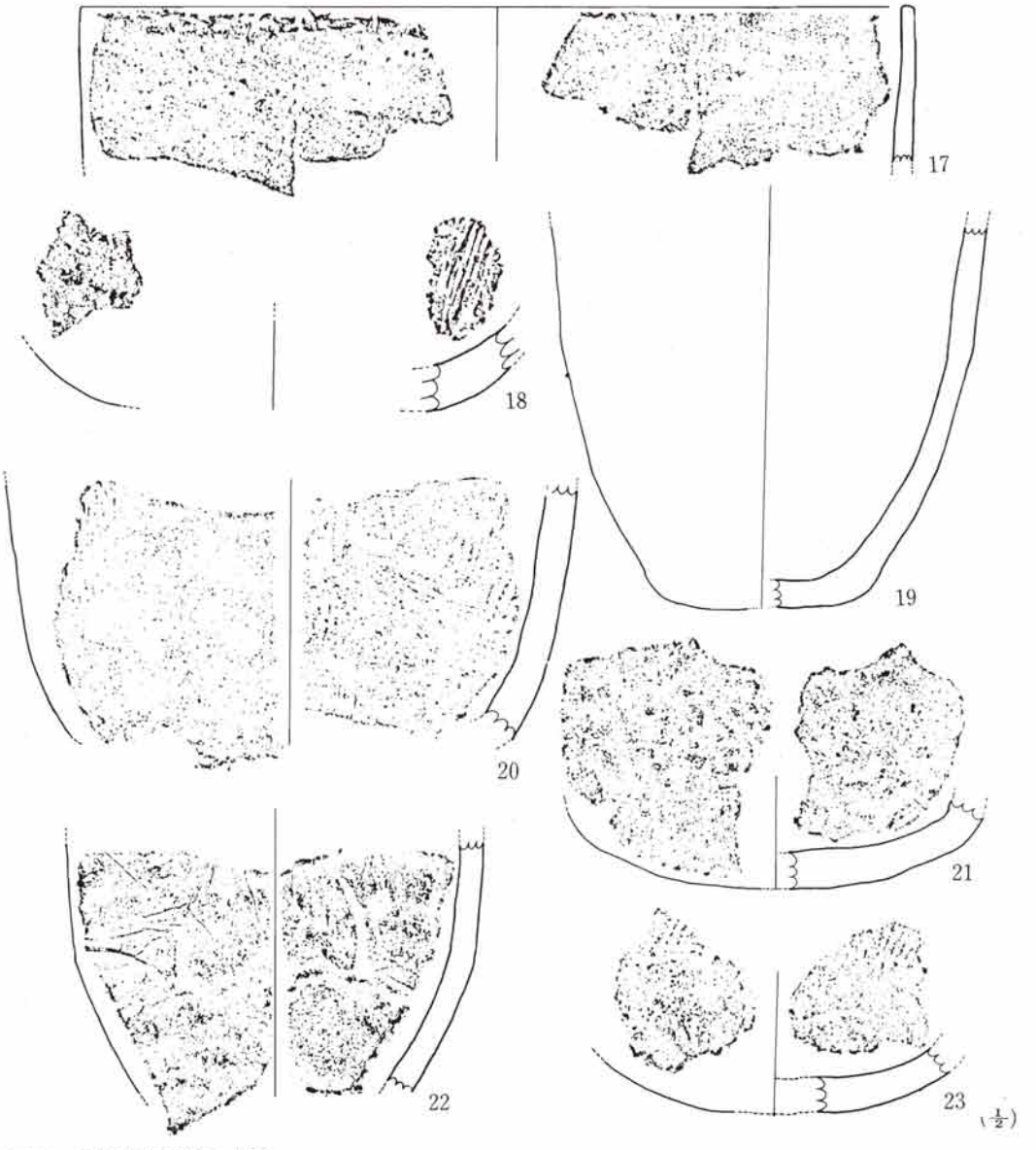


図84　縄文時代早期の土器

17　極めて薄手の直行する口縁部の破片。外面にあまり明瞭でない斜め方向の条痕が施され、内面に板目状の調整がみられる。

18　内面にシャープな条痕を有する底部の破片で、平底に近い丸底になるものと考えられる。

19　無文の比較的小形の胴部から底部にかけての土器で、底は平底になる。

20　内外面に粗い条痕を有する底部近くの破片である。現存の形から平底に近い丸底が予想される。

22　底部近くの小形の土器で、内外面に板状の器具によるナデ調整がみられる。

21・23　共に平底に近い丸底を呈する土器であり、23は内外に粗い条痕を有する。

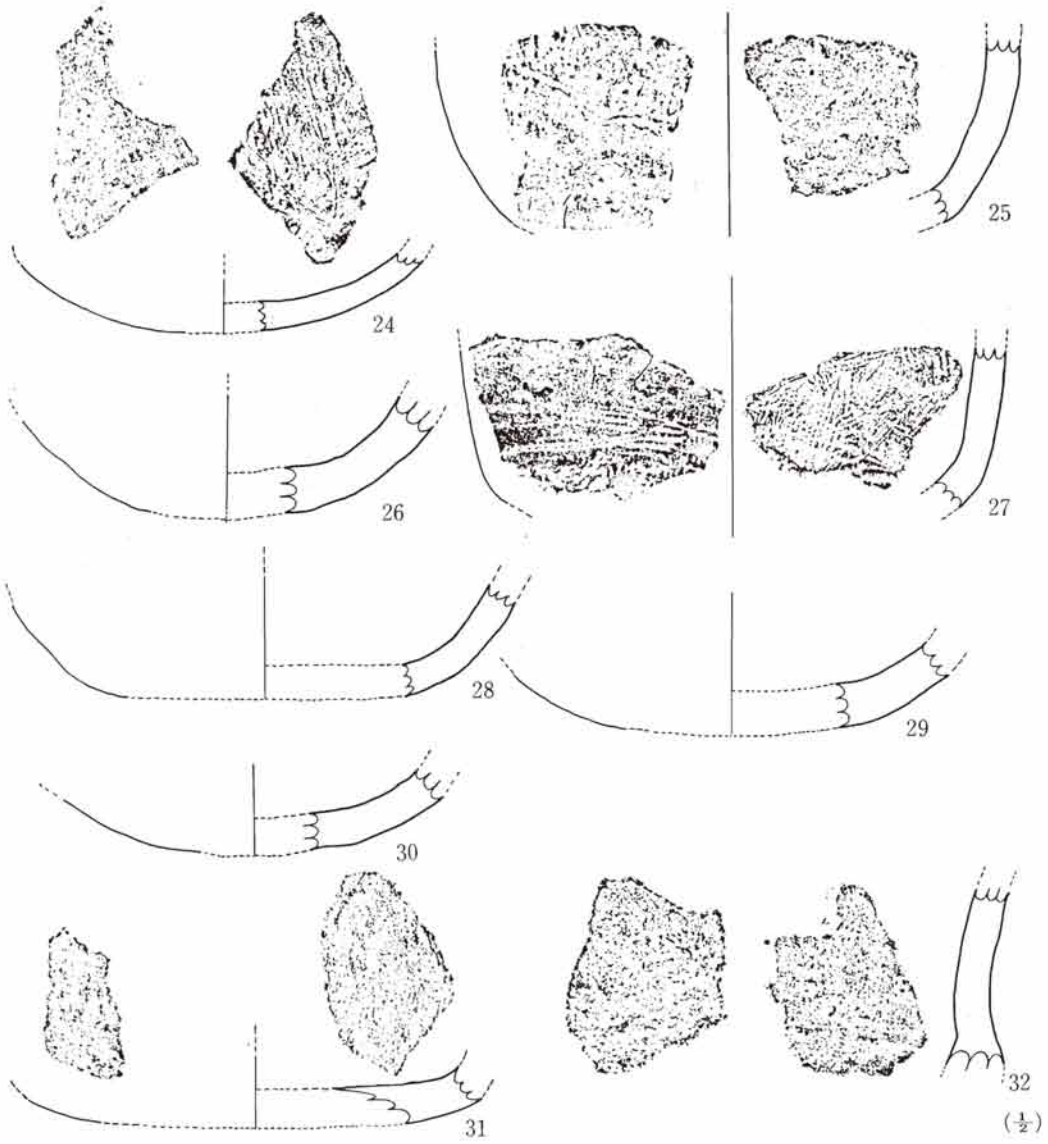


図85　縄文時代早期の土器

24　条痕文の底部で平底に近い丸底である。

26・28～31　いずれも底部の一部であり、平底に近い丸底になるものと判断できる。

25・27・32　胴部から底部の一部にかけての破片で、その形態から先にあげた底部に続くものと考えられる。27は内外面に条痕がみられる。

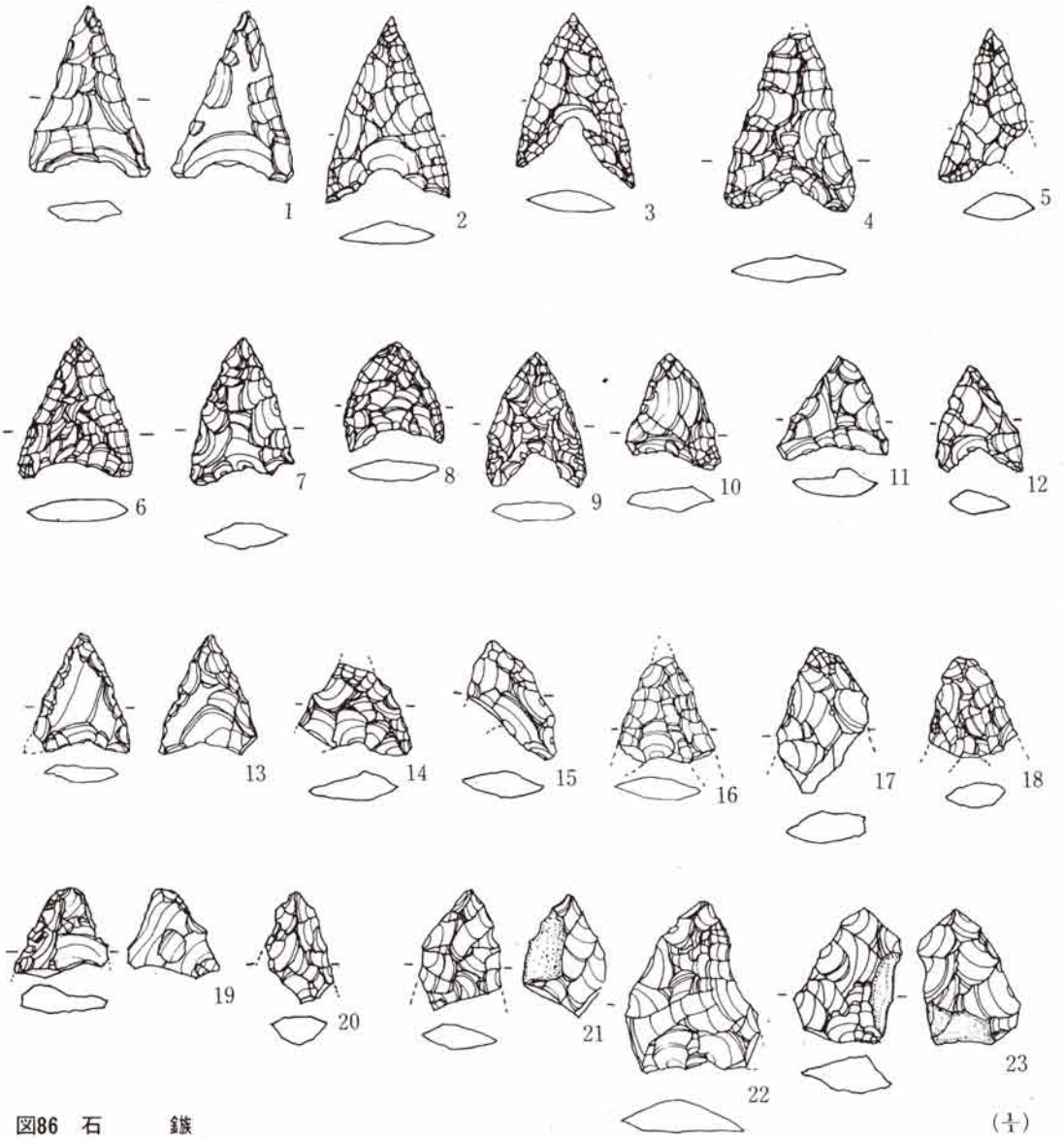


図86　石　　鏃　　(1/1)

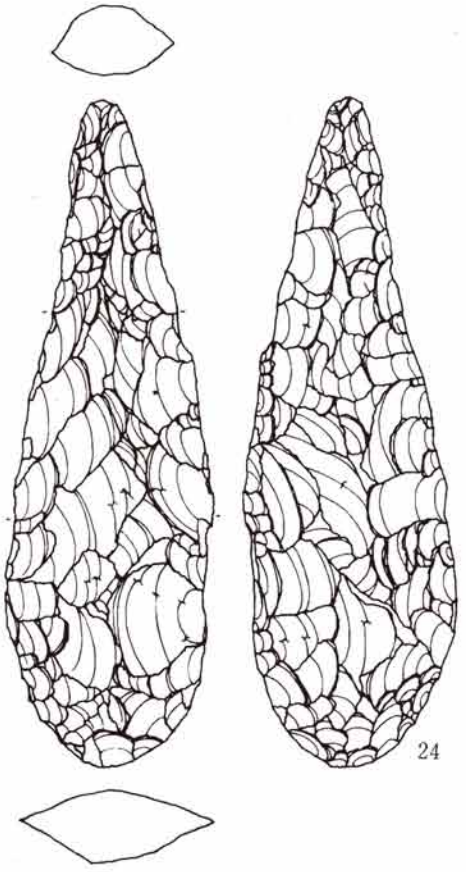
1～23　石鏃

1・6～8・11・13　基部の抉りが比較的浅いもので、脚部は尖る傾向がみられる。1は0.49g、6は0.70g、7は0.71g、8は0.43g、11は0.48gを量る。

2・3・9・10・12　基部に深い抉りを有し、両脚の末端が鋭く尖る。2は0.95g、3は0.76g、9は0.28g、10は0.43g、12は0.44gである。

4・5　抉りは深いが脚部の末端は丸味を呈する。

1・2・13は安山岩質。4・6・9・10・15・16・18～22は黒曜石。11・12は姫島産黒曜石。7・17・23は硅質岩。3・5・8はメノウ。14はチャート質。



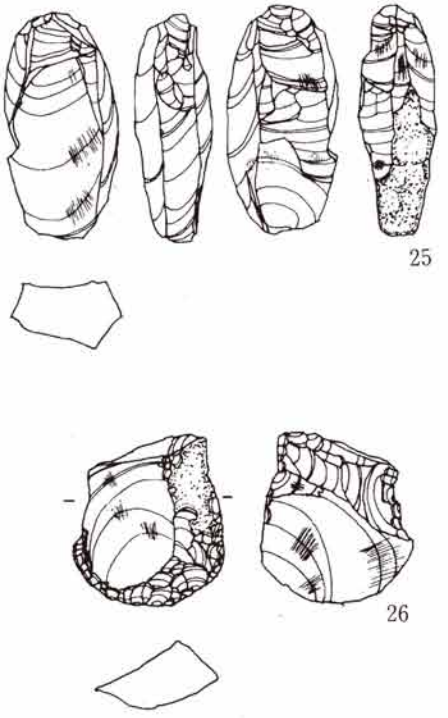
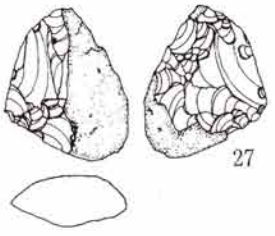
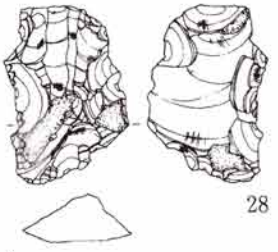


図87　槍先形尖頭器・楔形石器・掻器　（$\frac{1}{1}$）





（$\frac{2}{3}$）

図88　スクレィパー

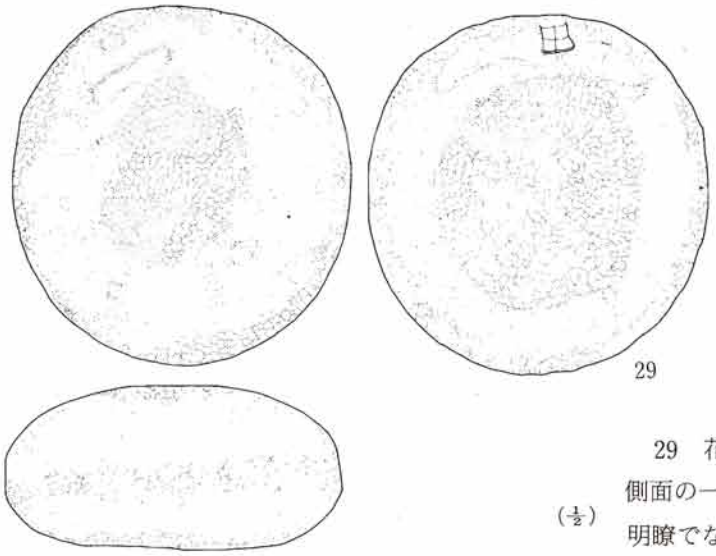
24　槍先形尖頭器。先端部が細く基部よりで太くなり、末端は丸味をおびている。加工は表裏全面に施されている。サヌカイト質の石材を用いている。重さは 23.01g。

25　楔形石器。上下両端に打痕が観察される。黒曜石製。

26　小形の剝片の一端に丹念な二次加工を施して刃部を形成している。拇指型掻器とされよう。黒曜石製。

27　不定形な剝片の一辺に二次加工を施し刃部を形成している。硅質岩製。

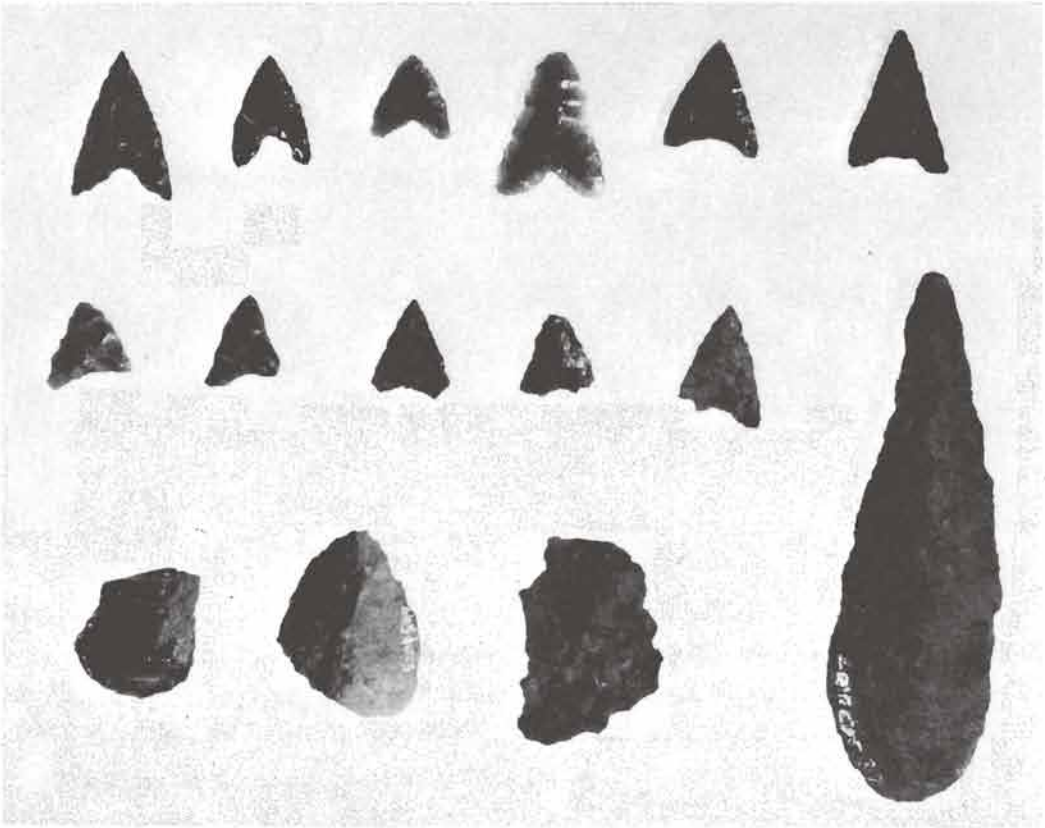
28　縦に長い剝片の側辺に沿って粗い二次加工の剝離が施されているスクレィパー。石材は硅質岩と判断される。



29　花崗製の敲石。表裏の中央と側面の一部に打痕が観察されるが、明瞭でない。

（$\frac{1}{2}$）

図89　敲石



鹿角出土状況

D－5・6グリッドの落石の状況

第9文化層

自然層序のⅩⅣ層を主体にⅩⅢ層の下面に遺物が発見されている。なおⅩⅣ層は土壌の色調によってa・b・cと区分され得る個所も認められるが、文化層の全体的なあり方から一応まとめて把握している。文化層の広がりは南壁よりのC・D－5～7グリッドにみられるが、未調査のC・D－4グリッドにおける広がりも予想される。

第9文化層は本洞穴においての最も古い時期の文化層で、土器の出土量は少ないが、石器の量では他の文化層を抜いている。

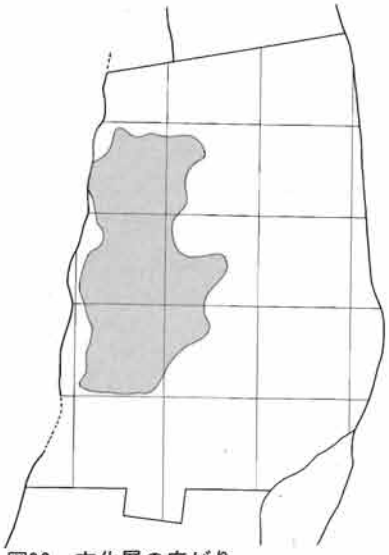


図90　文化層の広がり

槍先形尖頭器出土状況

遺　物

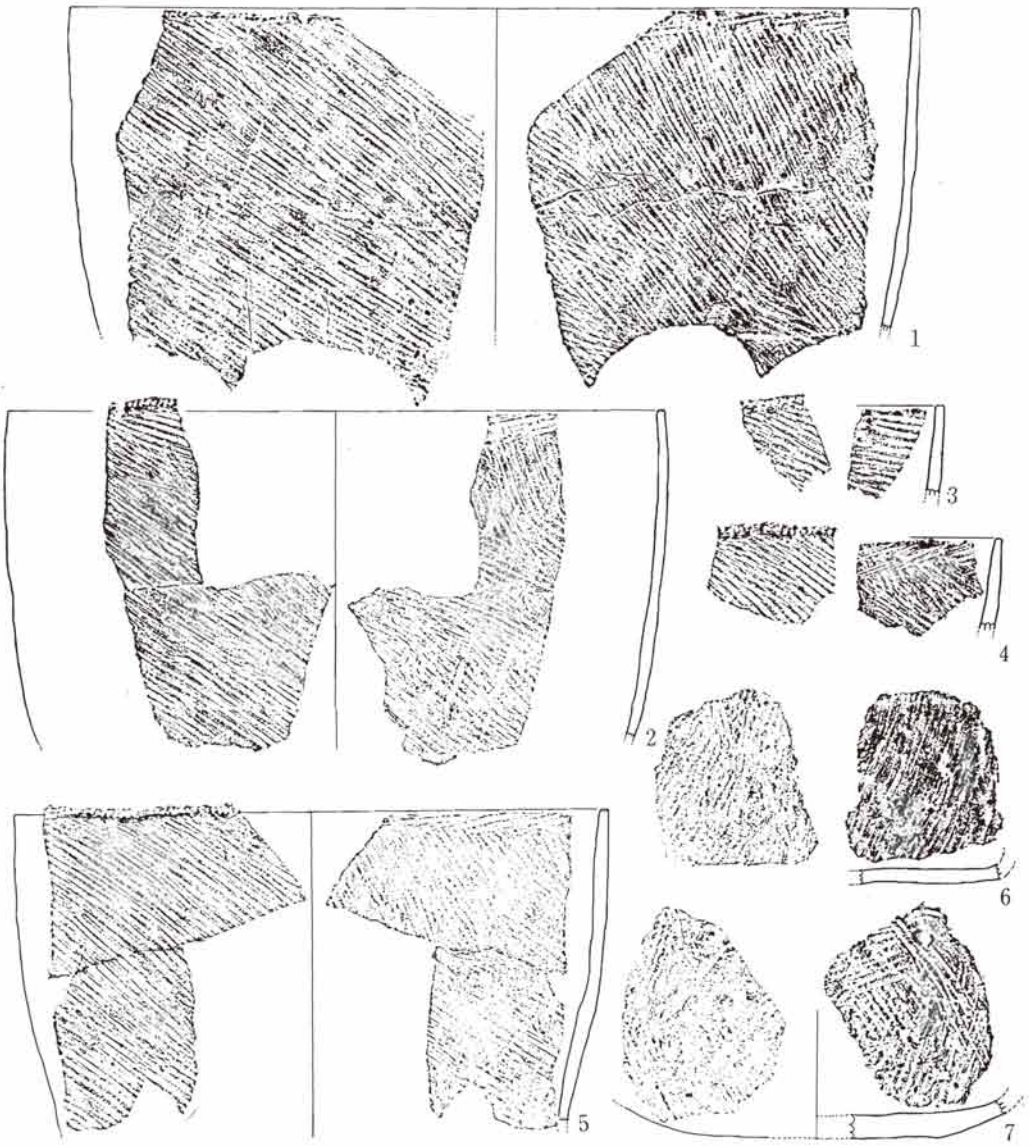


図91　縄文時代早期の土器

1・2・5　極めて薄手で焼成良好な口縁部から胴部にかけての土器である。内外面ともにシャープな条痕が全面に施されており、大半は斜め方向に走っている。内面の口唇部直下には全体の方向と逆方向をした狭い条痕帯がみられる。口唇に小さな刻みが巡っている。

3・4　同様な口縁部の破片である。

6・7　内外面に条痕を有する底部の破片で、薄い平底を呈しており、外面は擦痕が観察される。1～5の土器の底部になるものと判断される。

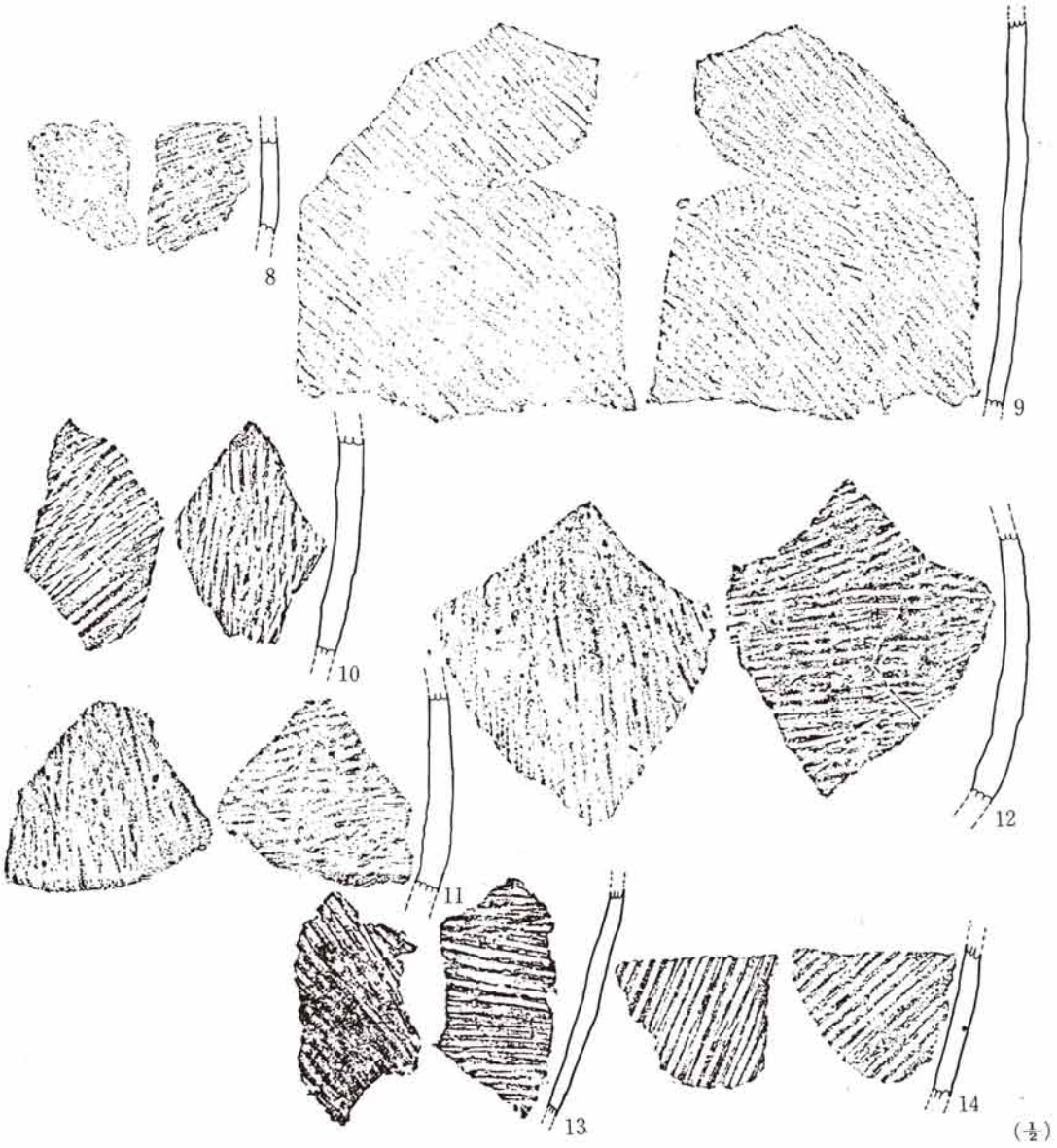


図92　縄文時代早期の土器

8・9・13・14　内外面に明瞭な条痕文を有する薄手の土器の胴部破片である。胴部にほとんど膨らみをもたないで平底の底部へ続くものと考えられる.

10〜12　やはり内外面に条痕が施された薄手の胴部であるが、わずかであるが湾曲している。12は、比較的顕著であり、底部近くの破片であろう。

図91の口縁部、底部の土器と同じタイプの胴部と判断できる。

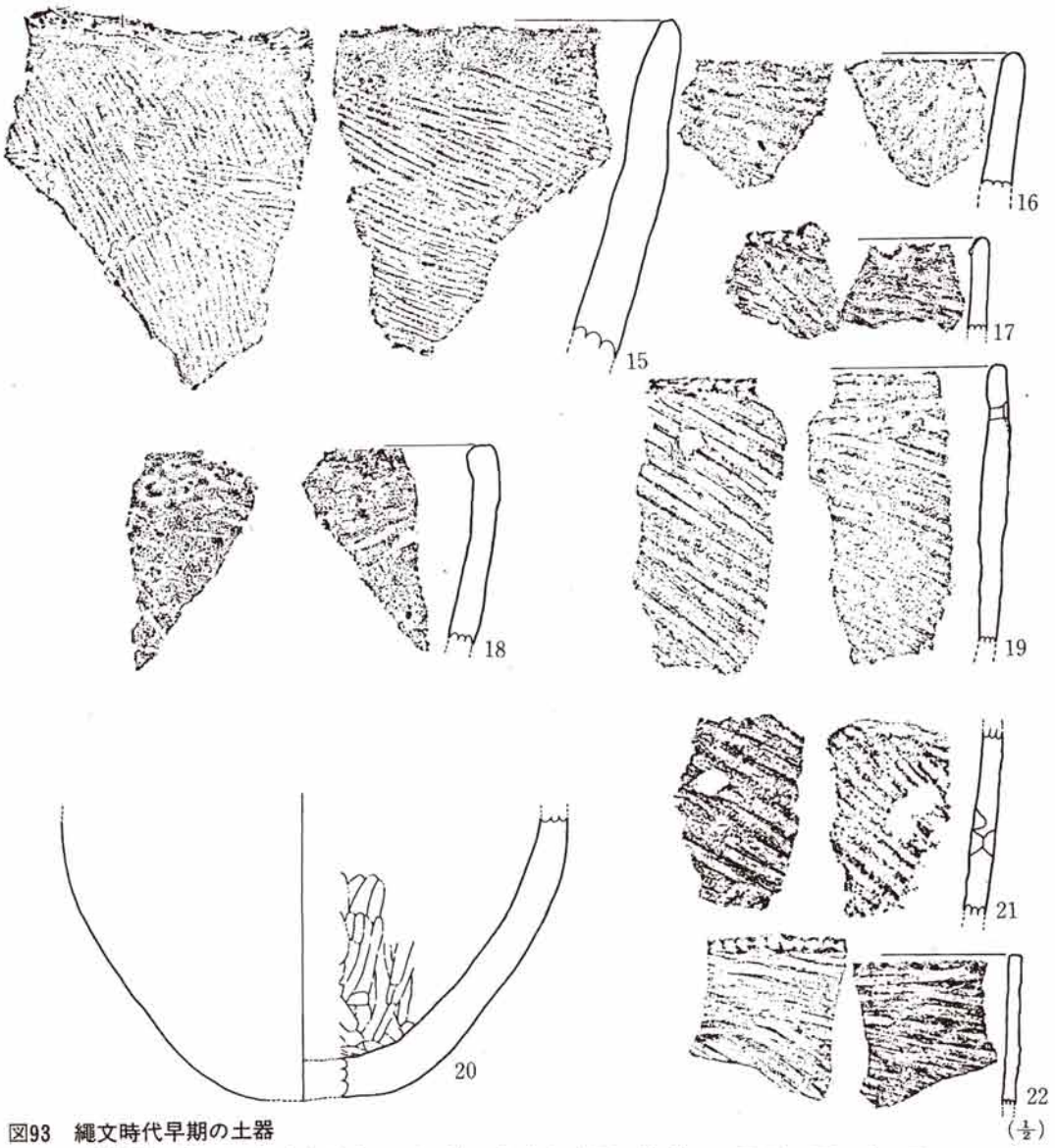


図93　縄文時代早期の土器

15　内外面に細めの条痕を有するが、他の条痕文土器に比較して器壁の厚い点で異なる。尖り気味の口唇部に刻みが施されている。

16～18　やはり内外面に条痕をもつ口縁部で、16・17は直行する形態をとっており、18はやや内湾している。

19　内外面に幅の広い斜め方向の整然とした条痕が施されている。直行する口縁部の口唇に刻みがみられる。口唇直下に補修孔があけられている。

22　器壁が極端に薄い焼成良好な条痕文土器の口縁部である。平担な口唇部に刻みが施されている。

21　幅の広い条痕文が内外面に施された胴部の破片。穿孔がみられる。

20　厚手の条痕文土器の底部、底の中心部を欠損しているが、あまり大きくならない平底に近い丸底になるものと判断できる。

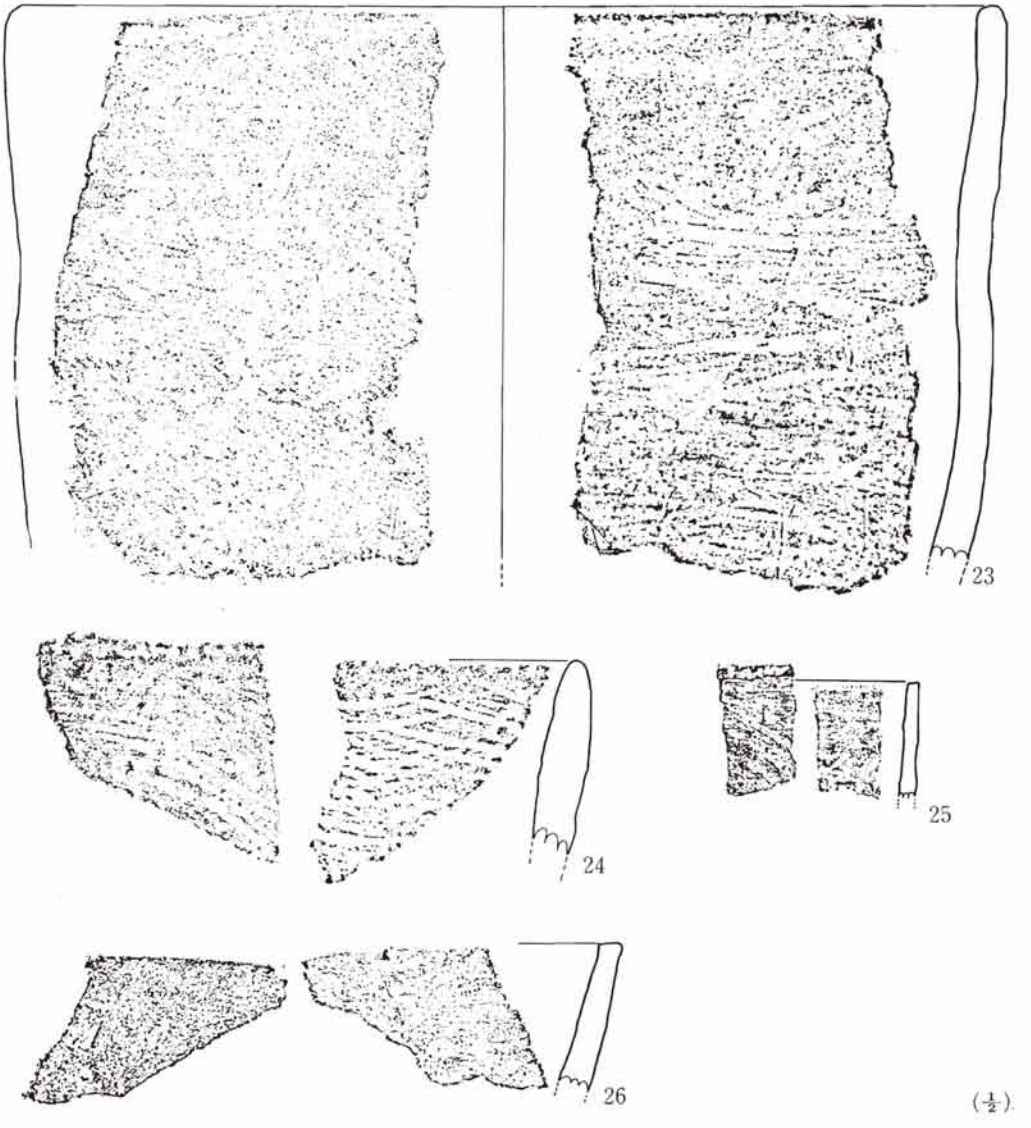


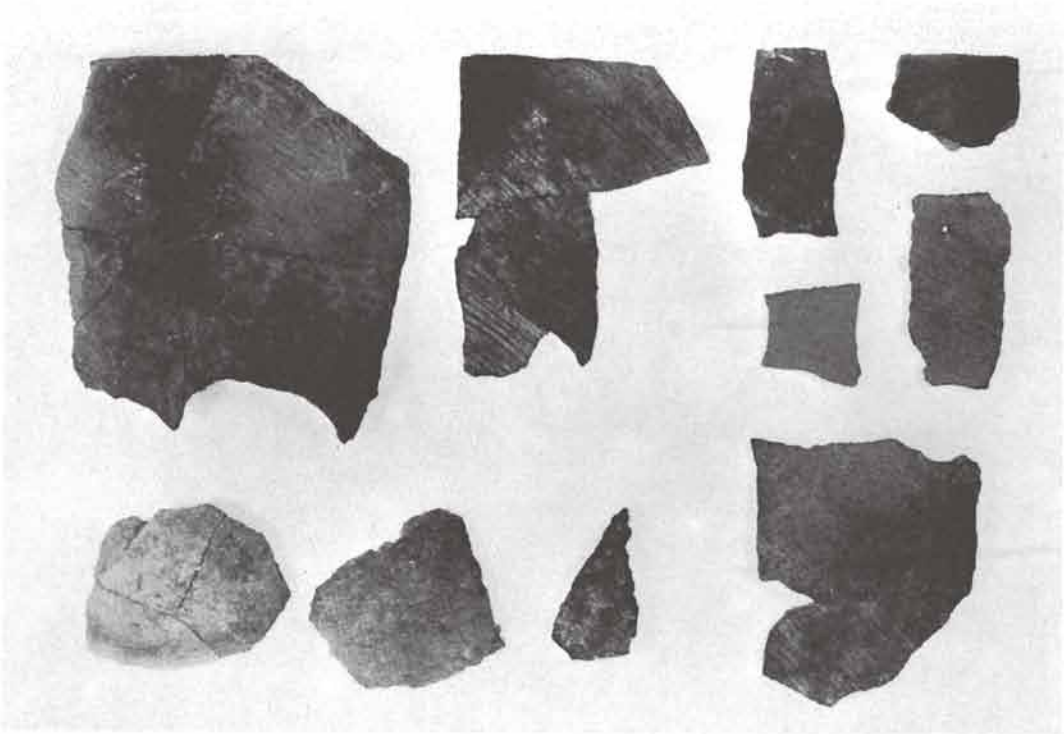
図94　縄文時代早期の土器

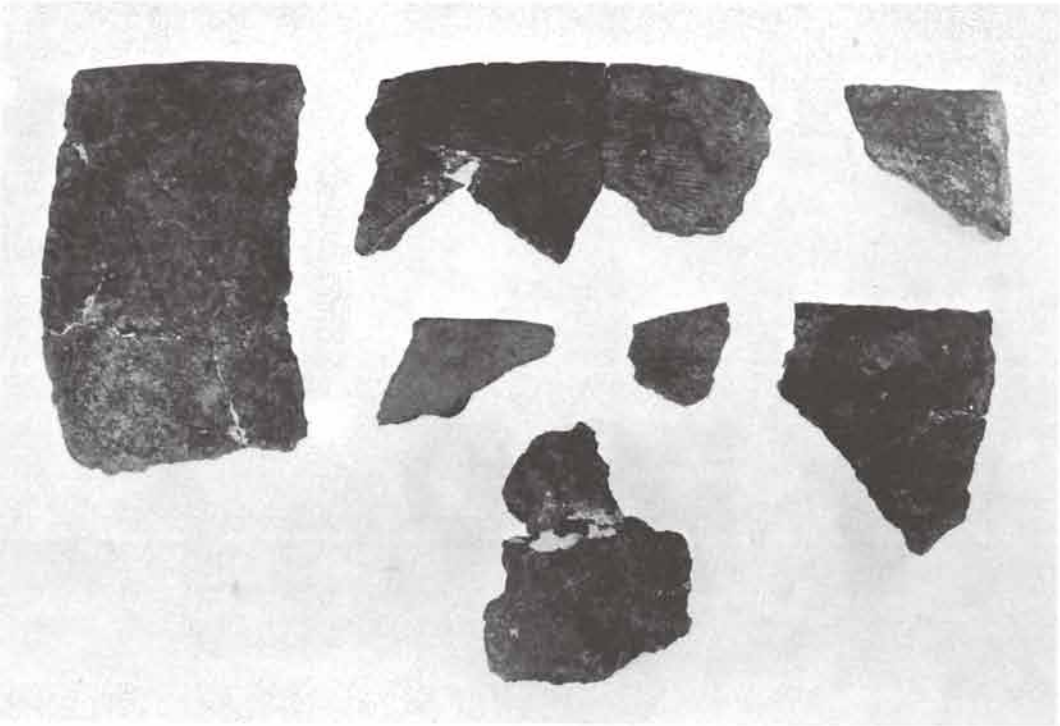
23　厚手の条痕文土器の口縁部から胴部にかけての大きな破片である。外面の条痕は明瞭でないが、内面はほぼ全面に横方向に施されている。口縁部の下の方でやや内湾して胴部に若干膨らみを有する。

24　厚手の外反気味の口縁部でやはり内外面に条痕がみられる。

25　極めて薄い条痕文を有する口縁部で、口唇に刻みが施されている。

26　外反する口縁部の破片であまり明瞭でない条痕がみられる。





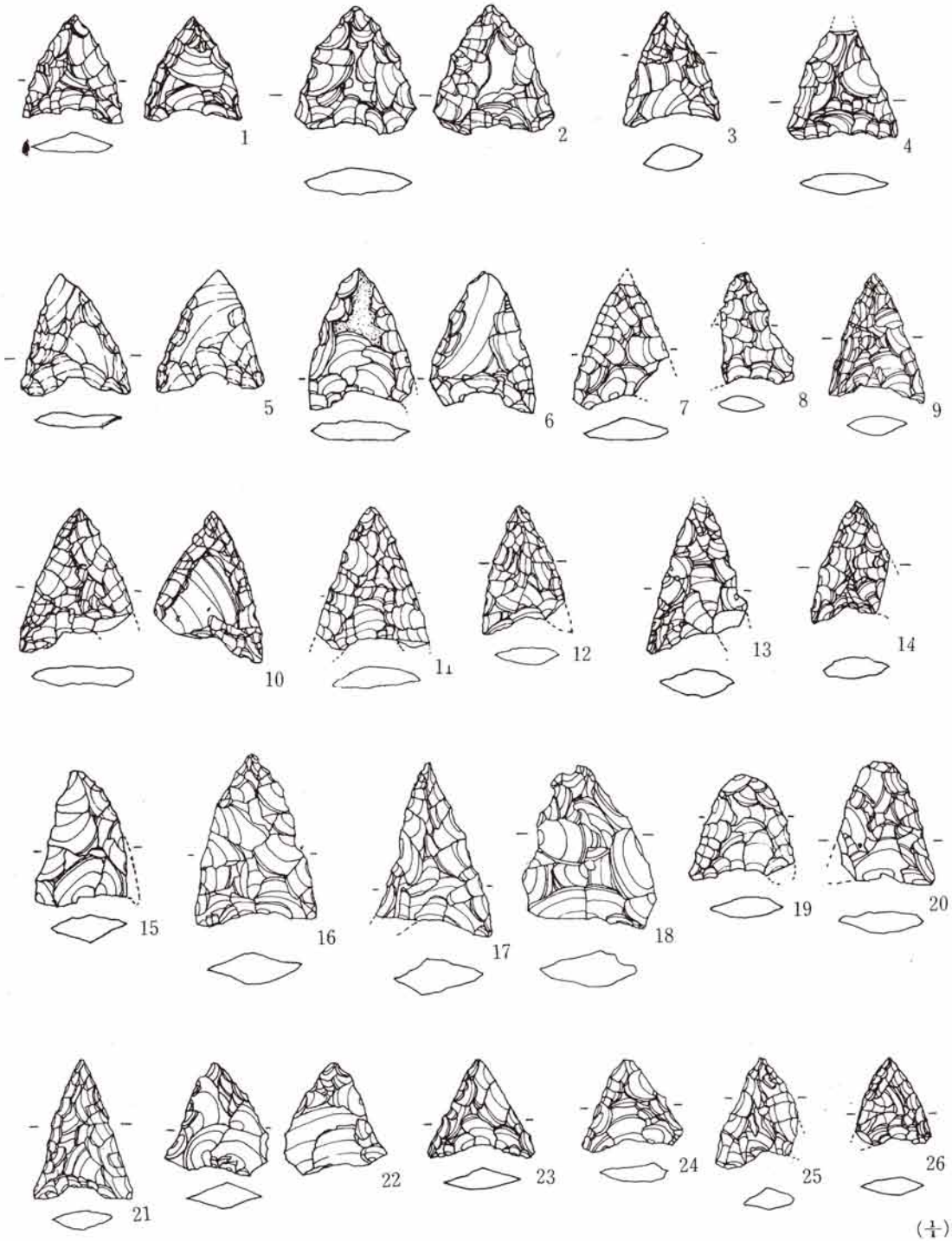
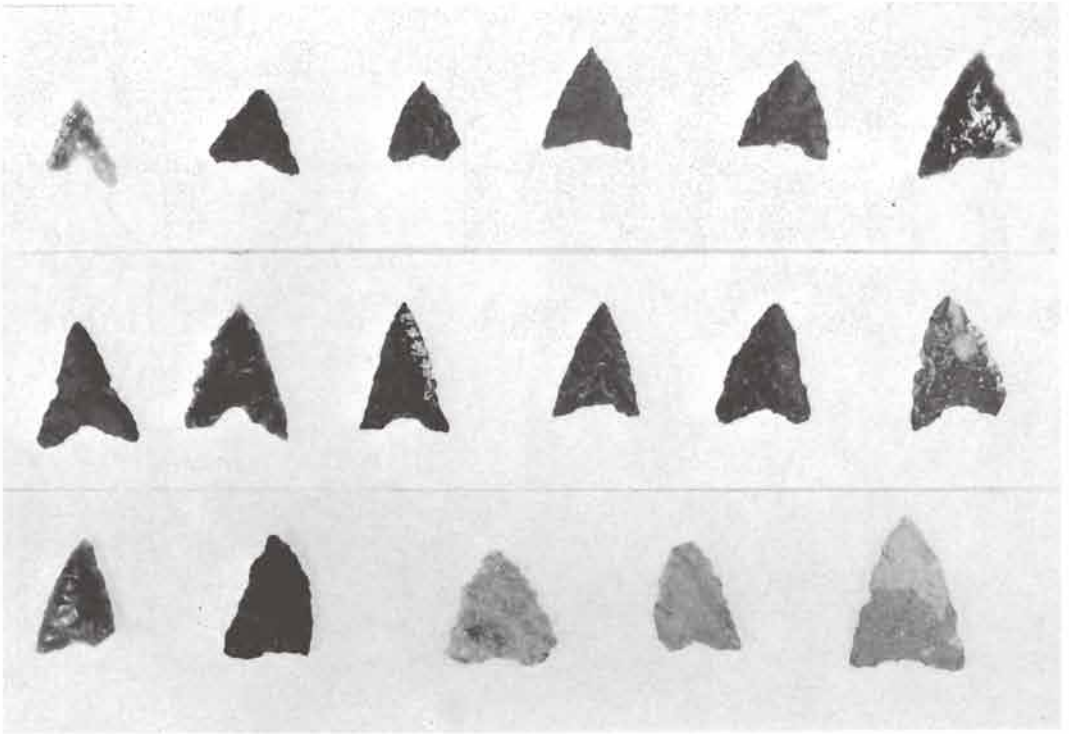


図95　石鏃



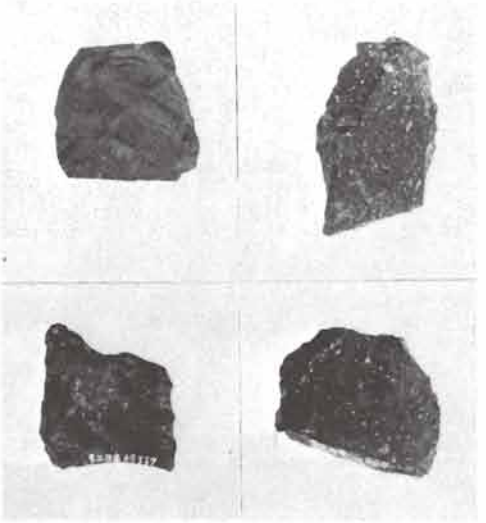
1～26　石鏃

基部の抉りが浅くて広い1・3を代表とみなされる一群と、5・13のようにやや抉りが深い一群とに大別される。全般的な傾向として抉り浅いものは小形の傾向を有し、深いものは大形のものが多い。

石材は安山岩質のものが顕著で、中にはサヌカイトと一般に呼称されているものもみられる。次に多く使用されているのは硅質岩であり、他にメノウ質、頁岩質のものなどもみられる。

安山岩質…1・3～6・9・15・19・21・22・24・26、硅質岩…2・7・11・13・16・17・25、メノウ質…8・23、頁岩質…18・20姫島産黒曜石…12・14、黒曜石…10。

重さについては、1は0.55g、2は1.50g、3は0.62g、5は0.91g、9は0.62g、16は1.31g、18は1.52g、21は0.64g、22は0.68g、23は0.44g、24は0.34g。



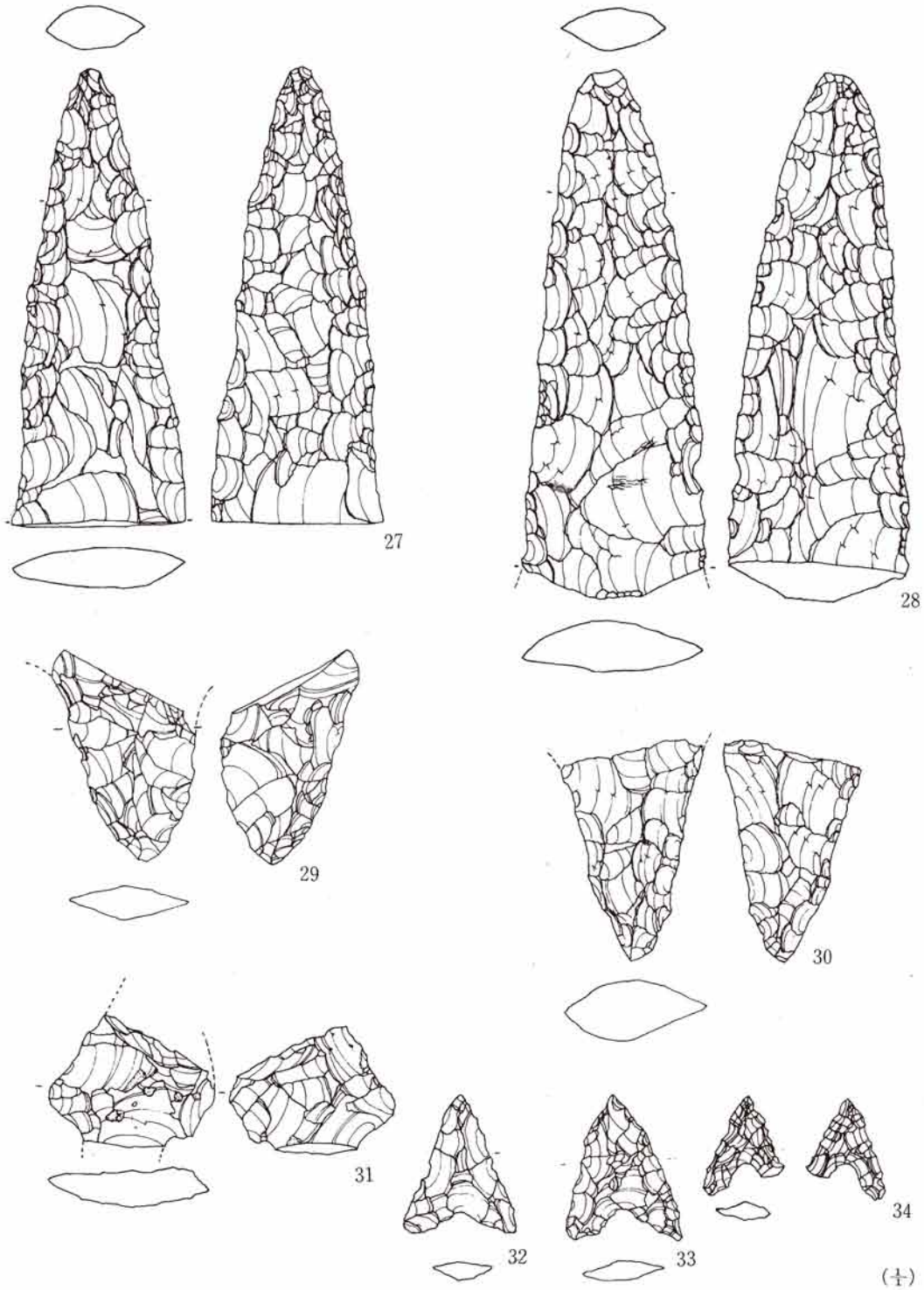
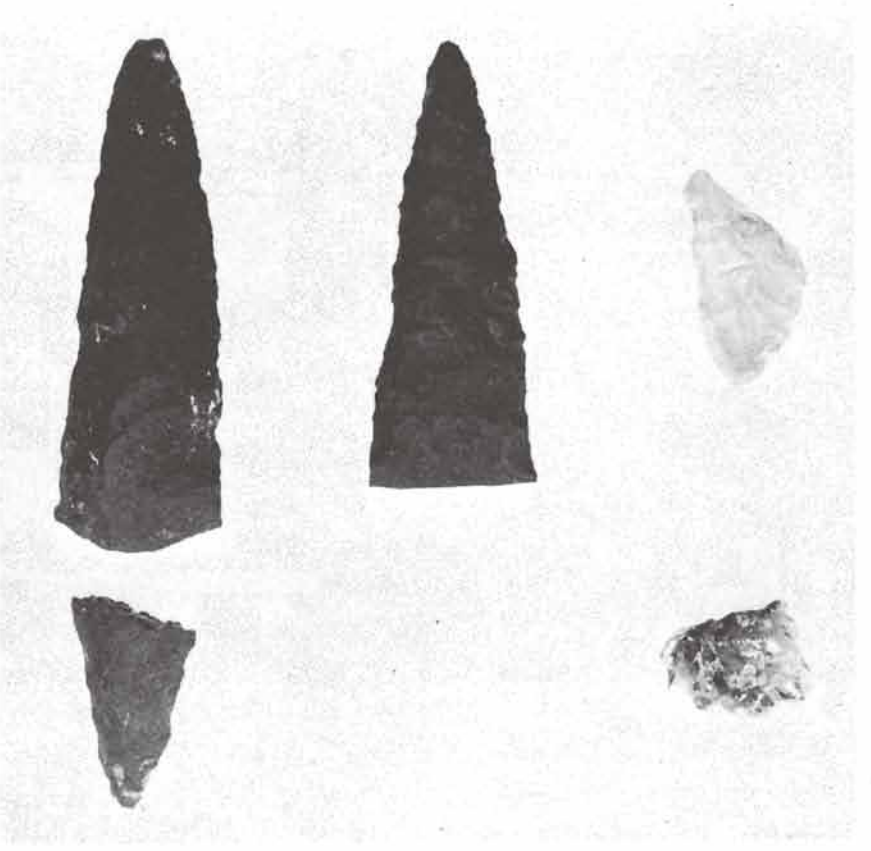


図96　槍先形尖頭器・石鏃



27～31　有舌尖頭器。32～34　石鏃。

27・28　有舌尖頭器と判断される石器で、その尖頭部から胴部すなわち槍先形尖頭器の身の部分にあたる。両面ともに両側辺からの薄くて幅の広い剝離面によって整形されており、横断面はほぼ凸レンズ状を呈す。共にサヌカイト質の石材が用いられている。現存の重さは27が14.24g、28は20.73gである。

29・30　有舌尖頭器の基部。いわゆる舌(茎)にあたる部分であり、身と舌が接する個所で欠損していることになる。29は頁岩質であり、30は27・28と同様なサヌカイト質の石材である。

31　有舌尖頭器の身から舌へかけての部分であり、身の先端部と舌の末端を欠いている。石材は透明度のある良質の黒曜石。

32～34　当文化層出土の石鏃の中では比較的基部の抉りの深いものである。32は安山岩質、0.68g、33は硅質岩、34はチャート質である。

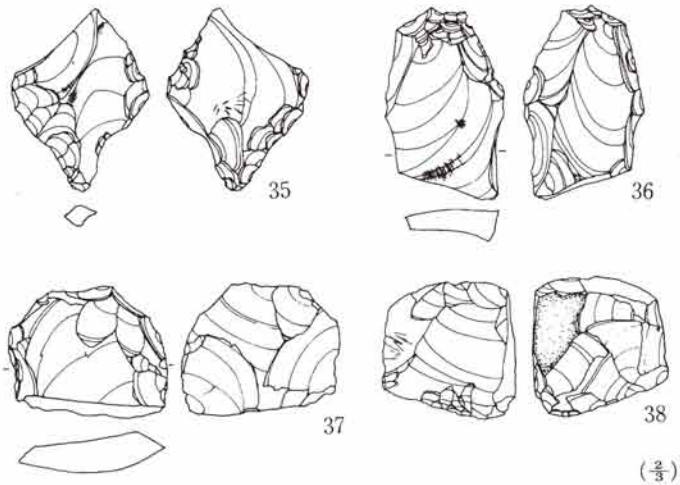
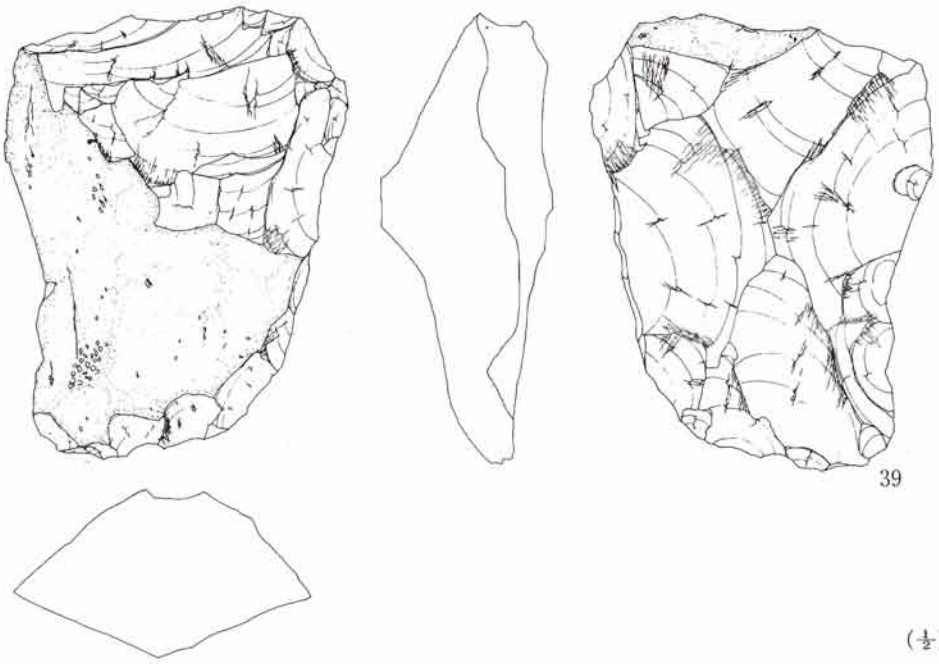


図97　石錐・他

(2/3)



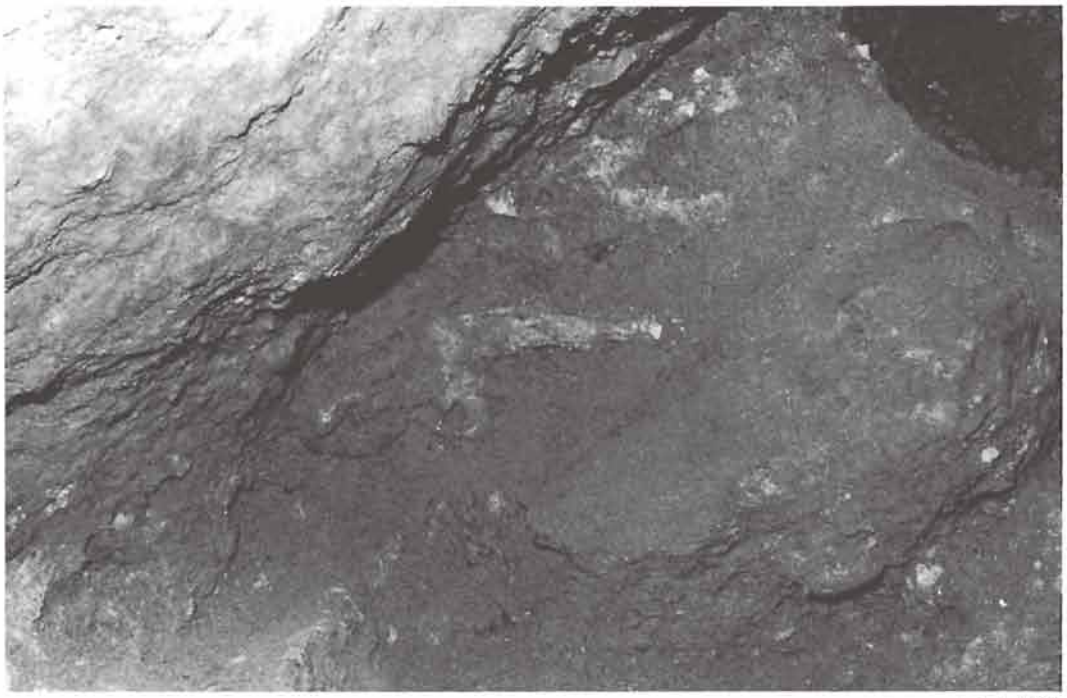
(1/2)

図98　斧形石器

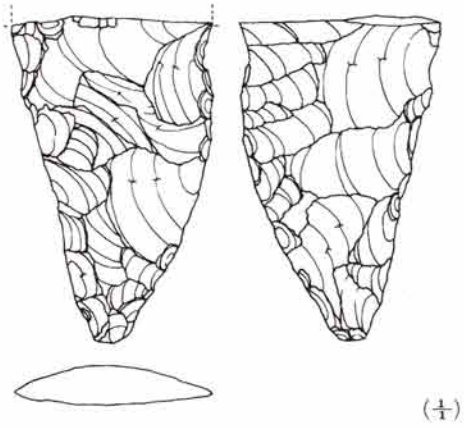
35　石錐。安山岩質の薄手の剝片を素材に、その一端に二次加工の剝離を施して断面がほぼ菱形の尖頭部を形成している。

36～38　サヌカイトの剝片の一部に二次加工を施した石器であるが、器種については明確にし得ない。

39　斧形石器。大形でしかも厚味のあるサヌカイ質の素材を用いた石器である。片面は周囲からの大きな剝離が施されており、もう一面は大きな剝離と側辺に沿っての小さな剝離がみられる。斧形石器としたが、一種の礫器であろうか。



獣骨(シカ)出土状況



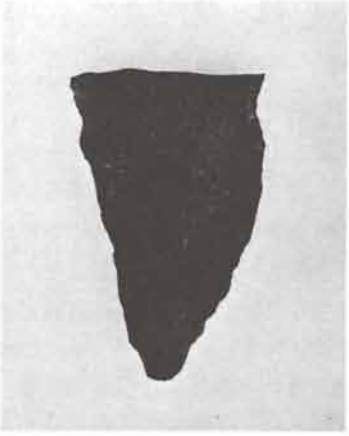


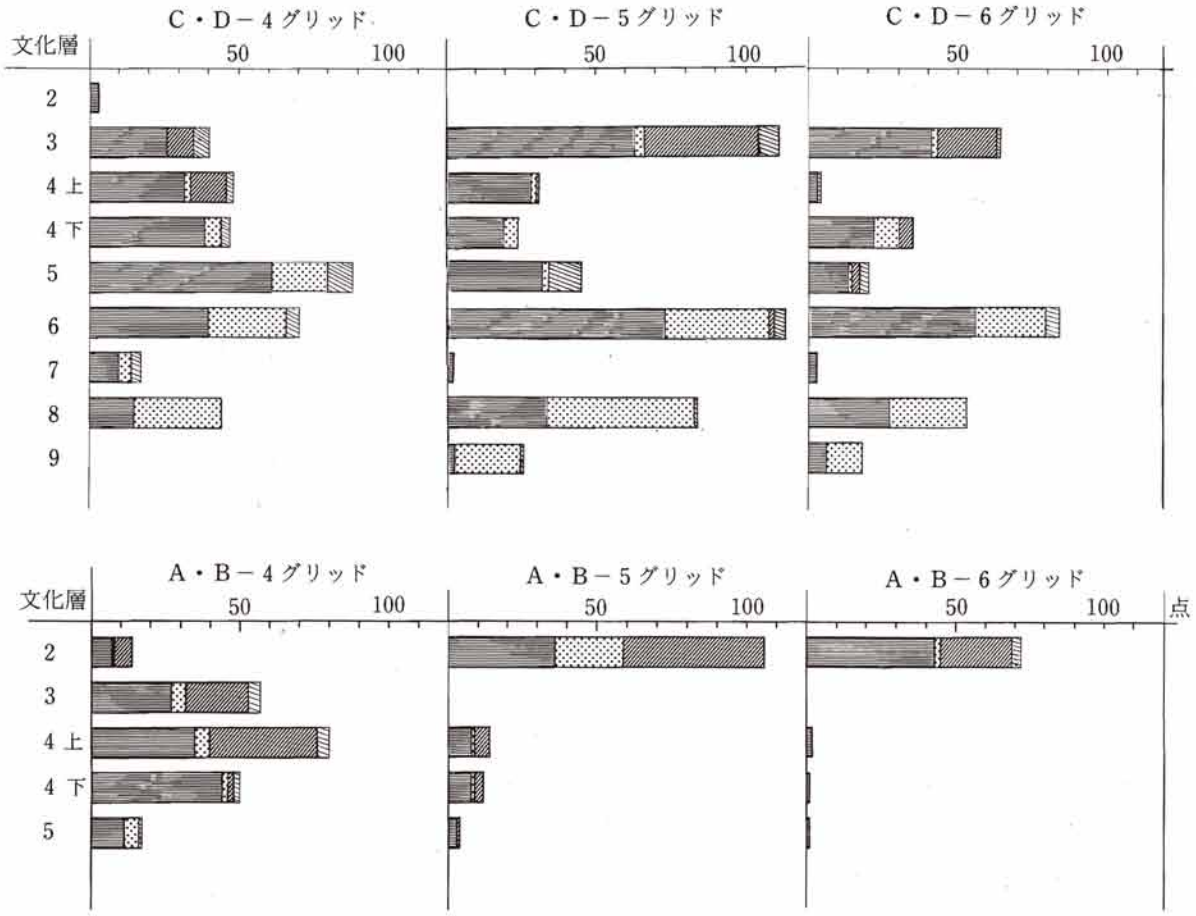
図99　槍先形尖頭器(撹乱層)

槍先形尖頭器

サヌカイト質の石材を用いて、その両面に二次加工が施された左右がシンメトリーでない尖頭器の一部分と判断される石器である。

出土層位は不明であるが第8あるいは第9文化層の所産と推測しておきたい。

各文化層の文様別土器片出土数



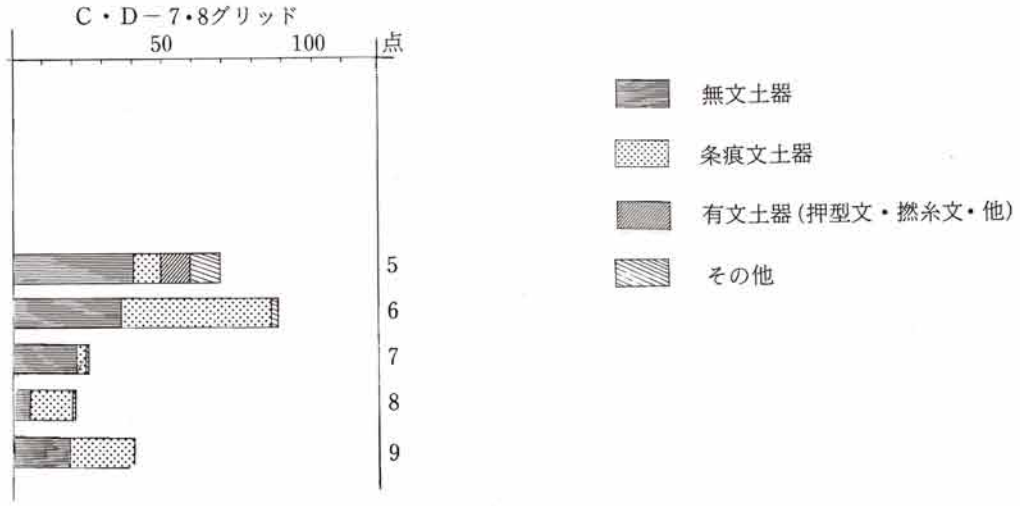
第1文化層の土器は本調査において把握されなかったが、調査前に採集された土器から想定した。縄文時代後期中葉から後葉にかけての文化層である。

第2文化層の土器は貼りつけ凸帯のある特徴的な土器から縄文時代前期中葉とされる。これらの土器と同量の無文土器とそれに条痕文土器とが出土している。これらの土器片が量的に多いのは貼りつけ凸帯の文様が口縁部に集中し、胴部以下は施文されないためであり、しかも地文に条痕地を有すものと無文のものの両者が認められることによるものである。

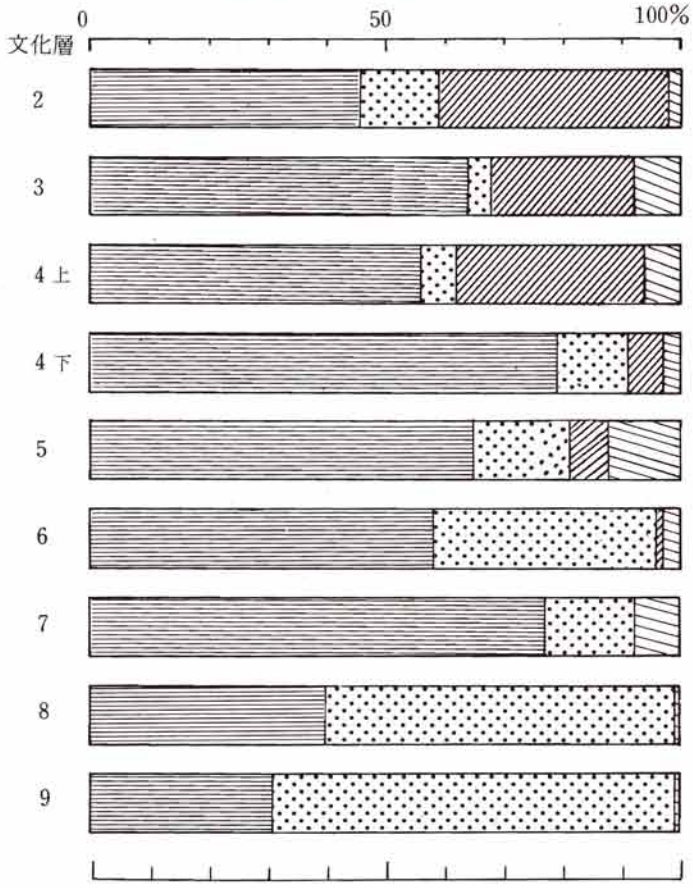
第3文化層の土器は早期末葉の粗大な押型文土器に代表されるが、それを上回る厚手の無文土器が存在し、セットをなすものとして把握できる。

第4文化層（上層）の主体を占める土器はやはり押型文土器であり、器形・文様から第3文化層のそれとは区分され、早期中頃から後半に位置づけられる。やはり無文土器を多量に伴っている。

第4文化層（下層）および第5文化層の土器は押型文土器が認められず、無文土器が3分の2を越えている。文様のある土器には撚糸文・縄文などがみられる程度である。両文化層の土器のあり方は基本的には大きな変化がみられなく、その時期は早期中葉から前葉にかけてが考えられる。



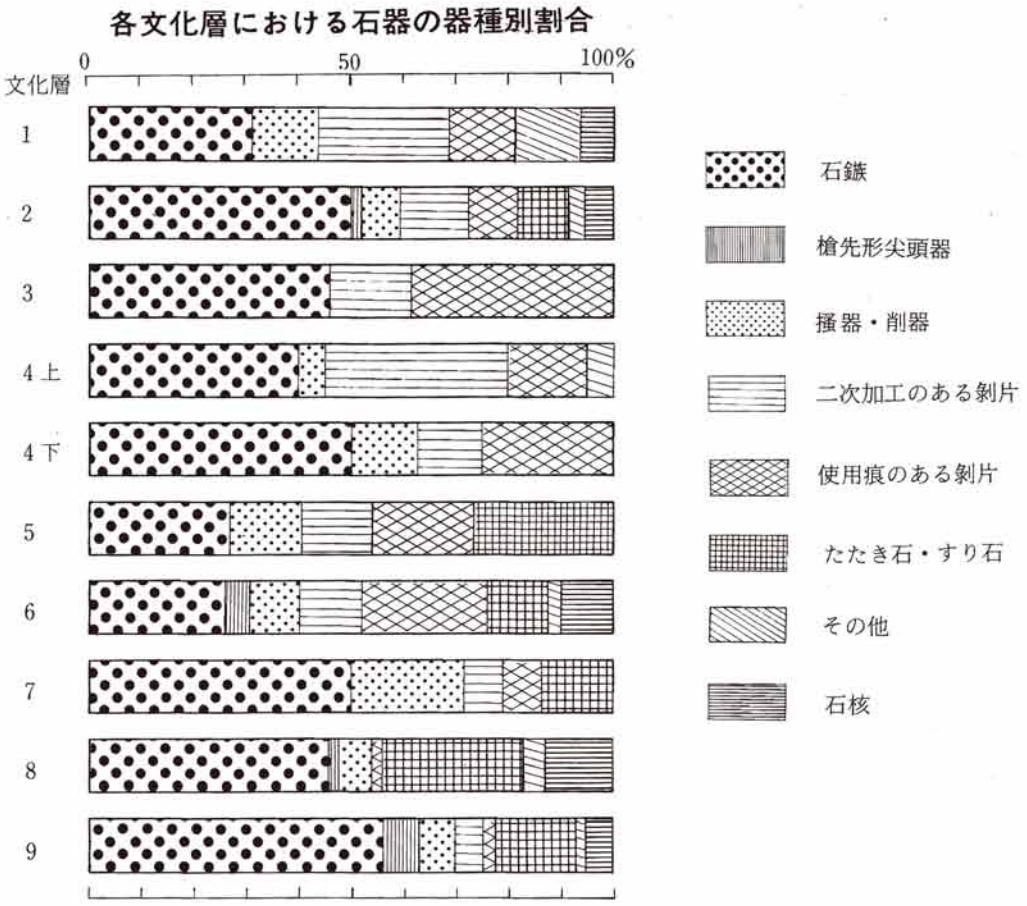
各文化層における土器の文様別割合



第6文化層の土器は他の文化層に比べて最も多く出土している。やはり無文土器が大勢を占めるものの、条痕文土器の顕著な増加に特色づけられる。早期前葉が比定されよう。

第7文化層の土器は無文の丸底土器を主体としており、上層において出土していた無文尖底の土器は全くみられない。第6文化層とは土器の面で著しく異なる。早期初頭を想定できよう。

第8・9文化層の土器はそれ以前と全く様相が違い、条痕文土器が圧倒的に多い。薄手と厚手が存在し、平底に近い丸底と平底との二者がみられる。早期初頭（草創期）と考えられよう。



石器組成については各文化層でほぼ同様な傾向が窺える。すなわち、石鏃、掻器・削器（スクレィパー）、二次加工のある不定形な剥片石器、刃部と推定される側辺に使用痕が観察される剥片石器、それに敲石・磨石などが基本的な石器組成として挙げられる。その他としたものは礫器・石錐など稀な石器と器種の判定が困難なものが含まれている。この他、第6・8文化層では槍先形尖頭器が、第9文化層では有舌尖頭器が出土している。敲石・磨石は文化層によって出土数が極端に異なり、第3・4文化層では出土していない。

石器の数量および組成は当時の生活の一端を如実に示すものだけに各文化層におけるあり方は興味がもたれる。

石器、特に剥片石器の石材は石器製作の上で大きく横たわっている基礎的問題であり、その製作技術および石材の搬入は当時の行動範囲や交流を示唆する好資料である。それだけに石材の同定については専門の研究者による判断をまたなければならないが、経験による判断を行なってその傾向を試みた。その結果、石材の種類としては、黒色の黒曜石・乳白色の姫島産黒曜石、サヌカイト質を含む安山岩質のもの、硅質岩、チャート質それにメノウなどが存在する。これらの石材は文化層によって異なる傾向が看取できる。すなわち時期による石材の選択が予想されるのである。第2第3文化層では姫島産の黒曜石・黒色の黒曜石が多いが、第4・5文化層では減少して、硅質岩・チャートなどが増加する。この傾向は以下の第6～第9文化層についてもほぼ同様である。安山岩質のものは各文化層で普遍的にかなりの数みられる。

二日市洞穴出土の人骨

表1　出土人骨一覧

	性別	年令	時代
2号埋葬遺構			
1号人骨	男性	壮年	縄文早期
2号人骨	女性	成年	〃
3号人骨	不明	小児	〃
1号埋葬遺構			
4号人骨	男性	壮年	縄文前期
3号埋葬遺構			
1号人骨	不明	熟年	縄文早期
2号a人骨	男性	熟年	〃
2号b人骨	不明	幼児	〃
3号人骨	男性	壮年	〃
4号人骨	男性	壮年	〃

表2　大腿骨主要計測値　(mm)

	1号人骨		2号人骨	
	右	左	右	左
最大長	376	—	—	—
自然位全長	374	—	—	—
骨体中央矢状径	22	(21)	(21)	(21)
骨体中央横径	21	(20)	(18)	(18)
骨体中央周	68	(65)	(62)	(63)
長厚示数	18.18	—	—	—
骨体中央断面示数	104.76	(105.00)	(116.67)	(116.67)
骨体上断面示数	76.00	72.00	70.83	70.83

表3　脛骨主要計測値　(mm)

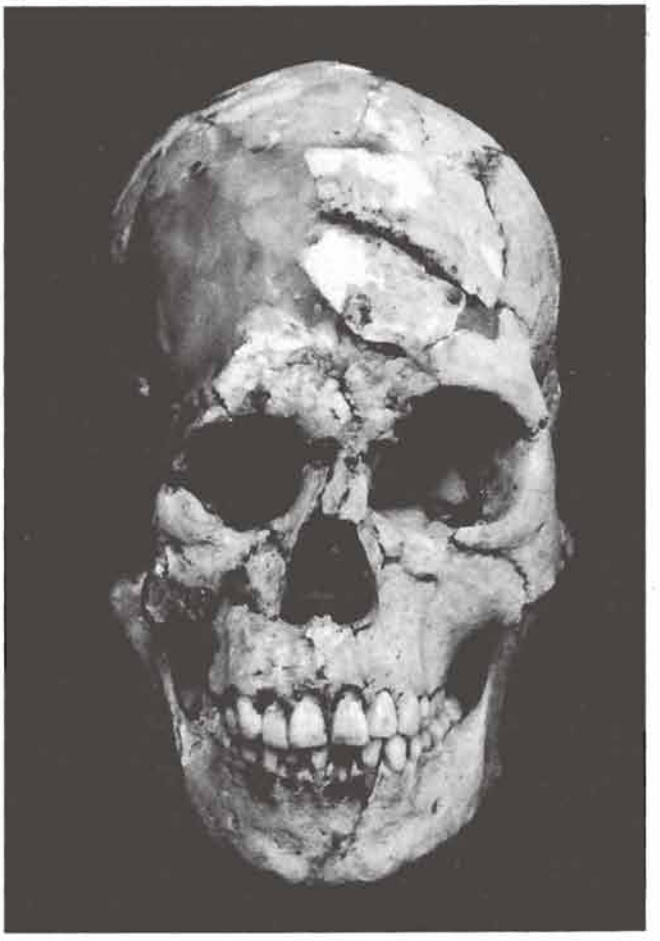
	1号人骨		2号人骨	
	右	左	右	左
脛骨全長	—	(302)	—	—
脛骨最大長	—	(306)	—	—
中央最大径	(26)	(27)	(23)	(23)
中央横径	(16)	(16)	(17)	(17)
中央周	(67)	(67)	(62)	(65)
最小周	—	61	—	60
長厚示数	—	(20.20)	—	—
中央断面示数	(61.54)	(59.26)	(73.91)	(73.91)

2号埋葬遺構出土人骨のみ計測可能

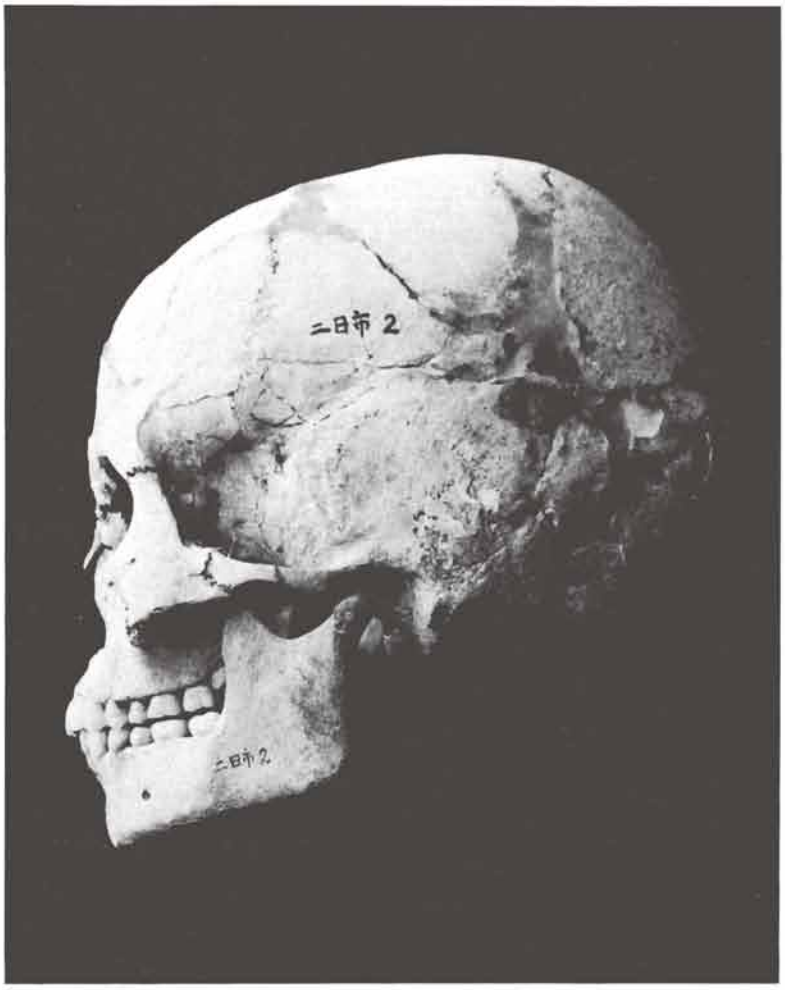
頭蓋骨の計測値は土圧などの原因による変形が著しいためさらに検討を行なった上で提出したい

長崎大学医学部解剖学第二教室　松下孝幸

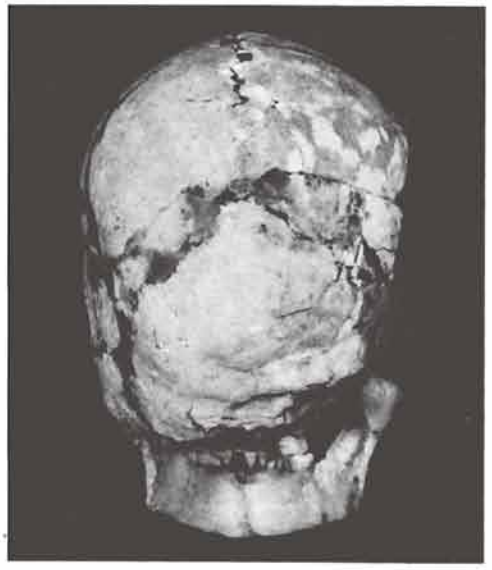
2号人骨（2号埋葬遺構） **上面観**



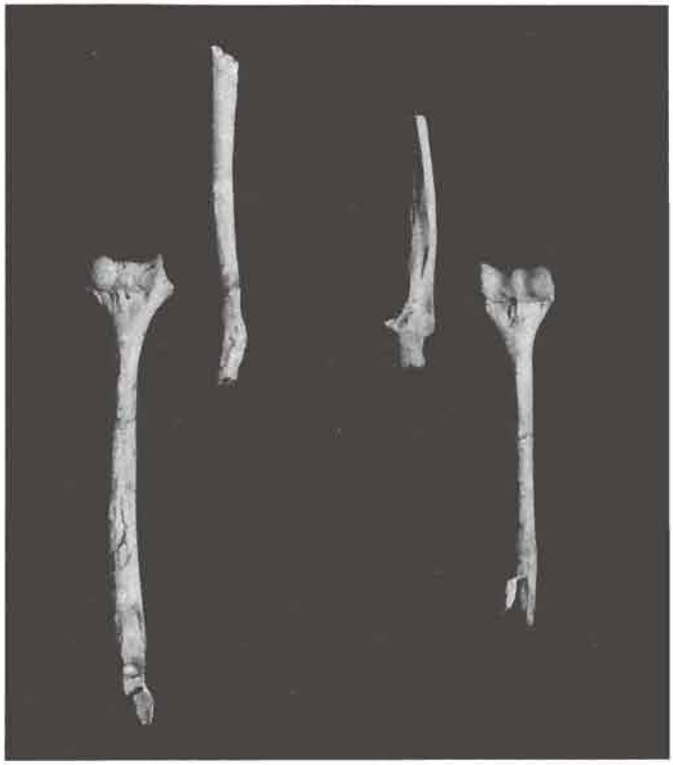
2号人骨正面観



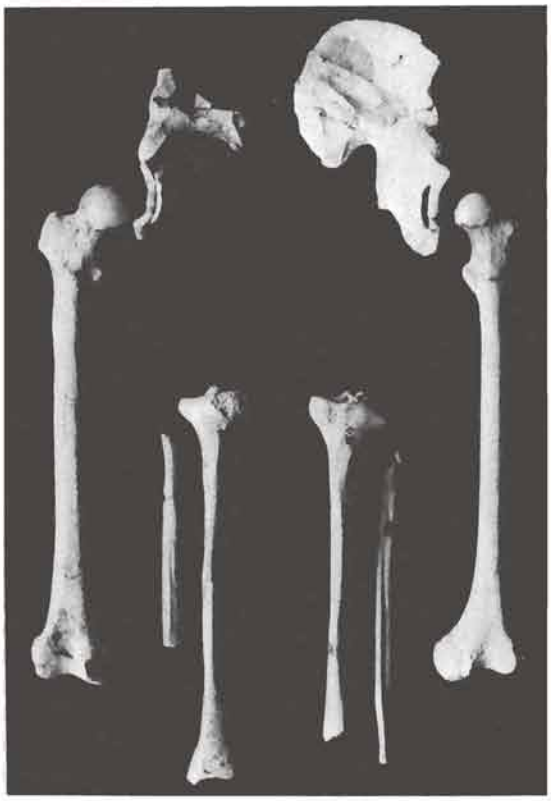
2 号人骨側面観



2 号人骨後面観

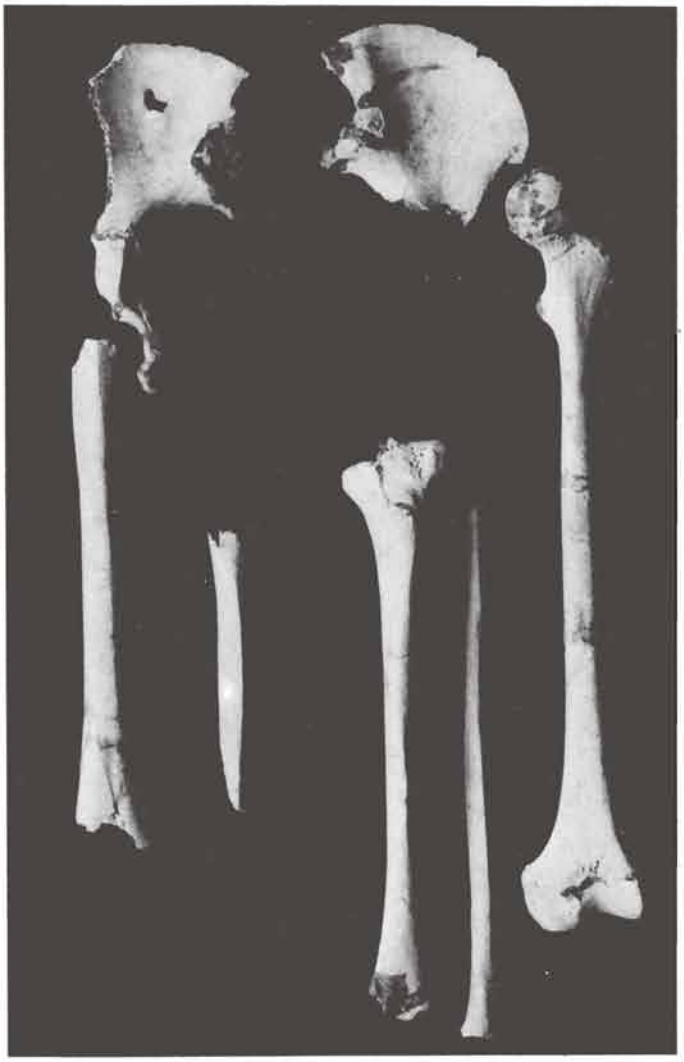


1号人骨(2号埋葬遺構)上肢骨

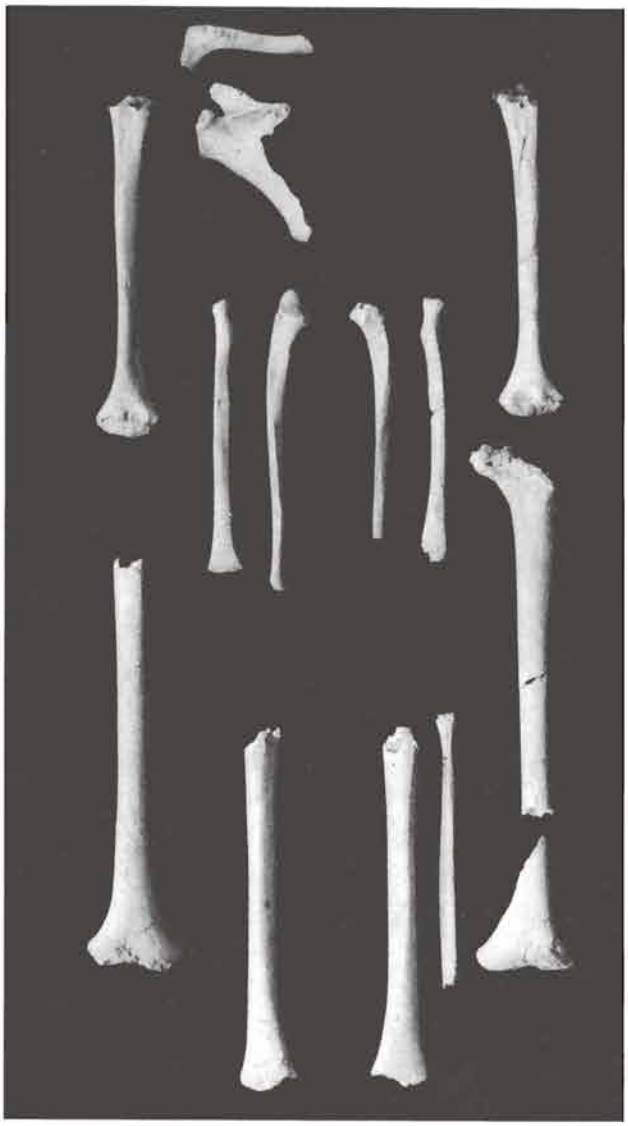


1号人骨下肢骨

2号人骨(2号埋葬遺構)上肢骨



2号人骨下肢骨



3 号人骨（2 号埋葬遺構）

4 号人骨（1 号埋葬遺構）
頭蓋骨・上面観

ま と め

文化層の把握

二日市洞穴は縄文時代早期を主体とする洞穴遺跡であり、時期の異なる九つの文化層が確認できる。この文化層の区分については、遺物包含の有無は無論のこと、集石遺構および埋葬遺構それにレンズ状の堆積が認められる灰や焼土、落石、土層の色調などを考慮して把握した。さらに平面的に拡がる遺物を断面に投影するいわゆる垂直分布を検討することによって文化層認定の傍証を試みた。それぞれの文化層は自然層序の区分にほぼ符合するわけであるが、一つの文化層が自然層序で区分したものの上下に一部含まれる場合があり、これなどは洞穴内の自然のあるいは人為的な土壌の堆積の作用によるものであろう。

洞穴の利用の変遷

第1文化層　縄文時代後期中葉から後葉、約3,600年前～3,000年前。洞穴中央部を中心にした利用が推定される。

第2文化層　縄文時代前期中葉、約 6,000年前。中央部から奥にかけての北側に生活面が推定される。南壁よりに炉址と推定される集石遺構が、北壁よりに埋葬遺構が設けられている。

第3文化層　縄文時代早期末葉、約7,000年前。洞穴の中央部から開口部に向けて拡大。開口部よりに集石遺構が設けられる。

第4文化層（上）（下）縄文時代早期中葉～後葉、約 8,500年前。洞穴中央部から開口部にかけて。南側に集石遺構、北側に埋葬遺構が設けられている。

第5文化層　縄文時代早期中葉から前葉、約 9,000年前。洞穴の中央部から開口部にかけて、しかも南側よりに中心が移動、南壁よりに集石遺構。

第6文化層　縄文時代早期前葉、約 9,500年前、洞穴南側の中央部に限定され、北側は生活の痕跡が全くみられない。

第7文化層　縄文時代早期前葉～初頭、約10,000年前、やはり洞穴南側の中央部から開口部よりに生活の中心が想定できる。

第8文化層　縄文時代早期初頭、約10,500年前。洞穴南側の中央部から開口部よりが利用されている。

第9文化層　縄文時代早期初頭、約11,000年前この洞穴が初めて利用されはじめる。洞穴南側の開口部から奥部にかけてに生活の中心が考えられるが、奥部については未調査のため不明。

以上が当洞穴の利用の時期とそれぞれの時期の平面的な利用個所の想定である。なお、今から何年前という絶対年代の値については、本州・四国を含めた放射性炭素による年代測定値からおおよその時期を予想したものである。

二日市洞穴における縄文時代早期の土器

当洞穴の主体をなす時期は縄文時代の早期であり、第3文化層から第9文化層出土の土器は全て縄文時代早期の所産で、時期による土器の変化を明瞭に認めることができる。

全般的な傾向として、尖底をした押型文土器群で代表される時期が早期の中で最も新しく、尖底から丸底の無文土器群へと次第に古くなり、さらに条痕文を有する平底に近い丸底・平底が当洞穴の最古の土器群であり、早期の初頭に位置づけられる。

押型文土器群

Ⅰ類　表面に粗大な押型文を施文し、口縁部が外反し、しかも内面に大きな条痕文(原体刻文)を有する尖底の鉢形土器。従来「田村式土器」と呼称されているものに類似する一群。

Ⅱ類　小さく整った押型文が施文され、全体に器壁が薄い小形の尖底の鉢形土器。口縁部の形態および内面の条痕文の有無からａ類・ｂ類の二つに区分され得ると考える。すなわち、Ⅱａ類は九州の押型文土器の代表的なものとして周知されている「早水台式土器」に相当する。一方、Ⅱｂ類は大分県稲荷山遺跡において単純に出土している土器群に符号することから「稲荷山式土器」と呼称し、「早水台式」に極めて接近しながらも先行する押型文土器の一つのタイプを設定したい。二日市洞穴の第４文化層においてこの両者を層位的に分離することはできなかったが、相対的にａ類が上位に、ｂ類が下位に認められる傾向が示されている。

無文土器群

二日市洞穴出土の多量の無文土器は大別して、押型文土器群に共伴するもの（無文土器Ⅰ類)、押型文土器を全く伴なわずほぼ無文土器だけの単純な状況で出土する押型文土器に先行するもの（無文土器Ⅱ類・Ⅲ類）、さらに条痕文を主体する土器に伴なうもの（無文土器Ⅳ類）の四者が存在する。それらの無文土器群はそれぞれ特徴的な形態を有し、しかも層位によっても明確に分離することができることから当然時間的な経緯の中で把握されることになる。

Ⅰ類　当洞穴の第３・第４(上層)文化層において出土している押型文土器に伴う無文土器で、細部に若干の違いはあるものの基本的には器壁が厚くしかも大形で尖底を呈する鉢形土器で代表させることができるであろう。

Ⅱ類　第４（下層）・５・６文化層は無文土器を主体とする文化層であり、これらの文化層および無文土器の形態的特徴からⅡ類に区分されるであろう。

Ⅱａ類　第４文化層（下層）および第５文化層から出土しているもので、Ⅰ類に比較して器壁が薄いことと、底部の尖りが著しいこと、口縁部がほぼ直行することなどで異なっている。

Ⅱｂ類　第６文化層の無文土器で、口縁部の形態については不明であるが、全体に大形で器壁が厚く特に底部はその傾向が著しくしかも乳房状の尖底をなす。この文化層からは比較的薄手で尖り底の無文土器も出土しているが、前者で代表させることができよう。

Ⅲ類　これまでの無文土器、すなわちⅠ類およびⅡ類とは基本的に異なる無文土器である。すなわち、これまでの無文土器の底部は細部においては違いがあるものの、いずれも尖底をなす点では共通している。しかしながら第７文化層出土の無文土器は丸底ないし平底に近い丸底を呈している。尖底の無文土器は全く共伴せず、無文土器群の中に丸底の時期が明確に存在することを示唆している。

Ⅳ類　第８・９文化層は条痕文土器を主体とする文化層であるが、無文土器が共伴している。両文化層から出土している無文土器の形態は共伴する条痕文土器とほぼ類似したもので、口縁部はほぼ直行し、胴部に膨らみをもたず底部へと移行するものである。その底部は無文土器Ⅰ～Ⅲ類

と異なり平底ないし丸底に近い平底の土器であり、九州においてこれまで縄文時代早期の無文土器で平底を呈するものは全く知られていない。この無文平底の土器には器壁が極めて厚いものと非常に薄いものの二者が認められ、また底部の形態でも完全な平底と丸味をおびる平底とがみられるなどバリエィションがみられる。

以上の様に二日市洞穴では早期の無文土器群が層位的な文化層によって把握されるのである。すなわち平底→丸底→尖底という形態の変化を追うことができた。この変遷については二日市洞穴で初めてとらえられたものであるが、今後同様な時期の遺跡においてさらに究明される必要がある。それらのことを考慮して、特にⅣ類の平底の無文土器を**「二日市無文Ⅳ式」**、Ⅲ類の丸底を**「二日市無文Ⅲ式」**と仮称しておきたい。

条痕文土器群

東九州における最古の土器群として無文尖底および丸底の土器が想定されていたが、二日市洞穴の調査によってそれらよりさらに古い土器群の存在が明白にされた。すなわち、第8・9文化層の平底に近い丸底および平底の土器群がそれにあたる。この土器群が無文の尖底や丸底に先行することについては層位的に明らかであり、さらに共伴石器に有舌尖頭器が存在することから一段と確かである。

第8文化層から出土している条痕文を有する土器は器形および条痕文の施文から三つに分類することができる。そこで当文化層出土の条痕文土器を一括して「条痕文土器Ⅰ類」とし、さらにａ・ｂ・ｃと三種類に区別する。

Ⅰａ類　円筒形に近い形態を呈し、底部は平底に近い丸底と表現されるもので、内外面全面に5～6本を一つの単位とする細くて鋭利な櫛目状の条痕が施されている。口唇部に刻みを有し内面に指圧が観察される。

Ⅰｂ類　全体の器形は砲弾形に近いが、底部丸底を呈する。器壁の内外面にヘラ状の器具による幅の広い条痕（擦痕）で全面が調整されているもので、口唇部に刻みが施されていることや内面の指圧による調整はａ類と共通する。

Ⅰｃ類　器形はａ類と共通するものであるが、内外面の条痕はいわゆる貝殻条痕文に近似している。口唇部にやはり刻みをもつものと考えられる。

Ⅱ類　二日市洞穴の最古の第9文化層の主体を占める土器を条痕文土器Ⅱ類とする。単純な鉢形をなす点は他の条痕文土器と同一であるが、器壁が極端に薄く、しかも焼成の良好さで明瞭に分離される。また底部が薄手で平底をなすことで大きく異なる。口唇部に刻みを有しており、このことは二日市洞穴の条痕文土器の普遍的な傾向と思える。第9文化層ではⅡ類が卓越しているが、第8文化層においてみられたⅠｂ類・Ⅰｃ類なども出土している。

以上、二日市洞穴の第8・9文化層出土の条痕文土器を文化層および形態の特徴から四つに分類を行なった。現時点では比較資料がないため、今後の資料の追加を待ってさらに細別、あるいは大別してとらえるべきかについての検討を重ねたい。そこで、ここにおいては、便宜的にⅠａ類を**「二日市条痕文Ⅰａ式」**、以下、**「二日市条痕文Ⅰｂ式」「二日市条痕文Ⅰｃ式」**それに**「二日市条痕文Ⅱ式」**と呼んでおくことにする。

第8文化層および第9化層出土の無文土器ならびに条痕文土器は西北九州で明らかにされている爪形文・隆起線文土器に近接する時期を想定し、東九州における最古の土器群と考える。

二日市洞穴における縄文時代早期の石器

第3文化層から第9文化層の早期の土器群に伴って各種の石器類が出土しているが、その中にあって石鏃は量的な差こそあれ、全ての文化層において認められる代表的な石器である。そこで各文化層出土の石鏃について形態的な特徴を抽出してその傾向をみることにする。

石鏃

石鏃の全体的な形では 1.0cm～ 1.5cmの小形のものと、 2.0cmを越える大形のもの、その中間に位置する中形のものとに大別して把握することができよう。また石鏃の基部に施されている抉りは石鏃の形を大きく左右する大きな要因とみなされる。すなわち抉りの幅が狭くて、深いものと浅いものはいずれも脚部の末端が大きく丸味をおびてくる。一方、抉りの幅が広くて、深いものおよび浅いものは脚部の末端が鋭く尖ることになる。その他抉りがほとんど施されていないものは当然のことながら脚部が明瞭でない。以上の大きさおよび基部の抉りのあり方から規定される分類にもとづき石鏃の形態について各文化の特徴を挙げてみる。

第3文化層から第4文化層（上層）の押型文土器群に伴出する石鏃は大形で、基部の抉りが狭くて深い、いわゆる「鍬形鏃」で代表されるが、中形で広くて浅い抉りのものもみられる。第4文化層（下層）・第5文化層の押型文土器群に先行する無文土器群には小形と中形で、基部の抉りが大きく脚部の末端の尖るものと、小形で素材となった剝片の周辺部のみに加工が集中する特徴的なものが知られ、特に第5文化層で顕著な傾向を示す。押型文土器群の典型的な石鏃である「鍬形鏃」はみられない。第6文化層の無文IIb類に伴う石鏃は、小形のものが多く、しかも基部の抉りは大きくて浅い。第5文化層の石鏃とは異なっている。なお、この第6文化層から、局部磨製の石鏃1点と槍先形尖頭器の基部と考えられる石器が2点出土している。第7文化層の「二日市無文III式」共伴の石鏃はやはり小形で基部の抉りが大きいものが目立つが、大形のものもみられる。土器の形態ほど大きな変化は抽出できそうもない。第8文化層の石鏃は「二日市条痕文I式」に共伴するもので、小形・中形・大形と大きさの上では多彩な面を示すが、基部の抉りは概して広い。先端部が細く、丸味のある大きな基部を有する槍先形先頭器1点が出土している。第9文化層の薄手で平底の条痕文土器群に伴う石鏃では、これまで見られていた小形のものがなく、いずれも中形ないし大形というように大きさの上で違いが指適できる。基部の抉りについては、第8文化層と同様に広くて、しかも浅いものが顕著である。有舌尖頭器5点の出土は第9文化層での特記すべき石器である。

槍先形尖頭器

第8文化層からサヌカイト質の石材を用いた槍先形尖頭器が出土している。全長 8.8mで最大幅は基部近くにあり、2.6cmを測ることができ、丸味をおびる基部の末端へやや幅を狭めながら続いている。

一方、第9文化層から出土している槍先形尖頭器5点はいずれも欠損しているが、明らかに尖り気味の舌状の基部を形成していることから**有舌尖頭器**と判断される。サヌカイト質製の2点は推定復元すると12cm前後の大形になるものと思われる。先端と基部を欠損している黒曜石の有舌尖頭器は5～6cmと推定され、石材と大きさから少なくとも二つのタイプの存在が予想される。

── あとがき ──

大分県玖珠郡九重町所在の二日市洞穴の学術調査は昭和50年3月から53年8月までの間、5回にわたって実施された。別府大学考古学研究室を主体に、長崎大学医学部解剖学第二教室、九州大学考古学教室の協力のもとに行なわれた。調査全般にわたっては地元の教育委員会をはじめ、松木地区の住民はもとより町民全体の多大な援助のもとに進められた。

ここに、二日市洞穴の発掘調査報告書を出版するにあたり、九重町麻生毅町長、時松準作教育長をはじめ、教育委員会の職員を中心とする町職員一同、それに土地、作場場、用具さらに合宿所等の提供の便宜を計って下さった地元町民に対して深く感謝の意を表するしだいである。

本調査に関して終始ご指導をいただいた別府大学賀川光夫教授に衷心より謝意を表する。また発掘調査および報告書の作成は、別府大学考古学専攻生の多大な協力があってはじめてなし得たことを銘記すると共にお礼を申し上げたい。

昭和55年2月

別府大学文学部助教授　橘　　昌　信

二日市洞穴発掘調査参加者および関係者

考古学　賀川光夫・橘昌信（別府大学）、田中良之・定森秀夫・山田克己・杉村幸一・横大路俊明(九州大学)、富永直樹・永峰文隆・盛峰雄・中村和正・清水範行・栗田勝弘・諫山佳明・徳林信道・中山彰宣・山下まゆみ・福島政文・城戸誠・黒田裕司・谷芳樹・林恵子・宮本徳昭・杉本崇・仲里安昭・成尾武信・赤木茂美・石本香子・寺田知恵子・渡辺千恵美・亀井教文・阿部高巌・野村哲朗・栖原理・広田憲昭・栗焼憲児・森脇幸生・綿貫俊一(別府大学)

人類学　内藤芳篤・坂田邦洋・松下孝之・永富史彦（長崎大学医学部）

土壌（花粉）**分析**　畑中健一（北九州大学）

年代測定　市川米太（奈良教育大学）

◀地元▶麻生毅（九重町町長）、時松準作（教育長）、岐部秀一郎（社会教育課課長）、竹尾竜生（前課長）、帆足成生（社会教育課係長）、穴井逸雄（前係長）、古後粒勝（社会教育課）、甲斐素純（社会教育課）、嶋田裕雄（九重町中央公民館長）、小幡鉄也・赤峰武・内恵克彦・小野喜美夫・佐藤富士人・古後保彦（九重町文化財調査員）、河上清久（玖珠町文化財専門委員）、佐藤暁（日出町社会教育課長）、故帆足茂久男・帆足正・帆足保吉・園田ナカ・土井カヲリ、書曲・二日市・室園の地元部落の人々

大分県二日市洞穴発掘調査報告書

昭和55年2月10日　印刷
昭和55年2月20日　発行

著　者　橘　昌信
編集者　橘　昌信
発行所　別府大学付属博物館
別府市北石垣82

印刷所　佐伯印刷株式会社
大分市古国府1155の1